506
271

水守亀之助著

# 新しき岸へ

## 代時愛戀〔1〕

新潮社出版

306-271

# 新しき岸へ

第一編

## 戀愛時代

水守龜之助著

大正
11. 10. 6
内交

# 第一章

夜半近くになつて、岡本眞吉は大阪から出る舊式の伏見通ひの河蒸氣に乘り込んだ。何となくタ立でも來さうな眞夏の夜なので、ぎつしりと鮪でもつめこんだやうに、男女の乘客がいぎたなくころがつてゐる中に割込むと、汗臭い息のこもつた暑さにうだつて了ふやうな苦しみを嘗めさせられた。初めのうちは硝子窓から雨後の濁流が漲つてゐるのが、時々雲間を洩れる月光をうけて美しく光つてゐるのを氣持よく眺めたり、烟管をカン〳〵はたきながら、講和談判の噂や、不景氣を溢しなぞしてゐる老いたる行商人の話をきくともなく耳にしたりしてゐたが、それにも飽き果てゝ了つた。日露戰爭が終つてから間もなかつたが、世間は大變景氣が好い筈なのだがと不審に思つた。が、それすらも今の自分には何のかゝはりもないことのやうに思はれるのであつた。

眞吉は小さな風呂敷包を枕にして薄緣一枚の固い床に横はつて了つた。船の流れを截る音と機關の響とが一緒になつて轟々ときこえるので、彼の默想も破られがちであつた。併し、實際は、もう何んにも考へたくはなかつた。かうして暫くの間でも、知る人のゐないところで、苦しい眠りでも貪りたかつた。それが出來れば彼には何よりの幸福なのであつた。

ぢつと眼を瞑つて見た。が、網膜に描き出される、さま〴〵のいやな幻は、半醒半眠の境に陷る

時につけ込んでは現れた。それは全く心を惱ませるやうなものばかりであつた。うなされさうになつては、おびえたやうに眼をさました。とし子の不眞實を詰責すべく彼女のところへ出かけた筈なのが、いつの間にか、その親達や、親戚の連中が並んでゐる中に飛び込んで、散々罵詈されることになつたり、とし子がわざと淫らな姿で、見知らぬ輕薄な青年とふざけちらして見せつけようとするのを、我を忘れて飛び蒐つて行かうとするところで、ハツとして自分に返つたりすると、氣も狂ふやうな惱ましさに襲はれるのであつた。

冷靜に考へて見ると、とし子が思ひがけない背信の手紙を寄越した位で、自分の世界がまつ暗になつて、覆されて了つたやうに感じて、おち〳〵落ちついてゐられないで、かうして飛び出して來た自分の意氣地なさ、輕佻さが、今更のやうに深く恥ぢられるのであつた。かくて、だん〳〵自己反省の念が強まつて來ると、これから京都に山西を訪ねて、さうした相談を持ちかけなぞしたらどんなにその愚劣さを笑はれるか知れないと思ふのであつた。

船は、相變らず鈍重な調子で進行を續けて淀河を遡つて行つた。途中でも、幾らかは乘客があるらしかつた。曉方近くなつてから眞吉はとろ〳〵と眠りに落ちて行つた。新しい客を送つて來た船頭と、こちらの船員とが何やら高い聲で叫び合つてゐるのも夢現の間にきいてゐた。

よほど黎明が近づいて、あたりがほの白くなつた時分であつた。眞吉は劇しく船窓をうつ雨風のしぶきにすつかり眼をさまされて了つた。その音はきいてゐるだけでも爽快だつたが、窓を開けることが出來ないので、船内は一層むん〳〵するやうな暑さに閉ぢ籠められてゐた。あたりを見廻すと、皆な汗をだく〳〵流しながら苦しさうな寢息を立てゝゐた。

『もう伏見は直ぐですかね。』

傍に寢てゐた田舍者らしい風體の若者が、むく〳〵と起きあがつた拍子に、思はず視線が合つた、そのばつの惡さに、眞吉はかうきいて見たのであつた。

その男は、『さあ、もうぢきだすやろか。』と、寢呆け聲で云つて、まるで眇（すがめ）のやうな眼付をして、人の息や、雨に曇つた窓を見えないと知りながら透して見なぞするのであつた。

もう伏見に近づいてゐると云ふことは、眞吉にも直覺された。硝子の曇りを拭つて見ると外側は縱横に雨の滴が流れてゐたが、もう雨も止んでゐるので、ぽつ〳〵對岸の人家の密集した光景などが見えるやうになつて、何となく町近くなつたことが感じられるのだつた。それに、夜があけた頃に到着すると云ふことを、乘船する時に確めてゐたので。

暑い、穢い船の中で寢苦しい一夜をやつと明かして、初めての土地へあがるのだと思ふと、眞吉は事情が事情だけに、如何にも放浪の旅に出てゐるのだと云つた感傷的な氣持が湧きあがつて來るのであつた。それに目下の境遇から云つても、さうした感慨をよび起されるのは當然であつた。

暫くすると、次ぎ〳〵と乘客が起きて下船の支度をし初めた。饒舌るやら、動くやらで、立てば頭の支へさうな、狹苦しいところが急に混雜するやうになつた。が、眞吉は隅つこの方でぽつねんとしてゐるより外はなかつた。急いで先に下りる必要もなかつたし、小風呂敷一つが身上だから支度をする面倒もなかつた。

夜はすつかり明け放れた。水彩畫のやうな樹木のある崖が現れたかと思ふと、やがて發着所へ着いた。すつかり晴れた爽凉たる水邊の朝あけは流石に眼覺めるやうに氣持がよかつた。流れの上を通つて來る風は、そこらにある樹々の枝葉や、フラフや、衣袂をも飜させる程だつた。

人家の多い方へ出て見ても、想像したやうな昔の伏見の面影はどこにも認められなかつた。唯、何となく荒れ廢れた町と云ふ感じが淡い寂しさを抱かすのに過ぎなかつた。眞吉は電車や汽車に乘るだけの金の持合せもどうかと危ぶまれる程なので京都に通ふ道筋を尋ねて、その方へすた〳〵と歩いて行つた。町からは直ぐ離れた。時々電車が後からやつて來ては追ひ拔けて行くのを幾臺もやり過して、田舍らしい街道へ出ると路傍の草叢にはまだ露があつたが、じり〳〵と照りつける日光に路上は見る〳〵乾いて行つた。足袋を穿いてゐない足は直ぐほこりまみれになる程だつた。

間もなく稍々平野らしい眼界の開けたところへ出た。遙かの彼方に夏らしい靄にぼかされて、ゆるやかに、併し、巨然として聳えてゐるのは、比叡を中心にして左右にのびた山脈ではあるまいか



と思はれた。

歩きながら物思ひに耽つてゐたので氣付かなかつたが、日影が照つたり、かげつたりするのが頻繁になつて來たので、空を見上げると、いつの間にか、むら〳〵と夕立雲が現はれて、もうポツリポツリと帽子の上に音をたてる程大滴のやつが落ちて來たのであつた。こゝらで一つ瀧のやうな雨にうたれでもしたら、骨の髓から洗はれたやうな氣持になるかも知れないと思つたりした。

やがて、雨はだん〳〵烈しくなつて來た。日の光りもうすぐらくなり、稻田を渡る風は凄まじく雨脚を横なぐりに煽つて、見る見るうちに、路上は流れるやうになつた。眞吉はたまらなくなつて、とある一軒の休み茶屋へ駈け込んだ。つばの廣い麥稈帽を冠り、洗びざらしの派手な白絣の着物を尻端折にしてとび込んで來に珍客を一目見た茶屋の主婦は頓狂な聲で、

『あれ〳〵、あんたまるぬれだつせ。一體どこへ行きなはるのや。』と、つけ〳〵として調子で、そこらを片付けながら叫ぶやうに云つた。

主婦の聲に眞吉はちよつと面喰つた。汚れたハンケチで、顏や手を拭きながら、

『これから京都へ行くんですがね、早く止んでくれないと困るがなあ。』と、わざと落付きを見せるやうに云つた。

『京都だつか。御苦勞なことやな。まあゆつくり休んで行きなはれや。』

軒先に出してゐた二脚ばかりの床几を土間の片傍へ納ひ込んだ主婦は、初めてうさんなものでないと見てとつたのか、かう慣れ〳〵しく親切に云つた。

『何かお菓子でも貰ひますかね。』と、眞吉はわざ〳〵起つて、店頭に陳列した菓子函の方へ見に行つたりした。

主婦はまるで醬油のやうな濃い色をした番茶を汲んで來たり、眞吉が註文した駄菓子を少しばかり盆の上につまみ出して來たりして、ちよこ〳〵と動き廻るのであつた。

雨は一頻り車軸を流すやうに降つた。その凄まじい音をたてゝ地上に濛々と煙のやうな飛沫をあげる光景は少し先をも見えなくする程だつた。やがて、その雨脚も見る〳〵うちに駛走するやうな早さで遠のいて行つた。あたりは次第に明るくなつて來た。

『えらい夕立やな。』と、主婦はそこに佇んだまゝ名殘をとめた野面をぢつと眺めてゐたが、眞吉の方へ向き直つて、『あんたどこから來やはつたのだつか。』と、じろ〳〵と見窄らしい風體を見ながら訊いた。

『大阪からですがね、京都に友達がゐるのでそこへ行かうと思ふんです。』眞吉はかうして休んで見ると空腹を覺えるので、惡甘いやうな安砂糖の味のする駄菓子を頬張つては、矢鱈に、がぶがぶと茶を飲みながら云つた。



『あ、大阪の方だつか。さうやと、あつちにも餘りえゝことはおまへんのだつしやろな。京の方に何やあてがおまつか。』

主婦は眞吉に話しかけるやうな、また半分は獨語するやうな調子で語るのであつた。

眞吉はその言葉に對して、どう答へて好いかちよつとまごついた。何となく、直ぐ應じて答へるのに戸惑ふやうな、ぴたりと來ない感じを覺えたのであつた。その場は好い加減の返事をしてごまかして了つたが、後から考へると、主婦の云つた言葉の意味が領解されるやうな氣がした。それは、この見窄らしい、元氣のなささうな青年の風采を見て、不景氣の爲に失職して大阪から出て來た職工とでも思ひ込んだに違ひないと感じたからであつた。『成程、主婦の觀察も無理はないな。矢張り、自分も何かを失つて、何かを求めて彷徨ひ歩く……いや、それに違ひない。』と思つて、眞吉は苦笑せざるを得なかつた。が、そんな風に見られることは、客觀的に見れば興味もあつたが、主觀的に考へると、彼は可なり矜持を傷つけられるやうに感じた。神經質で、敏感な眞吉にとつては、それも自然なことであつた。

再び日が照るやうになると、眞吉はそこを辭した。そして、單調な道をとぼ〳〵と歩いて行つた。が、夕立の後の洗はれたやうな清らかな大氣はすべてのものを新鮮に見せてゐた。空も、山も、野も、家も、簑を着て、稻田を見廻つてゐる百姓の姿にまで、さうしたものが感じられるのであつた。

眞吉はこの邊の地理には全く暗かつたが、それでも、だん〳〵目的地に近づいて行くことだけは明瞭なので、踴躍するやうな心持になつてゐた。

彼方の野中に高い塔の聳えてゐるのを發見した時と、ふと振返つて、ずつと後の山の上に七彩の色あざやかな虹の橋がかゝつてゐるのを見た時とは、眞吉も一種の憧れ心地を覺えて、塵と汗とにまみれた都會の生活をぬけ出して來てゐることを、今更のやうにはつきりと感じた。

やつと、眞吉が京都に着いたのは午過ぎであつた。山西の宿を訪ねるのは初めてだつたが、多少土地の案内を知つてゐる眞吉は大してまごつかないで探しあてることが出來た。見ると、古風な建て方の家で、裏に近いところに別の入口があつて、そこに山西の名刺が貼りつけてあつた。入ると、そこは狹い庭で直ぐ緣側になつてゐた。障子の開け放たれた二間續きの室内は流石男世帶らしくとり散らかされてゐた。幾つかの筒のやうに卷いた紙や、繪具や、筆立や、筆洗などもほこりを被つたまゝ置かれてあつた。

眞吉は山西の姿が見えないので聲をかけて見た。が、返事がない。變だなと思ひながら、そこらを見廻すと、緣の隅の戸袋のかげには、七輪や、土鍋や、炭籠などが雜居してゐるのが眼にとまつた。はゝあ、先生自炊をしてゐるのだなと思つた。——そこでまた大きな聲で怒鳴つて見た。さうして立つてゐると、歩いてゐた時よりもだく〳〵と汗が流れ、顏は赫々とほてり出すのであつた。みづおちのあたりや、腋の下や、背中などの滴になつて流れる汗が、何かに這はれるやうで氣持が惡かつた。

そこへ、一つ咳拂ひする聲がして、上品さうな小さな婆さんが胸をかき合はせながらひよつこり顏を出した。

『山西君はゐませんでせうか。』と、眞吉はぶつきら棒に云つた。

『山西さんはお留守どすが……。』と、婆さんは無愛想な調子で云つた。

『留守ですか。そりや困つたな。』思はず眞吉は溜息を吐いた。

『おあがりやして待つてなはつても好えんどすけど、まんわるう今晩はお泊り番やよつてな。』

『泊り番ですつて？　どこかへ行つてゐるんですか。』

『まだ御存じやおへんのどすか。山西はんは近頃學校へ出てはるのどつせ。』

婆さんの話によると、山西は、洛西の田舍に近いところにある小學校へ出てゐると云ふのであつた。眞吉は意外に感ぜずにはゐられなかつた。畫家としても、彼はもう相當にやつて行けるやうになつてゐると聞いてゐたゞけに、小學校の教師なぞに落ちて了つたと云ふのは、何だか氣の毒でも

あり、よほど窮した揚句に初めたのに違ひないと想像されるのであつた。

何しろ山西がゐないのは眞吉には可なり大きな失望だつた。それでも、こゝ迄來ればもう占めたものだと云ふ安心が出來たので、直ぐその足で訪ねて行くことに決心した。

學校は嵐山の方へ行く道から、少し傍にそれたところにあることも分つた。眞吉は掉尾の決心のつもりで、乏しい財布を惜まずに、うどんを食つて腹をこしらへ、それから電車に乘つて行つた。學校は相當に大きかつたが、暑中休暇のことで、まるでがら空きだつた。構内へ入つて見ると、幾つもの建物があるので、どこへ行けば山西がゐるのか見當がつかなかつた。で、暫くまご〳〵してゐるうちに、ピアノの音がするので、それを便りに行くと、やがてその窓の下へ出た。のびあがつて覗き込むと、瘠形の美人らしい女教師が夢中になつて鍵盤を叩いてゐる横顔が見えた。その熱心さを見ると、聲をかけるのが躊躇された。

遂に思ひきつて、『ちよつと伺ひますが……』と聲をかけて見た。すると、女教師はびつくりしたやうな眼をして、此方へ汗だらけになつた顔を向けた。

『あの、山西さんはどにゐらつしやいませうか……。』と、眞吉は叮嚀にきいた。

『あ、山西さんですか。直ぐそこですが……。』と、わざ〳〵起つて來て教へてくれた。

汗ばんで、赤くなつた女教師の顔は妙に艶かしく見えた。聲も音樂的で、如何にも快活らしい感



じがした。眞吉は丁寧に頭を下げてから、いそ〳〵と教へられた方へ行つた。

『おゝ、岡本君！』と、眞吉の顔を見ると、山西はその突然の來訪を、さも解しかねると云つたやうな表情をして叫んだが、『よう分つたな。さあ、おあがり。暑かつたやろ。』と、眞情の籠つた調子で云つた。

『驚かしてすみませんね。』眞吉は內心の嬉しさを抑へかねて、却つて、何と挨拶をして好いか分らないやうな氣持になつた。

そこは疊の敷かれた六疊ばかりの宿直室だつた。山西は浴衣一枚の無雜作な寛いだ風をして、寢轉んで雜誌を見てゐたらしかつた。眞吉は手短かに今日訪ねて來た經路を話して、

『一度、是非會ひたいと思ひましてね。いろんな相談をしたいこともあるので……。』と、打解けた、親しみのある調子で話しかけた。

『そりやよかつたな。僕も君がどうしてゐられるかと時々思ひ出しては心配してゐたんです。話は後でゆつくりすることにして、一つ裸になつて身體でも拭いたらどうです。京都は暑いからな。』と、山西は旅の疲れを癒らふ爲に、もう心の中でいろんな氣遣ひをしてゐるらしかつた。

『こゝにゐても差支へないんですかね。』

『ちつとも構やせん。遠慮なんかせんでもよろしい。』

『あなたがこんな處に居られるとは夢にも思はなかつたですよ。』

『そりや尤もや。併し、僕かて長くやつとる氣はない。まあ、腰掛見たやうなものやからね。それに、外の先生と違つて、僕は圖畫だけ受持つとるので樂なものや。それはさうと、君は學校の方は……。』

『學校はいやになりましてね、つまらなくなつて了つたんですよ。いろ〳〵事情もあるんですし……。』

『さうかな、まあ、後で話をきかう。』と、山西は不安に思つてちよつと顏を顰めて見せた。

直ぐ山西は小使の爺さんを呼んで、小聲で何かを吩咐けたり、自分でもあたふたと外へ出て行つたりした。眞吉が何も構つてくれるなと云ふと、山西は叱りつけるやうに云つて手を振つたりした。

もう幾年と會はない山西が少しも變らない兄らしい友情をもつてゐることは、些細な表情や、言葉のはし〴〵にも濃かに現はれてゐた。眞吉はそれが何よりも嬉しく、力强く思はれてならなかつた。唯變つてゐるのは彼の風采だつた。田舍の百姓の伜にしては山西は珍らしく白皙で、髮や眉の濃い、鼻の隆い、立派な容貌の持主だつた。それが、構はないせゐか何となくちゞむさく見えるやうになつてゐた。眞吉は髯をのばしてゐるのと、苦勞が滲み出してゐる爲に、顏變りがしたのではないかと知らとも思つた。『彼にだつて、自分より幾層倍の苦勞や、惱みやがあるか知れやしない。』と、眞吉は心の中でしみ〴〵と思はずにはゐられなかつた。六つか七つ年齡が違ふので、普通の友人と云ふには餘りに彼は大人だつたが、鄕里では隣同志で、子供の時から心安くしてゐた。それに、山西は幼少から繪畫を學んで俊才の面影があると云ふので、眞吉の祖父に愛され、父からも友達のやうにされ、そしてまた、引續いてその子の眞吉とも深く馴染むやうになつたのである。で、親子三代とも親しんだ山西に對して眞吉が今日まで友達以上の親密さと、信賴とを抱いてゐるのは無理もないことであつた。のみならず、小學校に通つてゐた時分には繪畫を習つたこともあるので、眞吉にとつては彼は師匠にも當るのであつた。

やがて、山西は風呂敷包みを小脇に抱へて大急ぎで歸つて來た。そこへ小使も鞠躬如として茶を運んで來た。さうした樣子を見てゐると、眞吉も稍氣持が落ちついて、場所柄に伴ふ窮屈さは次第に消え失せて行つた。

『近頃、お父さんはどうかな。相變らずかな。なか〳〵えらい人やがな。』と、山西はだしぬけに云ひ出した。

『おやぢにも困りますよ。』眞吉は忘れよう忘れようとしてゐたことを誘ひ出されるやうに感じて、急に暗い氣持になつた。

『あれからもう一年半になりますな。』と、山西は胡坐をかいて茶をなめるやうに飲みながら、感慨

深さうに云つた。
『さう、監獄を出てから一年半ですね。早いもんだなあ。……もうおやぢも駄目ですよ。』眞吉は吐き出すやうに云つた。
『僕も一年あまり會ひませんがな、手紙でもあげようと思ひながらつい失敬して了つて……矢張、いと子さんと一緒だらうな。』
『さう、一緒です。あれでおやぢは呑氣だから、平氣らしいですよ。この間も、何か計畫してるなんて夢のやうな事を書いて寄越しましたよ。』
『ははははッ……。』と、山西はさもをかしさうに笑つた。眞吉の父に關するさま〴〵なことが思ひ出されたらしかつた。で、
『氣が大きいからな。些事に拘泥しない、豪傑風の人やでな。』と、讃美するやうに云つた。
さう云はれると眞吉は却つて氣詰りな思ひをしなければならなかつた。考へて見れば、父に對して好意を持ち、よく理解もしてゐる人と云つたら、山西位のものだつた。で、父の事になると萬事ひけめを感じ僻むやうな氣持になる眞吉も、相手が山西である場合には、そんないやな思ひをしないでも濟むのであつた。併し、ある罪に坐して、監獄へ這入つて六ケ月の苦役をつとめて、そこを出てからまだやつと一ヶ年半しかたゝない今日では父の事を云はれるとそれが、たとへ山西でも彼の心



に疼くやうな痛みを感じさせるのであつた。
それから續いて、鄕里の誰彼の噂が出た。するうち、小使が燒するめや、豆腐の冷奴なぞで、簡單に酒の用意をして運んで來た。それには眞吉も驚いた。と云ふのは山西は父なぞと交つて十八九の時から飲み初めて、酒と云へば殆どつきものゝやうになつてゐたが、わざ〴〵かうして學校の宿直室なぞで酒を出されて見ると、自分が酒好きになつてゐることをいつの間にか山西が看破してゐるのではないかと云ふ氣がしたのであつた。
『酒なんか好いぢやありませんか。』と、眞吉は遠慮してさも驚いたやうに云つた。
『君かていけるですやろ。お父さんの子やもの。いけることは聞いてますぜ。』山西はかう云つて早速酌を初めた。
『こりや、すまないですな。そんなに僕はのめるんぢやありませんよ。ほんの少し位なら……。』と、辯疏らしく云つて、『それにこんなとこで飲んぢや惡いやうな氣がしますね。』
『構やせん。僕の酒はもう學校でも通りものやで……女教師がゐたかて構はん。あのハイカラもも う歸つたやろ。』と、山西は呑氣さうに云つた。
眞吉は胸に深く藏つてゐる自分の祕密を語るには、かうした酒間に於てでもなければ話せないかとも思つた。それに、父のことを山西が話し出してくれたことは、肝腎の話に近寄つて行くのに都

合がよかつた。父のことを云へばどうしても中田の伯父と云ふ順番だから、自然、とし子の噂にもうつることになる。そこに自分の提げて來た問題の眼目があるのだ。さう考へた眞吉は胸の中で、話をきり出すきつかけを、改めてつくり出さうと腐心しなければならなかつた。

『ほう。君も酒を飲む手付きが、大分お父さんに似て來たぜ。なか〳〵有望ぢやな。』山西は興じるやうに云つた。

『そりや、困るな。そんなとこだけおやぢに似るなんて……。』

『何に、酒もえゝものや。お父さんのやうになつても困るが……お父さんだつて、酒あるもよし、またなくもよしと云ふやうな仙骨を帶びた心持になられるとえゝんやがな。』

『實際ですよ。おやぢにとつてはすべての財寶名譽よりも一杯の酒の方が好いんですからね。』

『全くさうや。併し、そこがまた俗人と違つて面白いところやが……惜しいもんだ！』山西はまたしてもかう繰返して、心の底から惜しむやうに云ふのであつた。

知らず識らずのうちに眞吉は盃を重ねたので、眼がちら〳〵する程酔つて來た。室内に射し込む夕方の外光が、何となく一つ事に氣持を集注させないで放散させるやうな慌しい感じを與へた。矢張り、二人の間には、これと云つて纏まりのないやうな話ばかりが續くのであつた。

併し、父の勇三郎に關する話題はいつ迄話してもそれからそれへとつきなかつた。それ程父の過去は波瀾に富んだ變化ある道を踏んで來てゐるのであつた。眞吉には、憎しみもあれば、同情もあつたが、卒然として現在の境遇に想到すると、酒に酔つてゐるせゐもあつたが、涙の滲んで來るやうな感傷的な氣持に浸されるのであつた。宏大な自分の家がありながら、そこに住むことも出來ないで、そこから二十丁ばかり隔つた山麓の一軒家に白痴である妹のいと子と、新助と云ふ老いたる下僕との三人きりで果樹の栽培などをしながら汚名と失敗の堆積のやうな半生の鬱悶を慰める爲に酒ばかり飲んでゐる父のことを想ひ浮べると、そこには完全な悲劇の主人公が浮んで來るのであつた。それに眞吉といと子の母である妻も數年前に極度のヒステリーの爲めに自殺して了つたのであつた。それが一層父を悲劇的にしたことは云ふ迄もない。その上に、父が若い時から描いた夢を自分の子の上に實現しようとした望みも、今や無残に壞されようとしてゐることを思ふと、眞吉は流石に父に對して氣の毒だと思はないではゐられなかつた。權勢と名譽と事業——それが父の生命をかけて夢みてゐた最大最高のものであつた。で、眞吉をも、政治家とか事業家にならせようとしてゐたのだ。無論眞吉の方でも父の志を體して、それを立派に實現しようとする野心と希望は少年時代から抱いてゐた。が、最後の破産と高等學校の入學試驗の失敗と云ふ禍ひが同時に襲つて來たのであつた。それから母方の伯父の勸めによつて、少額の學資を貢がれて、關西大學に席を置いて法律を學ぶやうになつた。併し、いつの間にか彼の心に芽をふき出した人生に對する深い懷疑の心持はさ

うした學問に沒頭することを次第に厭はせるやうになつた。彼はなまけ放題になまけるやうになつた。伯父の信用もすつかり失つた。そして、今また伯父の娘で幼馴染の從妹であるとし子の愛をも失はうとしてゐるのである。この際彼が新しい友達に話すことを止めて、わざ〳〵山西を選んだのは當然であつた。孤立無援で、一人の親すら頼りにならない彼にとつてはすべての事情をよく知り、そして、理解と愛情をもつてゐる山西は、唯一の相談相手でなければならなかつた。併し、今かうして酒を飲みながら、いろいろ話してゐると、その山西も大した頼りになる男とは思はれないやうな氣がしないでもなかつた。それでも、縋りつきたいやうな情味と懐かしさを感じさせるだけの力は十分にもつてゐるやうに思はれた。

眞吉は幾度かとし子の問題を話し出さうとしが、いよ〳〵となると、山西の方から、恰も口を開かせまいとするかのやうに、とんでもない、別方面の話をもちかけて來るのであつた。父に關する話がすむと、今度は自分の昔話を初め出した。さうなると、山西の眼はなつかしい追想に輝き、言葉も一層滑かになつて來るのであつた。

『……何と云つてもあの時分はよかつたぜ。僕かて、秀才で美少年で誰一人ほめないものはなかつたでな。さう〳〵君にも繪を教へたことがあるな。君はなか〳〵うまかつた。政治家なんて云ふより、藝術の方が向くやうなたちやつたがね。』山西は如何にも昔を懐しむやうに云つた。



眞吉は思はず膝を乘り出すやうにして、肩を聳やかしながら、

『齊際さうでしたね、僕は今ぢやもう法律や、政治はきらひになりました。だから學校もほつたらかしなんです。』と、寧ろ得意になつて云つた。

『そんなら、今何をしてはるのや。』

山西は少し驚いたと云ふ風で、詰問するやうに云つた。

『今ですか。それはちよつと困つたな……實はね。友人と小さな新聞のやうなものを初めましてね。』

『新聞？　そんなことをしてうまく行くかな。併し、えらいな。君も文章を書くのかな。』

『書きますとも、まあ、ちよつと主筆と云ふ格ですよ。ははは。』

『主筆とはしやれてるな。それはえゝとしても學校だけはやつたらえゝことはないかな。』と、山西は思案するやうに頭を傾げた。

『ところが、その學校ですがね……どうでせう。僕はいつそ、東京へ出ようと思ふんですが、大阪なんか商業地ですからね。いつ迄ゐたつて望みがありませんよ。』

『それもさうやな。東京はえゝな。僕もあの時から東京に居ればよかつたがな。今頃は大分えらくなつてるかも知れん。』と、東京と云ふことから山西は殆ど十年前のことを思ひ出したのであつた。

東京で苦學をしてゐた弟の達三を頼つて、田舍繪師を止めて、ほんとうに修業しようと思つて郷里

を出奔した。が、思ふやうに行かないので空しく舞ひ戻つて來て、今度は京都に留ることにして、梅年畫伯の門に入つたのであつた。矢張り秀才の評判の高かつた弟の達三も苦學の爲に肺結核になり鄉里へ歸つたが一時はよくなつて、小學の敎員などをしてゐた。ところが二三年もちこたへたゞけで病氣が再發した爲に、今から三年前に死んで了つたのであつた。片腕を失つたにも等しいその時の落膽と悲哀は未だ山西の頭から離れないらしかつた。

『達三が生きて東京にでも居れば君かて東京へ行くのは樂やがな。それに、あれは文學をやつてゐたからね。』と、哀しさうに云つて涙を湛へた眼をしばたゝいた。

『本當ですね。達三君が居られるとよかつたのだが……。』眞吉も何となく身につまされてきいた。

『東京行の決心はまあえゝやろ。僕も後から行きまつせ。京都にゐても、僕見たいな性質の人間はどうも發展が出來ん。美術家と云うても、固陋で、俗物が多いから……繪の方も進んで來るでな。近頃は洋畫の方でもセザンヌや、ゴーホや何かつてやかましく云つとるやないかな。』と、山西は藝術の話になると自然と興奮して來るのであつた。

『それぢや決心するとするかな。東京行きを……。』と、眞吉は呟くやうに云つた。

『伯父さんの方から矢張り學資は續けてくれるやろ。』山西は無雜作にさうきめて云つた。

『いや、その方はもうあかん。僕は信用をなくして了つたので、どうもならんことになつて了ひましたよ。』眞吉は田舍言葉で絕望的に云つた。

『そんなことはないやろ。何てつたつて甥のことやでな。』と云つてから山西は四五本目の銚子に酒を注いだ。

そこで眞吉はぎくりと胸に來るものがあるのを覺えないわけには行かなかつた。同時に、伯父と、とし子に對する怒りが新しく燃え立つて來るのを覺えないではゐられなかつた。その心持を露骨に現はすやうな調子で、

『僕はもう伯父の世話になんかならん覺悟です。矢張りおやぢと同類と思つてゐるらしいですからね、それも仕方がないでせうけれどね。併し、頑固な伯父だけならまだしもですが、とし子迄が僕を拒否しようとしてゐるんですから嫌になつて了ひますよ。』と、思はず云ふのを憚つてゐたその名を出して了つた。

『とし子さんが……』と、ちよつと不審がつたが、『そりやさうだらう。女なんてものはどだい當になりやせん。』山西はそんなものは問題にならないと云ふやうに、ひどく侮蔑した調子で云つた。

さう云はれて見ると、眞吉は張合拔けがした。山西がどんな根據から、女性を罵るのか知れない。また、その罵りにどれだけの理由が裏付けてあるのかも分らない。併し、少くともとし子と云ふ一個の女性は、眞吉にとつては眞劍な問題でなければならないのだ。で、そんなに輕々しく一言の下

に女なんてものは……と云つた調子で云つて退けられると、まるで、びしやんと鼻先を折られたやうに感ずるのも無理はなかつた。が、この際、若し、とし子のとらうとしてゐる態度を是認して、自分の方が無理だ抔と云はれた時の惨めさに比べて見れば、たとへ一般の女性に對することであつても悪く云つてくれた方がまだしも助かるやうな氣もした。兎に角、山西の方が何だ、つまらないと云ふことになりさうなので、眞吉は俯向いて唯、ふゝんと、鼻先で冷笑して自分の氣持をごまかして了つた。

山西はずつと自分ひとりで語をついで話し續けた。『つまりだすな。女と云ふものに就いて、君は澤山智識をもつて居られんから無理もないだらうが、獨立した考へをもつて居らんのや。で、いろんな周圍の影響や、眼の前の利害や、虚榮のために動かされ易い。僕だつてこれで失戀したんやからな。ははは。そりや、本當やぜ。あの下田の娘ね。今、中學校の先生の細君になつてゐる……あれが初め僕に戀してゐたやうなわけでな……ところが僕の方は一向發展せんし、畫工は金が儲からん。そこへ來ると一方は試驗さへ通れば立派に中學校の先生になれる。それでつまり、傍からも勸めて僕の方は違約して、一方と結婚して了つたんや。僕かて、口惜しくないでもなかつたが、何も云はなかつた。云つたところで初まらんでな。そんな女はとても相手にされんからな。』と、言つたが、山西の顏には寂しい微笑が漂つた。

『そんなことがあつたんですかね。少しも知らなかつた』と、眞吉は實際に意外の話なので、何んと答へて好いか分らなかつた。下田と云ふ鄕里の酒造家に一人の娘があつたことは眞吉もよく覺えてゐた。その邊きつての美人と云ふ評判の娘で、女學校へも通つてゐた。そのハイカラな血色の好い、愛嬌のある顏はちよい〳〵道なぞで見かけた記憶もあつた。が、そんな祕密が潜んでゐようとはこれ迄少しも知らなかつた。表面は何氣なく裝つてゐても、さうした女性觀をもつやうになつた山西は、その女の爲めに可なり深い傷手を負つたのに違ひないと想像された。

『それでやな。』と山西は、盃をもつた手を思はずふるはせる程調子を强めて、『君もえゝ加減にして置きなはれ。どんな事情になつてるか知らんけど、とし子さんのことでくよ〳〵したつて仕樣がないやないか。これから、大いに活動せにやならん青年が……もうそんなことは止めにしよう。さあ、もつと盃を重ねなはれ。』と、調子づいて來た山西はぐつと飲み干した自分の盃を彼の眼に前につきつけるのであつた。

『こりや、こまつたな。』と、盃をうけた眞吉は、半ばてれながら、苦笑を浮べるより仕方がなかつた。

今はもう話すのを止めた方が好いと眞吉は思つた。さつきから次第に据つて來た山西の眼を見ると可なりに醉つてゐることが分つた。醉つてゐるからこそ、自分の失戀話を打ち明けるやうな氣持

にもなつたので、彼とても醒めれば多少はきまりの惡い思ひをするのかも知れないとも思つた。眞吉は急に酒の醉ひが醒めたやうな白けた氣持になつて了つた。

『そんなことをくよ〳〵しなさんな。伯父さんだらうが、何んだらうが構やせん。そんなものはすてゝ置いて男らしくやるに限る。明日は一つ祇園の藝者でも見せてあげよう。藝者もえゝからな。はははッ。』と、山西は顎をしやくるやうに顏を仰むけて笑つた。

祇園ときくと、眞吉もちよつとショックをうけた。實際に連れて行かれでもしたら、可なりてれるだらうと、もうそんな事迄氣にし初めるのであつた。

日が暮れたと思ふともう九時を過ぎてゐた。眞吉は遂に肝腎の話にふれることが出來なかつた。酒と疲れとで、ごろりと横になつて了つた。山西は寢床をのべて、毛深い胸や、脛を露はにして大の字になつたが、直ぐ大きな鼾をたて初めた。何と云ふ自由でのんきな學校の先生だらうと眞吉は思つた。電氣の光をうけて、てら〳〵と光る脂ぎつた山西の顏には、昔のやうな美少年の面影はもう見られなくなつてゐた。彼の語つた失戀の古傷は、よし消えて了つてゐるとしても、志を得ない焦慮や煩悶が可なり、彼の生活を荒ませてゐるやうに觀察されるのであつた。祇園へ連れて行くなどと云ふことも、口先ばかりの戯談ではなくて、時々そんなところへ行つてゐるからに違ひないとも想像された。そんなことを考へてゐるうちに眞吉も深い眠りに落ちて行つた。

夜があけると、もうぢい〳〵と云ふ蟬の聲が校庭の樹立の方に起つてゐた。後の暑さを思はせるやうな赫とした天氣は、カーテンの隙間から見える眩しい光をもつた空の色でも分つた。やがて、山西も眼を覺ました。すると二人は、昨日の愉快だつたことや、またちよい〳〵思ひ出す知人の噂や、京都の名勝なぞに就いて、寢床の中でぽつり〳〵話し合ふのだつた。

『早くこんな學校なんか止めて、繪をかきたいなあ。』と、山西は突然、心の底から出るやうな聲でしみじみ云つた。『繪の方が何とかならなければ仕樣がない。こんなことなら、百姓をして牛の尻をたたいて居る方がよつぽどえゝからな。併し、僕もやるぜ。展覽會の當選ばかりを氣にして描いてゐるやうな連中とはちつと違ふんやでな。』と、愚痴やら氣焰めいたことを獨語するやうに云つた。

それを聞きながら、眞吉は矢張り自分の問題で心は占められてゐた。とし子に對する返事の文案なぞも自然考へるやうになつた。『一切のことを忘れてくれ』とか『私の身にもいろ〳〵の事情がつき纏ふのを女の弱さに斷ちかねて』とか、『從兄妹の間柄だから矢張り兄弟のやうな友情をもつて交はりを續ける方が自然だから』と云つた表面だけはきれいで、その底には冷淡な意味を含ませた數々の文句が生き物のやうに眞吉の明晰になつた頭に浮んで來た。それに對して、一々彼女の弱點を辛

辣に衝きとめるやうな言葉を投げつけねばならぬと眞吉は考へた。

朝飯を食べて暫くすると、二人は打ち連れて學校の門を出た。山西は洋服を着てゐた。その姿は昨日うけた感じとはまるで違つた、何となく紳士的で秀才の面影をとめてゐるやうに思はれた。電車で山西の寓居に向つた。行つて見ると學校とは違つて一層落付くやうに感じた。山西のお手傳ひをして眞吉も掃除をしたり、火を起して晝飯の支度を初めたりした。それがまた眞吉には何となく樂しかつた。大阪に於ける徒らに喧噪で混雜な生活の雰圍氣とは違つた一種ほこりつ氣のないすがすがしさと簡素とが、山西の生活にあるやうに感じられた。そして、いろ〳〵四條派の繪のことなどを聞いてゐると、少年時代の夢想がまた新に甦つて來た。山西に就いて繪を學んだ時分いろ〳〵名人の話をきくと、直ぐそれに倣ふつもりで、朝早く起きて直ぐ繪筆を採ると云つたやうな純粹な氣持も懷かしく思ひ起された。すると、現在の何の方針もなく、唯、ぐらついてばかりゐるやうな自分が極端に厭はしいものに思はれた。

やがて、費過ぎに二人が暑さを凌ぐために氷を飲みながら打ち寛いでゐる時、眞吉は漸く思ひきつて、とし子のことを持ち出さうと云ふ氣持になつた。

『實はね……とし子の問題なんですがね。』と、眞吉は口を切つた。

眞吉の語りたいことは要するに簡單であつた。双方の親達にも暗々裡に默契もあり、當人同志にも純潔な戀愛が成立してゐたのだ。それが先づ兩家の疎隔と、眞吉の母親の死と、ひき續いて起つた一家の沒落なぞが、とし子の心に不知不識のうちに惡い動機をつくつたのに違ひない。また、周圍からの强要があつたことも否定されないのだ。が、今となつて眞吉を捨てようと云ふのは、餘りに情誼を知らぬ背信の行爲と云はねばならぬ。併し、それも止むを得ないことゝしても好い。唯この際、眞吉は如何なる態度をとるべきかゞ、重大な問題なのだ。今一度覺醒させる爲に警告を發するか。勝手にしろと突つ放すか。それとも、その背德を責め、罵つて腹癒せをするか、その三つよりとるべき方法はないと眞吉は思ふのであつた。而も、彼自身の現在の感情から云へば、何となくとし子は最早再び元のやうに志を翻すことはないに違ひないから思ひきつて第三の方法をとつて、潔く絶緣して了つた方が氣持もよく、今後の發奮の動機にもなると思ふのであつた。併し、彼とてもかうして、不決斷な氣持のまゝで迷つてゐなければならぬその心の底には、斷ちがたい執着にひかれるところがあるのは、否み得ないことであつた。眞吉はさうした心持を腹藏なく打ち明けて話した。山西は默つて頷きながら、一々深く考へるやうに聞いてゐた。眞吉は如何なる答へが聞かれるかと云ふことをあせり氣味で待つた。

なか〳〵口を開かなかつた山西は、むく〳〵と起き直つたかと思ふと、改まつた調子で、

『君の心持はよう分つた。併し、あんまり早まつたことをするのは僕は惡いと思ふな。さきはどう

云ふ風に出て來ようと、此方は出來るだけ愼重な態度でやるのがえゝからな。君一度歸つて會うたらどうや。とし子さんに會うてよく心持をきくのやな。その上でどうなと決心したつて遲うはないやないか。』と懇ろに說き勸めるのであつた。

『そんなことをしたら、却つて此方が未練がありさうに思はれて馬鹿にされやしないですか。あんまり屈辱を感ずるのはいやですからね。』と、眞吉は元氣のない調子で云つた。

『そりや、君の考へが消極的や。どうせ、屈辱をうける立場にゐるのやから、こつちが泣き寢入りするやうなことをしたらいかん。何事も正々堂々と上手に行くのに限るでな。そこは一つ男らしくやらにや。俊一郎君はどう云ふ考へかしら？』

俊一郎と云ふのはとし子の兄で今年帝大の法科に入つた男であつた。眞吉は彼に對して餘りに親しみを持つてゐなかつた。と云ふのは尊敬はしてゐたが、少年時代から性格の相違の爲に大して親しみもなかつたし、それに多少競爭意識をもつてゐるからでもあつた。で、この際、俊一郎の名が出ると、彼に弱點を見られるのはどうしても堪へがたいやうに思はれた、わざと『それぢや、此方から出懸けて行つて大に詰問するんですな。』と、勢づいて云つたが、とし子の家へ乘り込んで行く時の不愉快さと、俊一郎に對しても氣のひけることを考へると、『併し、いやだなあ……』と云つて頭を傾けずにゐられなかつた。

いろいろと話してゐるうちに、眞吉も山西の言葉に從ふより外はないと思ふやうになつた。併し、それは、壞れかゝつたものを、何とかして繕ふと云ふことに望みをかけるのではなくて、唯、自分の體面を傷けない範圍で、潔く處決しようと云ふ迄のことであつた。さう決心することは、安心を得ると云ふよりも、寧ろ、悲痛の感が先に立つ位のものであつた。すべてのものから突つ放されて、全くひとりになつた自分を意識した眞吉は、『さうだ。それで好いんだ。これからは萬事を當つて碎けろ式にやることだ。誰に遠慮氣兼をする必要があらう。』と、心の中で、多少、自暴自棄的に叫ばざるを得ないのであつた。

さうなると、眞吉は二十一歲の今迄心の中で、とし子ひとりを守つて、あらゆる誘惑に打克つことにある誇りと潔さとを感じてゐたことが、案外くだらないやうに思はれ出した。同時に手綱をひきしめられてゐた心が、急に奔馬のやうに狂ひ出しはしないかと不安にも思はれた。何故かと云ふと、もう彼の眼の前には一方の節制のない自分が恣に振舞つてゐる姿や、さま〴〵な淫らな幻が浮んで來るからであつた。『とし子だつて、家庭を離れてゐるときは、本當はどんなことをしてゐるか知れたものぢやない。結局、糞眞面目にしてゐた自分が馬鹿を見たことになるのかも知れない。』と、心ひそかに呟かずにはゐられなかつた。

夕方になつて、山西が、どこかで酒を飲まうと誘つた時、眞吉はもうそれを辭退するとか、控へ

ようとか云ふ氣持は寸毫もなかつた。却つて、踴躍するやうな歡びと、解放されたやうな寛ぎをさへ覺えるのであつた。

やがて、二人は散歩に出た。涼しい風が雜沓の巷にもそよ〳〵と流れてゐた。鴨川をこえて東山の方へ歩いて行つて、二人はそこでビールを飲んだり、アイスクリームを食べたりしたが、足は自然祇園の方に向つて行つた。屋號の入つたぼんぼりのやうな軒燈を出したお茶屋がずらりと並んでゐた。こゝには甲と乙との二つの階級があつて、甲に屬する家は紹介がなければ行けないが、乙の方になると不意の客でも迎へると云ふやうなことを山西は通人らしく說明した。自分なぞは、甲の方だから、金なんか一文もなくても、いつでも遊ばれるのだと豪語するやうにも云つた。大石良雄で傳說的に有名な赤い壁の一力の前をも通つた。まだ宵の口のせゐかそこらは案外靜かであつた。醉歩を運ぶ人も少いやうに思はれた。併し、何となく、色街らしいなまめかしさと、うき〳〵させるやうな空氣が漲り亘つてゐるやうに、眞吉は感じた。ひつそりとしたその家々の中にきらびやかな裝ひをした舞妓や藝妓の姿を描くと、胸の底からわく〳〵するやうな思ひが湧きあがつて來た。が、今にも山西が『さあ、こつちへ來給へ……』と、さうした家へずん〳〵入つて行きはしないかと思つて、時々どきりとさせられた。眞吉はまださうした遊蕩的な經驗をしてゐなかつたので、心が臆するのが自分ながら忌々しかつたのである。

『君はまだお茶屋遊びをしたことはないかな』。山西が突然口をきいた。

『えゝ……』と云つた眞吉は、初めて異樣な憂鬱に襲はれて沈默してゐたことに氣付いた。

『大丈夫やろ。君かて男やから、却つて遊んどく方が經驗になつてえゝ……。』と、山西は自分が誘ふのに對して言譯をするやうに云つた。

眞吉は何とも答へなかつた。急に動悸が劇しくうち初めて、物を云へばきつと顫へて變な調子になりさうに思はれた。

『僕が來るのはこゝや。』と云ひながら、山西は先になつて、ずん〳〵入つて行つた。眞吉も仕方なしに後から續いた。家の中は何となく薄暗くてひつそりしてゐた。

『今晩は……』と、山西は少しふざけたやうな調子で聲をかけた。

『山西はんどすか、近頃はえらいお見限りどすな。』と、出て來た女中が笑ひながら愛嬌の好い調子で云つた。

それから二階へ通された。そこは六疊ばかりの室で、お茶屋と云つてもこんなとこなのかと、眞吉は意外に感じた。酒が出ると、女中と山西が頻りに戯談を云ひ合つてゐる傍で、眞吉はぐい〳〵とひとりで飲んだ。今にやつて來る藝妓の前で、少しでも酒の氣がないと、どぎまぎしててれて了ふ自分の姿を思ふだけでも不安になつて來るからだつた。急に呷つたので、醉が全身に廻らないで、

どこかに停滯してゐるやうないやな氣持で、徒らに顏がほてつて、胸がどき〳〵するばかりであつた。

そこへ絹擦れの音がしたかと思ふと、『今晩は！』と云つて、二人の藝妓が顏を出した。

『秀勇！　お前はこつちへ來い。春子はんはそつちのお客さんの方へお坐り……』と、山西は慣々しくわざと差圖するやうに云つて、『何うや、秀勇！　何んぼ氣取つたて、誰もほめてくりやはらへんぞー』と、馴染らしい秀勇と呼ぶ、痩せぎすの、悧巧さうな眼をした女を揶揄ふやうに云つた。

『私、氣取つてまつか。春子はんどうどす。ちよつとも氣取つてやしめへんやろ、ほんまに山西はんはいけずばつかり云やはるよつて嫌ひや！』と、秀勇は睨めつける眞似をした。

春子と云ふのは二十位の小柄な女で、何となく和らかい感じのする顏で、『あんたはん、こつちやへおこしやすえ。そないな隅の方においでやはらんで……私かて鬼や蛇やなしとつてくはしまへんよつて……。』なぞと、愛嬌をふりまくつもりで、笑ひながら云つた。

『よう〳〵やけまつせ。春子はんもなか〳〵隅に置けん藝妓はんやな。』と、山西は筒ぬけるやうに笑つた。

『そんなことを云やはつてもそつちやはどうどすえ、秀勇はんのお顏を見る早々いちや〳〵と見せつけなはるやおへんか。』と、春子はしつぺい返しを云つた。



そんな戯談をきゝながら、眞吉はにや〳〵と默つて見てゐるより外に仕樣がなかつた。何と云つて好いか、氣を遣へば遣ふ程、ぴつたりとその場に合つたやうな言葉は浮んで來なかつた。酌をしてくれる盃を不器用な手付でとりあげては、ぐい〳〵とのむより外に藝當はなかつた。そして、その一室に釀し出される氣分とどうしても同化しきれない、何だか種類の違つた交り物のやうに、一隅にうづくまつてゐる自分の姿が如何にも慘めに思はれてならなかつた。

『もう一つおいきやすや。』なぞと時々こつちへ振り向いて酌をする藝妓達の眼が、自分を初心な男と見定めて、氣の毒がつて、憐れんでゐるやうな氣がすると、一層萎縮するやうな氣持になつた。さうした意氣地のない自分に反抗するには酒をのんで醉ふ事に努力するより外に方法はなかつた。そして、努めて同化しようとした。が、彼等の女らしい、氣持の發露を感ずる毎に、甘えかゝらうとする氣持が、胸のうちにうづ〳〵してゐるのを自分でも感じて恥づかしくなつた。

可なりに醉つた山西は女達に三味線をひかせて、二上り新內や、博多節なぞを美しい聲で唄つた。

そこを出たのはもう十二時を過ぎてゐた。山西も眞吉も、足がふらつくので、ともすれば肩と肩とがぶつゝかつては、ひよろ〳〵と兩方へ離れ、離れては又ぶつゝかる程醉つてゐた。山西は先きからの感興が續いてゐるので、うき〳〵した調子で話しかけたり、小聲で唄つたりした。眞吉はまだ幻を見てゐるやうな憧れ心地で、さつきの光景を眼の前に描いてゐた。その時は格別面白いとも

思はず却つて窮屈にすら感じたのが、外に出て離れて居ると、すべてが夢のやうな氣がして、女達に對しても、なつかしい氣持が起つて來るのを覺えた。

その夜眞吉は宿に歸るとぐつすり寢込んで了つた。翌日眼がさめると、眞吉は急に大阪の方の仕事や友人のことが氣にかゝるので、早く歸つてすべての方針をたてようと云ふ氣になつた。

『それぢや萬事うまくやり給へ』と云つた山西は、財布から一圓紙幣と銀貨を七八枚とり出して旅費にしてくれと云つて眞吉の前に置いた。



## 第二章

『關西時報』と云ふ月三回の新聞紙體のものを、眞吉達が發行するやうになつたのは、去年の暮に學校の方も忘りがちでごろ〳〵したゐた時分、ほんのちよいとして氣紛れな話が動機になつたのであつた。それは先づ、同じ素人下宿にゐた眞吉と前田との間に話が出來て、そこに二三の友人が加はつたのである。前田は仲間のうちでも一番のんきな身分であつた。田舍の豪農である父が送つてくれる學資で、何不自由なく裕福にやつてゐた。一體が氣さくで、さつぱりとした性格が皆んなに好かれた。彼自身にも惚れつぽいところがあつたが、女にも持てる方であつた。彼はいつの間にか學校をなまけて女學生や、女事務員なぞの尻を追つかけ廻す仲間の一人になつて了つた。その上、ふとしたことから從姉と一緒に出て來てゐる從妹のみつ子とも關係するやうになつた。彼はよく學校をやすんでは、わざと勉强家らしく法律の書籍をきれいに机の上に積み重ねなぞして、若い女の來訪を待ちうけてゐるやうな日が多かつた。

同じ下宿にゐて、眞吉はさうした有樣を始終見せつけられてゐたが、彼の墮落してゆく傾向を惜むことはあつたが、決して憎む氣になれなかつた。何となく快活で懷かしみのある彼とは段々心安くなつて行くばかりだつた。ところが、事情は違つてゐたが、同じく學校をなまけるやうになつた

眞吉は、前田が父を説いて新聞を發行しようと云ふのに、つい贊成して了つたのであつた。出資の方は案外容易に前田の父が承諾してくれた。二人は乘氣になつた。殊に青年期の空想的な、夢想の多い眞吉はさうした方面に自分の使命がありはしないかと云つたやうな考へにまで驅られて行くのであつた。それは全くお話にならぬやうな蟲の好い考へ方をしてゐるのであつた。

一方には早くも人生に對する懷疑的な思想が芽をふき出す傾向を持ちながら、自分のすること成す事はすべて、神の加護でもあるかのやうな氣がしてゐるのであつた。そんな風なので、新聞發行の一事が、野心を燃えたゝせる薪料を加へることになつたのは云ふ迄もない。それに伯父からの送金を潔しとしない眞吉にとつては、今からひとりだちになつて、事業を初めると云ふやうなことは、何にも增した誇りであり、賞讃されべきことであるやうに考へるのであつた。

『今に見ろ！』と、眞吉はさうした方面に一歩を踏み出すことを心窃かに祝福した位であつた。

『關西時報』はいよ〳〵一月から創められた。看板はその素人下宿の入口に掲げられた。文章を書くことの出來る前田と眞吉は、兎に角いろんな記事で紙面を埋めることが出來た。その爲にはいろいろ讀書もしたり、新聞記者や、小説家の贊助を求めて執筆を乞うたりした。かくて、多少新機軸を出したと云ふ評判をとつて、意外にも讀者も出來、廣告なぞもとれるやうになつた。

併し、根が何等の成算もなく、方針もなくて創めた前田は一番中心になつてやらなければならぬ





筈なのが、少しうまく行き初めると、早くも慢心を起して、盛に女遊びを初めるやうになつた。性格的に遊蕩者らしい氣分を多くもつてゐた彼としては、父から送つて來る資金の融通が利くのが却つて禍ひしたのであつた。自分一人ならまだしも、多くの惡友を誘つたり、また唆かされたりしては、ちよい〳〵出掛けて、ひどく醉つ拂つて歸つて來た。さうした中にあつて、眞吉ひとりが熱心になつて努力し、奪闘しなければならなかつた。時には配達や集金にまで廻つた。そんな場合前田も面白半分に出かけるやうなことはあつたが、固よりそれは心からの熱心ではなくて、ほんの氣紛れに過ぎなかつた。彼は無成算にも虚僞の報告なぞして、父に資金の增額を求めた。そして相當の給料を拂つて社員を傭つたり何の用事もないのに女記者を入れたりした。まだ二十四五の派出好きの彼としてはそんな他愛のないことをするのも無理はなかつた。

ある新聞記者の紹介で先づ入社したのは東京にも二三年行つてゐた吉本と云ふハイカラな青年であつた。緣なしの强度の近眼鏡をかけて、洋服なぞを着込んでやつて來た。併し道樂半分の書生の事業には初めから信頼もしてゐなかつたし、前田の呑氣な人物に對して一種の侮蔑すらもつてゐた。彼は自然と眞吉にばかり話しかけた。机を並べてペンを走らせながら、吉本は如何にも氣取つた態度で文學談を試みた。東京の知名の文學者の名なぞは屢々彼の口に上つた。懇意にしてゐる人も多かつた。さうしたことを美文口調の咏嘆的な調子で話すところは、如何にもきざだとは思ひながら

眞吉には珍らしく面白かつた。

その傍で前田は髪をきれいに分けて、縞の羽織なぞを着流して、煙草をくゆらしながら、廣告取に備つた男や、婦人記者を相手にして無駄口ばかりをきいてゐた。時々吉本の文學談に對抗するかのやうに、固苦しい法律論なぞを持ち出しては氣焔をあげた。

『山田さん、あなたは英語が出來るのだからもう少しおやんなさい、月謝は此方で出してもよろしいから……、そしてゆく〳〵は西洋人なぞの訪問をやつて貰ひたいですな。』

前田はふいにこんなことを婦人記者の山田初子に話しかけた

『は、ありがたうございます。』

初子は生眞面目に云ふ前田の顏を訝かしさうにしげ〳〵と見ながらもにつこりした。

傍の者は前田の何となく子供染みた空想癖ををかしく思つてくす〳〵笑ふと、彼はむきになつて詰るやうなことを云つた。

そんな風にやつてゐた間はまだしもよかつた。一ヶ月と經たぬうちに、吉本は有力な新聞に職を求めて去つて了つた。それから半月も經つと、初子も暇をくれと云ひ出した。女學校を出て母親と二人で暮してゐる不幸な彼女は生活の負擔の爲に働かねばならぬ身であつた。賴りにならぬ青年達の經營する仕事をいつまでも安心してやつてゐるわけにはいかなかつた。ちよつと美人である彼女の去ることは前田にはいやなことに違ひなかつた。彼は何とか、彼とか云つて引き止めようとした。眞吉はそれを見かねて、女好きの彼に危險を感ずるので、暇をやるように勸めた。彼は仲々肯じなかつた。

そのうち、益々だらしなくなつて、資金の一部分ばかりでなく、賣上や、廣告料迄前田は持ち出して使ふやうになつた。

『君は駄目だよ。折角、僕等が苦心してやつてるのに、それぢや發展しようがないぢやないか。發展どころか、瓦解して了ふより外はない。』と、眞吉は激昂して突かゝつて行つた。

すると、前田は巧に鋭鋒を外らして『まあ、さう云ひ給ふな。おれももう愼むよ。君がゐてくれないと困るからね。』と、宥めながら訴へるやうに云つた。

月給の渡し方が遲れるのを憤慨したのと、どうやら前田がおちよつかいを出したのに恐れをなしたらしい初子はいよ〳〵退社することになつた。丁度その時分、前田は心安くしてゐた辯護士のところで偶然會つた伊村と云ふ風采の魁偉な男を連れて來た。

『伊村君が大に我黨の士になつて働いてくれることになつたのだ。もうしめたものだ。』と、誇り顏に云つて皆に紹介した。

伊村の容貌は實際ちよつと見ると威壓を感じさせる程だつた。粗末であるが黑い洋服に、同じ色

のオーバを着てゐたが、蓬々と頭髪をのばし、立派な八字髭を生し、銀縁の眼鏡の奥に烱々たる一双の眼が光つてゐた。彼は齒ぎれの好い東京辯を使つたが、かくしきれない訛があつた。眞吉は何しろ珍物がやつて來たものだなと思つた。

伊村は島根縣の男で志を立てゝ東京に出て法學院に入つたが、辯護士の事務員をして轉々としてゐるうちに、すつかり荒んで、酒と女に身を持ち崩して了つたのであつた。長年ゐた東京も面白くなく、もう辯護士の試驗をうける勉强なぞは面倒くさくて出來なくなつたので、暫く鄕里に歸つて靜養するか、大阪あたりにうまい仕事でもありはしないかと思つたりして、途中なので知合を訪ねて來たのであつた。風采から云つても、經驗から云つても三百代言位は立派にやつてのけられさうな彼は、早速外交記者と云ふことになつて、專ら銀行會社商店なぞへ廣告の勸誘に廻る役をふりあてることになつた。

直ぐ近所の家へ賴んで伊村は下宿することになつた。そして、仕事を初めたがなか〳〵成績がよかつた。前田も眞吉も大いに歡んだ。何となく力强くなつた。それに彼は見かけによらず年もまだ二十七八で、而もなか〳〵好人物で、愛嬌者であつた。粗野なところはあつたが、人情深いたちでもあつた。唯每日酒を飲まずにはゐられないのが缺點であつた。次第に狎れて來て我儘が出るせゐもあるが、殊に仕事の成績をあげて來た時なぞは酒を强請つていつもより多く飲んだ。酒を飲むと、お國訛がひどくなつて、盛んに東京時代の失敗談なぞを自慢さうに話した。多くは、女郎屋で無錢遊興をして、遊人と喧嘩をしたとか、馬をひいて巧にまいたとか、警察にひつぱられて大いに議論を鬪はしてやりこめたとか云ふやうなことを訥々として話した。眞吉には意外なことばかりであつた。彼はまた、名高い裁判の話なぞも多く知つてゐた。

『法律に涙あり』とか、『犯罪の裏には女あり』とか云つた陳套な文句を使つて、高梨哲四郎や、花井卓藏なぞのことを聲色交りで話す時は、宛然田舍廻りの壯士芝居に出て來る辯護士であつた。そんなことを得意氣に饒舌つてゐるかと思ふと、洲崎の女郎に惚れられたことや、ある辯護士の家にゐた時女中に手を出してふられたことや、それにきまつて出るのは、二三年前鄕里で馴染んだ年增の田舍藝者に關する惚け話であつた。それを細かに身振り手振りで話したが、誰一人眞に受けてきく者はなかつた。併し、時々長い手紙を書いて出すのを見ると、まんざら嘘でもなささうであつた。

前田や眞吉はいつも彼の酒の相手をしながら、さうした身の上話を面白がつてきいた。最早、理想も希望もなくなつた彼は煙草と酒とがあれば大して不平はなかつた。そして、話好きで、開けつ放しなので、誰にも警戒する必要を感じさせなかつた。伊村が來た當座、二三度顏を會はしたのみで、今は全く關係のない初子の家へいつの間にか出かけて行つて、酒の御馳走になつて來た時は、皆んなは驚いた。

『……あの女は君、可哀想なんだよ。こゝへ來るのがいやになつたのぢやない。だん〳〵腹が膨れ出したからだよ。きいて見ると、夫婦約束をした男がやくざもので、置き去りにしてどつかへ行つちやつたんだと云ふのだ。僕が行くと酒を出して、おふくろと一緒に泣きながら話されたのにはちよつと閉口したよ。僕も大いに力になつてやるとは云つて置いたがね。どうだ。僕もこれでなか〳〵色男だらう。不思議に女に信用されるよ。』なぞと伊村は語つた。



すると、女にかけては一歩もひかない前田が『何に、君なんかお話にならんぢやないか。はらみ女に愚痴をきかされてよろこんでゐるなんて……。』と、揶揄つた。

伊村が來てから、仕事の成績はあがつたが、何かと云ふと酒が初まるのでいつも梁山伯的氣分が漂ふやうになつた。大阪式の書生氣質の中へ、彼は東京の荒々しい書生氣質を輸入した形であつた。それが自然と同じ友をよんで酒を飲んで騒いだり、氣焰を吐き合ふことが益々盛んになつた。

伊村が仕事のために外出して、偶然遅延したのだと云つて、柏田と云ふ四十五六の男をひつ張つて來たのは夏の初めのことであつた。東京での知り合なので、二人は奇遇に驚いてゐた。年齢の相違はあつたが、狎れ〳〵しい調子で、

『君もいつまでも、うだつがあがらないね。たうとう都落ちをしやがつたね。』と、柏田が云ふと、伊村は躍氣になつて、

『何！　おぢいさんに人のことを云へる資格があるかね。大方、『自治の友』の金を使ひ込んで東京へも歸れなくなつたんだらう。』と、やつつけた。

さうした二人の様子を見ると、皆なも親しみを感ずるやうになつたが、最初の柏田の印象はちよつと威嚴を感じさせた。彼は痩ぎすの苦み走つた細面に金縁の眼鏡をかけ、美くしい髯をたてゝ格好の好い頭はもう胡麻鹽だつたが、きれいに刈つてゐた。それに年輩が年輩なので、自ら品位と落付とを備へた立派な紳士に見えた。粗野で、騒々しい伊村とは全く異つた感じを與へた。併し、彼も要するに人生の落伍者であつた。伊村にもその前身は分らなかつたが、相當の家に生れたのが、さま〳〵なことに手を出して失敗を重ねたらしく、初めて知つた時は周旋業のやうな事をして美人の若い細君をもつてゐたとふ云ふのだつた。そして、先妻との間に儲けてもう二十歳位になる好い倅があつたが、勤めに出して一緒に住んではゐなかつた。その後彼は幾度か失敗した揚句、『自治の友』と云ふ雜誌の地方勸誘に集金をかねたやうな仕事を請負つて九州まで出向いたが、なか〳〵思ふやうにならず、それに、多少信用を失くすやうな事もやつたので、漸く大阪まで歸つてうろついてゐたのであつた。

柏田もまた仲間に入つて廣告の勸誘をすることになつた。彼は梅田に近い安宿にゐたが、そこから毎日通つて來た。ペラ〳〵した薄羽織を着て、昂然として、いつも少し仰向いてゐるやうな格好

をしてゐるのが癖だつた。併し、親子程年の違ふ人達に交つても同じやうに若々しい氣持になつて談笑してゐた。彼は純粹の江戸つ子だと云ふことを可なり誇りにしてゐた。食物其の他の嗜好物は恐ろしく贅澤で、酒も上等のでなければ飲ます、煙草は伊村がバツトなどを吸ふのを嘲笑して、自分はいつも福壽草の四匁入を買つて來ては、それを紙の上で叮嚀にときほぐして煙草入に入れ、さて煙管をとり出してすぱ〳〵と、うまさうにくゆらすのであつた。大きな鼻の穴からすうつと煙を出すところは悠揚迫らざるものがあつた。眞吉はそれを見ると何故かをかしくてたまらなかつた。

外の連中は兎に角、眞吉に對しては柏田はさもをぢさんらしく深切な態度をとつてゐた。が一緒に酒を飲んだりした時の習慣から眞吉の方ではいつも柏田君、柏田君とよんでゐた。それでも、決して不自然ではなかつた。柏田の方も何とも思はないで、

『こりや、わたしの老婆心から云ふんですがね。岡本君なんかも、これから、よく〳〵考へねばならんことですよ。人間は何でも一つの事をどこ迄もやりぬくに限りますよ。わたしなぞの失敗も氣が多かつたからですね。それから細君を貰つて世帶をもつたら、家庭を大切にすることですよ。』などと、馬鹿に生眞面目になつて說き立てるのであつた。

眞吉は何となく緣遠いことのやうに思ひながらも、割に身に沁みて聞くことが出來るやうに思つた。さうした言葉の裏には彼の悔恨や反省の思ひが漲つてゐるからであつた。才氣もあれば、風采



も立派な柏田なぞが、どうしてこんな風に落魄して、漂泊しなければならぬのかと、眞吉には不思議に思はれてならなかつた。單調な路を辿つて來たまだ若い眞吉には、それで少しは世間と云ふものが分るやうな氣持もした。

するうち、前田は事業の方に興味を失つたと云ふのではなかつたが、その放埒は自然結果を惡くするより外はなかつた。關係のあるみつ子との間が姉に知れて一悶着が起つたりすると、一層ヤケ半分に遊蕩が盛んになつた。父から送つて來る資金なぞも、どうなつてゐるのか少しも分らなかつた。帳簿なぞはめちやくちやで印刷屋や下宿に對しても不義理をするやうになつた。その癖、自分だけは案外のんきで新調の夏洋服なぞを着て、何をするでもなく飛び歩いてゐた。そんな風だから、伊村や柏田のやうに實際働いてゐる人間は、生活の方も自然脅かされるわけでつい不平を云はずにはゐられなかつた。面と向つて、前田を攻擊することは屢であつた。その中に立つていつも苦しい思ひをするのは、眞吉であつた。彼は前田からもいろんな事情を訴へられ、一方伊村や柏田からも迫られた。が、双方好人物ばかりなので、直ぐ酒のために融和されるのが例だつた。そして、醉つた揚句に老人の柏田までが他愛もなく連れになつて、俥を南地へ飛ばしたりするのであつた。眞吉は一度もさうした仲間には誘はれなかつた。またそれをよく知りながら自分から進んで行く氣にならなかつた。後にひとり殘されるやうな場合はきまつてさま〳〵な空想に耽つた。『いつ迄もかうし

てゐられない。青春を空費してはならない。』と、たえず心に呟くやうになつた。前田は別として、伊村や、柏田の落魄流離の身の上を思ふと、人事でないやうに感じられるからでもあつた。併し、それではどうすれば好いかと云ふと、まるつきり見當がつかなかつた。偶には眞面目に考へようとしても、直ぐ喧騒で亂雜な現在の生活氣分にかき亂されて了ふのであつた。

眞吉等のゐる素人下宿は女主人だつた。女丈夫と云つた感じのする、さつぱりとした氣象の、俠氣にも富んだ女だつたが、餘り皆なの生活がだらしないのと、前田が金を拂はないのと、新聞の方も話ばかりで一向發展しないので、遂にあいそをつかしてどこかへ引越してくれと云ひ出すやうになつた。それは無理のない話だつた。この頃は柏田も前の宿を追ひ出されて伊村のところへ轉げ込んでゐたし、皆なが近くに集つたために、一緒に落合ふと、必ず酒を初める程荒んで了つてゐた。貧乏は益々ひどくなつて、夏の着物なぞは誰彼の見境もなく融通しては着た。伊村なぞは可なり暑くなつても汚れた冬服を着て出歩いてゐた。

いよ〳〵宿を變らなければならぬと云ふ問題がよほど切迫したのは、七月の末であつた。そこで、一同協議をした結果、どこかで一軒家を借りて自炊をするのが得策だと云ふことになつた。そして、今一度旗擧げをしようと決心した。前田なぞは毎日のやうに家を探しに歩いた。が、空想家の彼はさうなるとまた徒らに無成算な計畫を描いて、立派な事務所をこしらへて、社員も増し、事業を擴張



しようなどと云ふことばかりに考へ耽るのであつた。

丁度、その矢先であつた。眞吉が長い間月謝も拂はずに怠つてゐた爲めに學校から退學處分の通知をうけたのは。またそれと前後して、とし子から絶縁同樣の手紙をうけとつた。彼は狼狽して、早速京都に山西を訪ねたのであつた。

京都から眞吉が歸つて見ると昨日移轉したと云ふことが分つた。而も天滿橋に近いところにゐたのが、遠く天王寺近所へ越したときいて一層驚いた。主婦に散々愚痴を云はれたが、眞吉は早く皆に會ひたかつた。で、主婦の話なぞは、好い加減に聞き流して、新居に向つて急いだ。京都へ驅けつけたりした自分の狼狽の醜さを恥ぢるやうな思ひを抱きながら。

探しあてると大變なところへ移つたものだ。擇りにも擇つて邊鄙へ變つたものだと驚いた。寂しい通りの門のある路次で、そこに「關西時報」の看板が揭げられてゐた。這入ると右側だけ一列に並んでゐる新築の長屋の三軒目で、家の前は燒跡か何からしく可なりの面積の空地で、ところ〴〵に瓦の缺片や、壁土の壞れたのなぞが堆く盛あげてあつたり、またすく〳〵と勢よくのびた夏草の茂つてゐるところもあつた。その空地を隔てた前方は此方と並行して一列の家並が裏口を見せて建ち並

んでゐた。

歸つた時はまだ晝過ぎだつたが前田は留守で伊村と柏田が鹽鮭か何かで大肌脱ぎになつて酒を飲んでゐた。相變らずだなと思つて、眞吉は多少苦々しく感じた。彼の顏を見ると、二人は心から嬉しさうに歡迎して、家が見付かつたので急に移轉した事情を述べた。

『もうこれで鹽と米とさへあれば籠城をして奮鬪することが出來るからしつかりやらうね。だが困るのは前田社長さんだよ。何を考へてゐるのか一向要領を得んからね。さしあたり、もう十五日發行の分を準備しなければならんのに、先生毎日植木を買つて來て庭をいぢつたり、情婦のみつ子を自慢さうに家を見せるためにつれて來たりしてゐるんだからいやになつちまふ。』と伊村は口を極めて罵るやうなことを云つた。

『何と云うてもまだ小僧さんだから仕樣がないや、だから、一つ岡本君にしつかりやつて貰はなくちや、われ〳〵にしたところで働く氣がしないさ……。』と、柏田は手足まで眞赤にして、『ところでみつ子と云ふ女は前田君がほれてるだけあつてちよつと美人だね。』と云つて身體を搖つて笑つた。

眞吉は唯、困惑の色を顏に浮べて苦笑するより外はなかつた。かう云ふ生活をしてゐてはこれから先き一層無秩序になりはしないかと云ふ豫感の爲に可なり不安になつた。問ひ詰められるので、ふいとその氣になつて京都へ行つたと云ふことだけは打ちあけた。が、それ以上は胸に祕めて置かうと思つた。何と云つてもまだとし子に對して未練もあり、純粹な氣持でゐるのを、周圍の人達によつて蹂躙されたくはなかつたからである。伊村は元氣よく盃をつきつけながら、

君も近頃少し變だぜ、戀病にでも罹つてゐるのぢやない？　心配があるんなら打明け給へよ。』と開き直つて眞面目さうに云つた。

『この男に相談するのは止し給へ。』と、柏田はわざと揶揄ふやうに云つて、『さうぢやないか。御本人が第一田舍のすべた藝者に惚れやがつて始終見つともない愚痴をこぼしてる先生なんだからね。』と、云つて笑つた。

『何！このおやぢ、好い年をして……。』と、伊村は眼鏡越しに、とろんとした眼をギラ〳〵させながら赭黑い顏を一層眞赤にしてぶつ眞似をするのであつた。

眞吉は酒を飲みながら、餘り口數をきかなかつた。どう云つたところで、今の自分の心持はこれ等の人達に了解して貰へようとも思はないし、また適當な表現の言葉が見當らないやうなもどかしさを感ずるばかりだつた。

夕方になつても、前田は歸つて來なかつた。醉ひ潰れた伊村と柏田はそこに寢て了つた。その杯盤狼藉の中に横たはつてゐる寢姿を見ると、眞吉はある淺猿しさを感ぜずにはゐられなかつた。彼はぢつとしてゐることが出來なくなつて外に出た。蜻蛉を追つかけてゐる子供の一群が空地で騷い

でゐた。そこらの家では夕餉の支度に忙しい氣配がしてゐた。

空は如何にも夏らしく晴れて、涼しい風が草叢をも戰がせてゐた。眞吉は悄然とした姿をして空地の方へ入つて行つた。彼はふと琴の音を耳にして、思はずそこに佇んで了つた。

琴の音の起るところは直に分つた。空地の一方の崖になつたところに二階建の家が聳えてゐる。その二階の一室が空地に向つて丸窓のやうな形の大きな窓になつてゐた。見るとその中に少しこゞみ加減になつてゐる若い女の肩から上が現はれてゐた。湯上りの化粧でもしてゐるのか、束髪に結つた眞白な細面の顏が印象的に映じた。眞吉は思はずはつとしたが、琴の音は益々冴えて、女の顏もだんだんはつきりとして、もみあげの長いのまでが分るやうになつた。

次第に暮れてゆく中で涼し過ぎる程の夕風に吹かれながら、眞吉は云ひ難い哀愁に身も心も押浸されてゆくやうに感じた。そして何と云ふことはなく、心の中がさびしかつた。天涯地角我一人と云つた感が、犇々と胸に迫つて來た。琴を彈いてゐる少女に對して抱かれる一種の憧れに似た感情は、やがてとし子に對するそれであつた。

やがて、とりとめもない空想からさめると、彼はいつ迄もぼんやりとして立つてゐる自分に氣付いた。再び二階を見上げるといつの間にか琴の音は止んで、電氣の光を背後から一ぱい浴びた少女はすんなりとした身體を見せて窓際に立つてゐるのであつた。派出な浴衣を着て、赤い帶をしめた



初々しい姿は、まだ十五六ではないかと思はれる位だつた。彼は此方を見られるのがきまりがわるいので、倉皇として家にひき返した。伊村も柏田もまだよく眠つてゐた。ふと二階からがさごそと音がきこえるので、あがつてゆくと、意外にも前田が歸つたばかりなのか、まだ絽の羽織を着たままで、ぽつねんと腕組をして坐つてゐるのであつた。『岡本君か！』と、前田は嬉しさうに眼を睜つて腰を浮せるやうな恰好をした。

『や、失敬したね。心配してくれたらう。』と、眞吉は簡單に要點だけをかい摘んで話した。

前田はそんなことはどうでも好いと云つた調子で、『ね、君！、僕は弱つたことが出來たんだ、それで君に會つて相談したいと思つてね。』と、ひどく興奮した調子で云つた。

『一體どうしたんだね？』眞吉は何事が起つたのかと、胸が顫へるのを覺えた。

曾て見たこともないやうな悲痛な表情が前田の顏に浮んでゐた。『みつ子の問題だよ。いよ〳〵大袈裟になつたんだよ。姉の奴すつかり國へ云つてやつてるのだよ。それでおやぢからひどく怒つて來てもう資金も學資も出さないと云ふんだ。實は君にもかくしてゐてすまなかつたが、僕はワイフがあるのでね。みつ子も從妹と云つてるけど、ワイフの方はもつと濃い親戚なんだ。……どうも困つちやつたよ。今日もみつ子が自殺するなんて騷いでね。』と、前田は聲を顫はせながら訴へるやうに云つた。

眞吉にとつてはすべてが意外のことだらけのやうな氣がした。彼に細君のあると云ふのも初耳だつたし、姉と云ふ人の遺口や、みつ子の自殺騒ぎ、それから父親の立腹と考へて來ると、おぼろげながらそこに可なり面倒な葛藤が生じてゐることが推察されるのであつた。同時に前田の節制のない、不倫な行爲も當然報いられなければならぬところへ來たのかと云つた感も閃くやうに起つた。

尙、きいて見ると、彼は大切なひとり息子であるためとその女が薄倖な境遇であるために、早くから引取つて彼と娶はせることになつてゐた。而も二年前に既に彼の妻として藉を入れて了つたのである。淑やかで、溫良な細君のあき子を、彼は決して愛してゐないと云ふのではなかつた。それだのに、ふとした動機で、ついみつ子と關係が出來て了つたのである。そして彼は兎に角、みつ子の方では急に離れることの出來ない心持に進んで來てゐると云ふのだ。

眞吉にはさうした複雜な情事は何んだか別世界の出來事のやうな氣がするのであつた。そして、直ぐとし子の問題と結びつけて考へるのだつた。

眞吉には、前田の父が立腹して、資金を拒絶したと云ふ一事が先づ何より氣になつた。いよ〳〵瓦解かと思ふと、それにつれて可なり面倒なことが持ちあがつて來るのを豫想しないわけに行かなかつた。彼は伊村や柏田には祕密にして置いて、今一應交渉して、これで打ちきりにされても仕方がないから、多少金を出して貰ふことにして、最後の奮鬪を試みたらどうかと、前田に勸めた。



『ひどい奴だ。みつ子の姉は實際ひどいよ。何も、そんなにまでしないでも好いことだからね。僕に忠告すりや好いぢやないか。實際怪しからんよ。』

前田は無念さうに云つて、姉を罵つた。彼女はしつかりしてゐるだけに、人情に冷やかなところがあつた。自分の進まない緣談を刎ねつけて、故郷を飛び出し、產婆の試驗をうけ、看護婦會なぞも起して今日迄獨身で押通してゐる位だから、妹のふしだらに對して同情がないのは當然だつた。それに二十八の老孃でヒステリーの氣味もあるらしいから、二人を自分の味方とばかり思ひ込んで。ゐたのが背かれたやうで、劇しい嫉妬を感じたのかも知れないと前田は語つた。

『まさか、そんなこともあるまいがね。』と、眞吉は曖昧に云つたが、心の中では或はそんなことかも知れないと思つた。二三度前田に連れられて彼女の家を訪ねたことがあつたのを思ひ出した。ある時なぞは姉妹を初め、二三の世話してゐる若い女達も居合はして、いろんな室內遊戯をして遊んだこともあつた。妹のみつ子はおとなしい、柔順さうな女だが、姉のあき子はきりつとした顏付で何事もてきぱきとやりさうな感じがした。縹緻はみつ子に優るとも劣らない位だつた。

それからも二人はそのことに就いていろ〳〵話し合つたが、前田の精神が定まらぬので同じところにうろついてゐるより外はなかつた。階下では伊村や柏田が漸く眼を覺ましたらしい氣配がするので二人は降りて行つた。すると率直な伊村は突如今後の方針に就いて詰問するやうな調子でき

出したので、前田は流石にいつもの元氣がなかつた。受太刀になるばかりでなく、打ち萎れた謝罪めいた言葉で答へ〳〵した。

『兎に角、これ迄のことは仕方がない。前田君にもこれからしつかりやつて貰ふことにして、一つ大いにやらうぢやないか。』と、柏田が調停するやうに云ひだした。

『本當だ。お互に協力してやらう。』と、眞吉も云つた。

何と云つても苦樂を共にしてゐる間柄なので、直ぐ互の感情は融和して、希望のありさうな話題に心を向け直すことが出來た。伊村はもう燥ぎ出して、また酒を初めることを提議した。

『おれもこれから節酒して働く。今晩だけはまあゆつくり飲まう。』と、伊村は元氣付いて、眼まで輝かせてゐた。

前田もやつと快活になつて、酒屋、肴屋の使を抽籤でやらうと云ふやうなことを云ひ出して、ひとしきり話が賑はつた。間もなく、籤をひきあてた伊村と眞吉が出て行くことになつた。寂しい廣い通りを一丁ばかり行くと酒屋だつた。眞吉が見てゐると、伊村は

『今晩は……主婦さん、すみませんがお酒の好いところをいつもの通り願ひますせ。』と、入口に突立つて云つた。

店頭にゐた主婦も小僧もをかしさうに笑つた。一風變つた剽輕な伊村にはどこかしら愛嬌があつ



た。彼は店頭を離れると、眞吉の肩をたゝいて、

『おれはもてるね。あの主婦は少し氣があるらしいよ。畜生ッ……。』と、ひとりで嬉しがつた。

眞吉は、色男がる伊村の心持がをかしくてたまらなかつた。そこで、二人が別れると眞吉はまた寂しい氣持になつた。

『また酒になるのだ！』と思ふと、自責の念に堪へられなかつた。

その後も相變らずの生活が續いた。新聞は少しづゝ、資金が來ることになつたので月二回に改めてどうにかかうにか發行を續けた。眞吉は專ら、その方の執筆や、炊事なぞに趁はれ、他の連中は外出がちだつた。前田も飛び歩いてゐたが、餘り仕事の方は氣が入らないらしく、いつもそは〳〵してゐた。邊鄙なところへ離れたので、友人達は餘り來なくなつたが、直ぐ近所の交番の巡査だとか、投書をする人なぞが新な訪問客で時々遊びに來ては賑はした。かうして、表面だけは無事に見えたが何となく中心のない、そして、荒んだやうな氣持が皆んなを支配してゐることは爭はれなかつた。どうかすると、酒を飲んで夜つぴて大騒ぎをすることも珍らしくはなかつた。伊村なぞは、あちこちを飲み歩いて泥酔して歸つて來る事が多かつた。そんな場合には表の戸を蹴破るやうな音をさせて入つて來てぶつぶつとひとり言を云つたり、ふさけたりするので、眞吉なぞは狹い蚊帳の中に寢てゐることが出來ないで、そつと拔け出して二階へあがり、いつ迄も机にもたれて夜を更すことも

屢々だつた。そんな時を利用して、讀書をしたり、手紙を書いたりした。もう法律の書籍なぞは手にとらうとはしなかつた。以前から好きであつた小説類や、他の書籍がたえず机の廻りに四五冊は轉がつてゐた。貸本屋から借りた「露伴全集」や、蘆花の「思ひ出の記」、鏡花の「黑百合」、兆民の「一年有半」なぞと云つたものを耽讀してゐた。これ迄外に向つてばかりゐた心が、內面に向けられて深く入つて行かうとする傾向があるのを自らにも感じた。

夕方になると皆なと一緒に屹度外に出て凉んだ。空地で子供達と一緒に毬投をしたり、ぶら〳〵歩き廻つたりした。伊村は椅子を持ち出して、得意さうに尺八をふいた。そして、あの若い女が丸窓の中で琴を奏でるのに合はせるのだと云つて一生懸命になつたりした。彼はかうした藝の力が女を惹きつけるものだと信じ、また自惚れてもゐた。何と云つても彼は愛嬌者だつた。近所の人とも一番早く心安くなつて、ちよい〳〵風呂を貰ひに出懸けたりする位だつた。

さうした夕食後の時間も、眞吉は皆と共にすることは僅かで、直ぐ人知れぬ間に家に戻つて寢轉んで讀書したり、默想に耽つたりする方が多かつた。彼の心を往來してゐるのは、矢張皆と別れて、東京に出ることであつた。その機會を捉へることであつた。

眞吉は矢張りさうした時間を偷んで長く躊躇してゐたとし子への手紙も書く氣持になつた。

……何を云ふにも、はつきりしたあなたの心持が分らない爲に小生の方でもはつきりした考へが申難いと存じます。小生も男子なれば、いざと云ふ場合の決心はきめて居ります。然し願はくば一度ゆる〳〵會見する機會をこの休暇中にこしらへて頂きたいと存じます。出來るならば御上京の途中當地に下車されゝばこの上の幸ひはありません。小生も年內には上京の希望ですからいろいろ東京の樣子も承はりたく……

かう云つた一節もその手紙に書き込んだのであつた。

眞吉はそれに對する返事を不安な思ひで毎日々々首をのばして待ち倦んだ。一度歸省して父を見舞ひ、とし子を訪ねることも好ましかつたが、現在のやうな狀態ではとし子の一家の者に顏を合せることが、徒らに恥曝しになるに過ぎないと思ふと、急に氣が進まなくなるのであつた。

手紙を出した後でも、とし子が皆に見せて冷嘲の材料にしやしなかつたかと思つたり、まだ山西の忠言に從はずに不決斷な態度を見せた自分の甘さを悔んだりして、心の動搖は常に絕えなかつた。餘り返事が來ないとなると、遂に業を煮やして、皆んなと一緒に泥醉することが二三回も重なつた。そして、ある夜なぞは前後不覺のうちによからぬところへつい誘はれて行つて了つたのであつた。

『兎に角、岡本君はお初だつてんだからな。』と、柏田は齒の缺けた口を開けて笑つた。

『だが二十二歲にして童貞を破るなんて僕等には奇蹟のやうに思はれるね。』と、伊村は實際憫れた

やうな顔をした。

前田だけは何だか自分達が誘つて悪いことをしたとでも云ひたげな顔をして、まじ〳〵と眞吉の顔を見てゐたが、

『これが病みつきにならんやうにしてくれ給へよ。』と、兄貴振つた調子で云つた。二人は傍から冷かして笑つた。

それは丁度朝歸りでちよいとした小料理屋へ入つて酒を飲んでゐる時だつた。眞吉は一種のみえから、

『何におれだつてそんなに見縊つたものぢやない。これで藝者買位はしてゐるんだからね。』と、山西に連れられて行つた祇園のことなぞ云つたりしたが、後で穴へでも入りたいやうな羞恥が湧き起つて來た。併し、禁斷の果を食つたと云ふ程の悔は感じなかつた。寧ろ、とし子に對して純潔であらうとした自分に對する反逆心を慰める氣持もあつた。

――酔つた紛れに車を飛ばして、けば〳〵しく着飾つた女がずらりと並んだ家のある、明るいうちにも陰影の搖らめいてるやうな、そして、どろりと澱んだ空氣の漂つてゐるところをいつまでもぶらついた揚句、たうとう終ひに執拗な男や女達に殆ど抱きあげられるやうにしてひつぱり込まれた時や、瘠ぎすで足の短い顔の長い女に蒸し暑い一室で、いろんなことを話しかけられた記憶は、彼にとつては悪夢のやうな感じが貽されてゐるばかりだつた。愉快でもなければ、面白くもなかつた。唯、いつもべつたりと薄氣味の悪い、蠱惑的なものが心にこびりついてゐるやうな氣持であつた。

眞吉はもう二度と行くところぢやないとひとり心に思つた。

それから幾日か經つと、また酒の上で、誘惑に打ち克つことが出來ないで、ひつぱられて行つた。そして、後では初めの時と同じやうな嫌惡を覺えた。外の連中は何が面白くて性懲りもなく、あんなところへ出懸けるのだらうと不思議に思ふ位だつた。遊んだ翌日なぞは皆が一段と晴れやかな顔付をして、いそ〳〵と仕事をするのに引替へて、眞吉一人は憂鬱に襲はれるのが、自分ながら不思議であつた。歸つて來ると、留守居のない家の雨戸には、日光がかん〳〵照つてゐるのを見ると、たまらない厭はしさを覺えさせられた。

かくて一度、未知の世界に足を踏み入れた眞吉は却つて、とし子を戀ふる思ひがいや增すやうに思はれた。夕方なぞ、彼の丸窓に現れる繪のやうな少女の姿を見たりすると、一層センチメンタルな氣持になつて、涼しい風に吹かれても哀しい思ひを唆られた。

凡そ十日も過ぎてから、とし子の返事が來た。

……おゝなつかしき大阪よ！　君在す地と思へば如何で心なく通られませう。されどすでに同行を約した兄と友と――それを僞るには餘りにとしの心は弱うございます、御上京になればいづれ

お目にかゝる日も幾度かございませう。……

あゝされど、夢より淡く過ぎし戀なれど、此のまゝお別れするにはあまり儚うございます。此の休暇を幸ひに歸省に事よせて久方振りに私宅をもお訪ね下さいませ。幸ひに兄も今家に在れば都のお話など何かと申上げる事でございませう。

裏の野には幼かりし二人が過去の日を想ひ浮べるやうに、月見草の花が人待ち顔に咲いてゐます——。

こんな事も書かれてあつた。とし子の眞意がちよつと分らないやうな氣がした。誇りの强い眞吉は何となく彼女の權高な感情が文字の間に讀まれるやうな氣がして、侮辱を感じないではゐられなかつた。

眞吉は直ぐにとし子にあてゝ、最近歸省するから、是非お訪ねしたいと思つてゐる。その節久々で皆さんにお目にかゝれるのを樂しみにしてゐると云ふ意味の返事を出した。そして、誰に見られてもこれなら恥づるところはないと思つた。

併し、いざ歸省するとなると、なか〳〵目下の事情ではぬけ出されないことが分つた。五日や一週間ならばどうにかなるが、せめて一箇月位はゐて序でに東京行の準備もしたいと思つてゐるのであつた。默つてゐては埒があかぬので眞吉は先づ前田に計り、それから他の連中にも話した。すると、歸省のことは何とか都合をしようと云つてくれたが、上京の事は皆なが反對した。その問題は暫く保留してくれと云つた。眞吉も表面だけでも、それに從ふより外はなかつた。それに、二三日經つと、前田は編輯の一員としてこの間から屢々手紙を寄越す神戸にゐる阪本と云ふ友人を呼び寄せるから、これ迄歸省をのばしてくれと云ひ出した。眞吉は徒らに氣ばかりあせつてゐたが、矢張り默從するより外はなかつた。

こんな風で愚圖ついてゐるうちに、もう八月も終りに近づいた。ある日のことであつた。眞吉がひとりゐる時に、初めて彼を訪ねて來た男があつた。名刺を見ると平民週報大阪支局左近運平としてあつた。

『どうぞ、お上り下さい。』

眞吉は退屈してゐた時なので、愛想よく二階に請じた。左近は頭髪ののびた蒼黑い顏に陰鬱な眼が底深く光つてゐる、年齢は二十八九位に見えたが、粗末な細かい紺絣の筒袖を着てゐるのが、ちよつと異樣な感じを與へた。平民週報と云ふのは我が國のソシャアリストの一團が發行してゐるもので、その主領とも云ふべき二三の人が日露開戰の當時强硬に非戰論を唱へて△△新聞を退いたと云ふことも知つてゐたし、それに眞吉は『平民週報』が日刊から週刊になつた頃度々見たこともあるので、左近と云ふ男がその一派の人間であることは直ぐ分つた。唯、思ひがけない人間が而も、自

分を名指して尋ねて來たと云ふことにある好奇心が頭を擡げて來るのを感じた。

『別に用事はないんですが、あなたの方の新聞を拜見してゐますので、ちよい〳〵お書きになるものも見てゐます。』と、左近は沈着な、併し陰氣な聲で、『これから一つ僕の方とも交換してくれませんかね。』と云つた。

『いや、こちらのはとても交換して貰ふやうな價値のあるものぢやありませんが……。』と、眞吉は謙遜して云つた。自分の書いたものを讀まれてゐると云ふことが恥づかしく思はれるのであつた。

彼等の一派がその筋からたえず睨まれ、且つ迫害をうけながら主義の爲に闘つてゐると云ふことは眞吉のやうな青年らしい心に悲壯な感激を與へる理由は十分あつた。それからいろ〳〵なことを話し合つた。左近はぽつり〳〵としたロの利き方であるが、いつの間にか、社會制度の缺陷とか、權力階級の横暴とかに對して熱の籠つた、底力のある調子で罵倒を初め出した。自分一人の問題に捉はれてゐる眞吉にも、さうした彼の熱烈な態度は強く胸に響くものがあるのを感じた。

『あなたのあの「支配する者」とか云ひましたね。戀愛を支配し、道德を支配するのは、常にあの美くしい假面を冠つたある不合理なものゝ力であると云つた論理は、大いに同感でしたよ。つまり、我々の主張してゐるところも歸着するところはそれなんですからね。』と、左近はちよつと嚴肅さを示すやうな表情をして云つた。

『いや、僕のはつまらんもので……』と、眞吉は、格別そんなはつきりした考へがあつて書いたものではなく、唯、とし子の問題なぞから暗示をうけた我が儘な感情的なものが動機であつたことを思ひ出して、恐縮せざるを得なかつた。

左近は相變らずプロパガンダでも試みるやうな調子で、いろ〳〵同志の苦心を語つた。今二三の氣鋭の士は車を挽いて、パンフレットを賣りながら諸國を巡つてゐることや、支社でも毎月會合を催して主義の研究や、今は本部と呼應して、バクーニンの學説なぞの研究をしてゐると云ふことも語つた。そして、『一度是非來て見て下さい。可なり愉快な集りですから。あなたも御存じでせうが、あの小説なんかを書く草野すゞ子と云ふ女も時々來ますから、文學的方面の話もなか〳〵盛ですよ。』と云つた。

『は、ありがたう。僕も「平民週報」は愛讀したこともありますからクロポトキンの「パンの略取」とかバクーニンの「神と國家」とか云ふ名位は知つてゐますが……、幸田さんはたしか兆民先生の弟子でしたね。僕のおやぢがよく兆民先生の話をして、先生が大阪の新聞社へ來てゐられた頃、つまり初期の議會に出られた時分に幸田さんが玄關に居られたと云つてゐましたよ。』と眞吉は多少乘氣になつて話し出した。兆民先生が議場にある時は唯頰杖をついて默々としてゐたことや、選擧民から送られた金時計をぶらさげてゐた豪逸な風手なぞも父が面白さうに話したのを覺えてゐた。

『兆民先生も亡くなつて了つて……。』と、左近はちよつと沈んだ表情を見せたが、『僕なぞもいつ死にますか分りませんよ。併し、死ぬまで大いに闘ふんです。』と、自分がかうして主義のために殉ずる覺悟をしたのは、縣廳の屬吏をしてゐた時、ある事から職を免ぜられたのに初まるとも云つた。

眞吉は彼の一言一句に對してある親しみと、感動とを受けずにはゐられなかつた。皆川と云ふ思想家的の牧師に基督教に入るやうに勸められた時にうけた感動とは違つて、もつと人間的なるものがあるやうに思はれた。併し、左近の話題がだん〳〵矯激になり、クロポトキンやバクーニンのことをある熱情を以て話し出すと、一種の壓迫と、不安をも感ぜしめられるのであつた。そして、一面近頃讀んでゐる書籍によつて與へられる氣持とはさう内面的には隔つてゐないやうな感じをもうけたのであつた。

『僕なぞは幸田氏の主張と同じく暴力論者です。』と、左近が云つてぎろりと眼を輝かせた時は眞吉はある不氣味さを感じさせられた。

眞吉はもつとその親しみのある言葉と、スキートな感じと伴なつた熱情の力により多く甘えたい氣持がまだ克つてゐた。けれどもまた左近との會合によつてこれまではつきり考へなかつた世界で闘ひつゝある人々のことを考へると、彼の視野が急に廣くなつたやうにも思つた。

『是非一度會に來て下さい。』左近は歸りがけにもう一度繰返して、鍔の廣い黑ずんだ麥稈帽を冠りながら念を押すように云つた。

左近が歸ると、眞吉は暫くとりとめもないことに考へ耽つた。するうち、彼は抑へきれないやうな強者に對する反抗の念が燃え立つて來るのを感じた。それは專ら、あの拜金宗の貪慾な、すべてを功利主義的の考へ方によつて支配しようとする、而かもそれを眞の道だと思つてゐさうなとし子の父に向けられねばならなかつた。出發點に於いては同じやうな方向をとつたとしても、とし子の父と自分の父とは、性格に雲泥の差があつたゝめに結果はまるで反對になつて了つたのだ。自分の父の方が馬鹿かも知れない。それは承認するとしても、一方が今日巨萬の富を蓄へて傲然としてゐるのに、一方は零落のどん底に落ちて見る影もない有樣になつてゐる。そこに何かある間違つた力が働いてゐるに違ひないと思はずにはゐられなかつた。

とし子に逢ふことのみが目的だつた歸省を、眞吉は顧みて疚しく感じずにはゐられなかつた。父も可哀想だ。出獄後の父を慰め劬はるのは自分より外にはないのだ。また妹のいと子も白痴であるだけに愛してやらねばならないのだと心から考へるのであつた。

# 第三章

とし子は町の女學校を出て、上京したのは昨年の春であつた。兄の俊一郎は今年から大學に入つてゐた。かくて、兄妹二人とも揃つて、東京にゐて新時代の空氣を呼吸してゐるわけであつた。子供自慢で、而かも子煩惱の俊助の口から、屢々二人のことが語られるのも無理はなかつた。それは一つ話になつてゐる位有名であつた。

兄妹は今年の夏は相伴うて歸省してゐた。俊一郎の方は、十日ばかり海水浴に行つて、眞黑になつて丈夫々々して歸つて來たが、毎日默々として勉强するのが日課であつた。俊助の少し吃り口調で、早口に饒舌るのに似ず、俊一郎はどつちかと云ふと無口の方であつた。丸顏の圓滿で福々しい人相をしてゐたが靑年としては、どこか重厚なところもあり、確りした感じを與へた。とし子は血色の好い素直な性質で、縹緻も十人並優れてゐた。如何なる場合でも、彼女が交ると、急にそこらが賑やかになると云つたたちであつた。學校の成績も悪い方ではなかつたが、俊一郎の理知的なのに反して、女だけに情熱的なところがあつた。家にゐても、豪家のお孃樣として、何に一つすることがなかつた。偶には母親の手傳ひをして、厨に出て、風變りな料理をこしらへて、閉口させたり、歎ばせたりする位のもので、讀書をしたり、ヴアイオリンを復習したりする外は弟妹と一緒になつて



遊んでゐるのが仕事と云つて好かつた。

彼女は母親なぞが驚いて眼を睜る位よく友達へあてゝ手紙を書いた。それに對する返事も殆ど毎日のやうに配達された。その數は俊一郎と比較にならない位であつた。ある時なぞは、郵便局で俊助がきゝ込んで來て、田舍だから驚いてゐると云つて話した位であつた。その時俊一郎は揶揄したが、父は理由もなくにこにこしてゐると云つた風で、決して小言なぞ云はなかつた。

休暇で歸省する學生の樂みはとし子にしても變りはなかつた。が、父母の許に既に二箇月に近い朝夕を送り迎へて見ると、もうそろそろ東京の空が懷しくなり初めるのであつた。歸省する時は東京の話しを周圍の人達にきかせたい希望に充ちてゐたが、それも盡き果てゝ了ふと、徒らに單調で懶く感ずるばかりだつた。父は毎日家事や公務にも忙しく、時には持ち山を見廻りに行つたり、訪ねて來る小作達と話したりする時が多かつた。母はまた田舍の豪家の主婦として始終雜事に趁はれてゐた。とても都會の相當な家庭の主婦のやうに偶には劇場に出かけたり、社交的の知り合ひと半日を話し暮らすと云ふやうなことはまるでなかつた。さうして無味乾燥な田舍の人の生活を、とし子は見てゐても退屈でつまらないと思つた。蚊や蠅にせめられることも極端に厭はしいものであつた。兄の俊一郎もとし子の話相手としては餘りに趣味が違つてゐた。智識慾の盛んな彼はいろんなものを讀んでゐたが、併し、それは理窟つぽい、堅苦しいものばかりで、とても話題にして面白い

と云つたものではなかつた。とし子が耽讀してゐる文學雜誌や、同じ文學的の書籍は俊一郎には振返る丈の興味もないらしかつた。偶々文學の話を持掛けたりすると、彼は語學を學ぶ時に知つたテニスンだとか、ロングフエローなぞの名前は出たが、とし子には少しも興味がもてなかつた。彼は日本の現代の文學者の名すら餘り知つてゐない位であつた。

そんな風だから、とし子は矢張友達なぞと取交はす手紙の上で、空想の世界をつくりあげて、ローマンティックな情感に浸るのを樂しむのであつた。十九のとし子は夢のやうな憧ればかりがさきに立つて、醜い現實に眼を向けることは好ましくなかつた。現實的のことが、考慮に這入つて來る時でもそれを何とかしてロマンチファイし、色彩づけなければ承知されなかつた。

黃昏の空は海のやうに深く蒼く晴れてゐた。とし子は湯殿から、大きな柿の樹に澤山の實がなつてゐるのを眺めたり、蜩の聲に耳を傾けたりしながら、東京の生活をぼんやり追懷してゐたが、さつぱりした氣持になつて、そこを出ると鏡臺の前に坐つて薄化粧をした。その頃女學生に流行してゐたマーガレットに結つた髪をきれいにかきつけて、襟許に大きなリボンを結んだ。ぼうつと赤らんだ顏は、自分ながら處女の美くしさだと思つて暫らくぢつと見恍れてゐた程であつた。やがて、中形の着物に赤い細帶をしめて、庭に面した自分の居間に這入つて行つた。そして舌打しながらも、弟妹達がとりちらかした教科書や、玩具なぞをさつと片付けると、机に向つて兩手で頰杖をして庭の深い木立に眼をやつた。そこから暮靄が湧き出すかと思はれる程、見てゐるうちにも暗くなつて行くのであつた。幾室か隔てゝ家の人達の話聲がさながら遠くでしてゐるやうに聞えた。そんなぼんやりした氣持になつてゐる時は屹度、東京の燈火の明るく輝く夕暮の町の光景や、美しい人達の散歩で賑ふ町の目貫の場所の賑やかな雜沓なぞが眼の前に浮んで來た。あたりの靜かさと淋しさは一層さうした想像の世界を廣めて、浮き立たせるのであつた。そして一種陶醉したやうな氣持になるのであつた。

人は去れり
寂しさ迫る
たそがれの
暗きに立ちて
名を呼べば
隱れ勝なる
糸遊の
うつゝなの影も
惜しまるゝ

ふと、とし子の口を衝いて、かうした詩の一節が口吟まれるのであつた。

それはとし子が愛讀する、いや、多くの文學を好む青年男女に渇仰されてゐる病詩人の詩集『二十八宿』に收めてある作であつた。とし子は友達と一緒に、どんなに繰返し繰返し愛讀したか知れなかつた。中にはかうして、諳誦してゐる一節も少くはなかつた。で、どうかすると、他の唱歌よりもかうした詩の方が多く、彼女の口に上つた。そして、自分でも、そんな新體詩めいたものや、調子の好い散文などを模倣して書いて見ることも屢々あつた。友達の中には『女子文學』と云ふ雜誌に投書なぞしたり、また、さうした方面に名ある先輩の知己をもつてゐる人さへあつた。とし子は田舍の女學校時代に下地をつくつてゐた上、東京へ出てから、同好の友達が多く出來たので、次第に深入りして行つたのは自然の徑路であつた。

人の肌へに手を觸るは
新なるべき君が手よ
しばしは許せ、わが胸に
遠退く浪の音あらむ

またしても、かうした歌詞が無意識のうちに口に出て來るのであつた。

『姉ちやん、それ何の唱歌？』



ふいと妹のすみ子に訊かれて、とし子ははつとさせられた。十二のすみ子に歌の意味が分る筈はなかつたが、それでも不意打だつたので、ちよつと驚かされたのであつた。

『あら、すみちやん、いつの間に來たの？』

『御飯を云ひに來たの。』

『さう。』

『今のは何の唱歌？』

『唱歌ぢやないの、すみちやんなんかの歌ふ唱歌とは違つた歌なの。』

『何ちうもの？』

『ほほほ……何ちうものつて、云つたところで分らないわ。むつかしい御本にあるの。』

『ふーん。』

すみ子はかう云つて駈け出して行つて了つた。

とし子は洋燈の薄暗い光の下で大勢の家内で膳を並べて晩餐をしたゝめる光景を思ひ浮べると、何だか小うるさく、暑苦しく感ぜられるので、ちよつと起つ氣にはなれなかつた。でも、行かないわけにはいかなかつた。

父の俊助は頻りと口髭を捻りながら、もう晩酌を初めてゐた。野菜物を煮た惣菜に、鮎の燒いた

のなぞか肴であつた。母が團扇を使ひながら、時々思ひ出したやうにしてはお酌をしてゐた。

それに少し離れて、お婆さんと俊一郎兄妹が膳に向はうとしてゐるところであつた。一段下の薄緣を敷いたところでは下男や下女がガツ〳〵と麥の多い飯をさもうまさうに貪り食つてゐた。

『助治！　あしたは山田の方へ肥料をやらんといけんぜ。』と、俊助が思ひ出したやうに下男に聲をかけた。

『へえもうやる時分だしたかな。』と、助治は眞つ黑に日に燒けた眼ばかりギロギロ光る顏をけろりとして、此方に向けながら云つた。

『やる時分とも。遲れた位やぜ。』と、俊助は直ぐぶつきら棒に答へた。

とし子も膳に向つた。そして、お婆さんや俊一郎にも給仕をしてやるのであつた。父と母との間にも、矢張、作物の話や、賴母子講のことや、銀行の人達の噂なぞが頻りに語られてゐた。が、とし子にはそれとても耳に挿むだけの興味すらなかつた。

間もなく、俊一郎やとし子が食事を終つた時になつて、今度建設される忠魂碑の話が父の口から誰に語るともなく出たのである。

『……數ケ村協同でやることやで大分立派なものが出來るやらう。それに寄附もあるしな。無論うちでも出さにやならんが。ところで、誰か大家に字を書いて貰はにやならんが、そいつには困つたな。わしと外二三人が引受けることになつたのやが。』と俊助はうまさうに盃を嘗めながら、表面は當惑さうに、併し內心は自慢らしく皆んなに向つて話しかけるやうに云ふのであつた。

『うちではどれ程出さにやなりませんか。』と直ぐ母親のおますが傍から口を出した。

『うむ。それはまだ考へ中やが……いづれ百か二百やは……』と、俊助は小頸を傾げながら云ふのである。

『外との釣合もありますでな……。』と、おますは心配らしく注意するやうに云つた。

暫く同じやうなことで問答が繰返されたが、粗い白絣の着物を着て、むつゝりした顏をしてゐた俊一郎が、

『この邊では一體戰死者が幾人位あつたんですか。』と、突然問を發した。

『五人もあるぜ。割合に多い方やな。尤も一人は病死やが……一番上が荒江曹長……それから武藤上等兵……可哀さうなのは山本の家やな。あれは後備やつたから子供もたくさんあるでな。』と、俊助は氣持よく醉つた顏をほてらせながら、ゆる〳〵とした調子で語り出すのであつた。

沙河の戰ひで負傷して危く捕虜にならうとした男の經歷談や、講和談判のあつた頃の話なぞがそれからそれへと續けられた。俊助が新聞紙上で讀んだ戰爭記事がよく記憶してゐるのには皆なのも驚いた。實際彼は何日にどこが陷落して、いつ攻擊を開始したと云ふやうなこと迄よく覺えて

ゐた。俊一郎も大分乘氣になつて、その話相手になつた。彼はまた得意氣に我軍が旅順で用ひた戰術のことや、戰後に於ける國際關係の變化なぞを明晰な調子で語つた。まだ露西亞は屹度復讐するに違ひない。矢張、日露同盟をして置いた方が好かつたかも知れぬなぞと誰かの論文を讀んだのを自分の意見であるかのやうに吹聽したりした。さう云ふことになると俊助はうむ、うむと返事をしながら傾聽するやうな風を見せた。それをはつきりと記憶にとめて置いて、何かの場合の話材にしようと心懸けてゐるやうにも見られた。

『燒打の騷動があつた時は實際凄かつたな。』

俊一郎は去年の夏は早く上京したので九月の初めに目擊したことを思ひ出した。

『私も見たわ。』と、とし子も口を出した。實はとし子は一向面白くもない話がいつ迄も續くので、もう團欒から離れて居間の方へ退かうとしてゐたその矢先に俊一郎の話が、自分の知つてゐることに觸れて來たので、思はず緊張した表情をして叫ぶやうに云つたのであつた。

『えらいことだつたらしいな。』と俊助も盃を置いて赤くなつた眼を睜つた。

『何んでそんなことをするやらうな。』と、おますは不思議さうに顏を顰めた。

『何んでたつて日本が損をして恥になるからや。』と、俊助は窘めるやうに云つて置いて、

『お前は騷動の時どんなところを見たのや。』と、好奇心に唆られてゐるらしく改まつた調子になつ



た。

『僕の友達なんか日比谷公園へ行つてゐて、抜劍した警官隊に追つかけられて池の中へ飛び込んで怪我をした奴があるんですよ。それから戒嚴令が敷かれてから、ひつぱられて一晩拘留せられた奴もありましたがね。僕は怖いから餘りそんなところへ近寄りませんでした。併し、本郷の警察の燒打が初まると云ふので直ぐ寮を飛び出して行つた時はもう大變な群集なんでせう。』と、俊一郎はちよつと言葉をきつて當時を追想するやうな眼色をした。

『私は神樂阪の上から、牛込警察署の前に大勢人が集まつてゐるのを見にゆきましたわ。』とし子はさも待ちかねてゐたやうに、俊一郎の言葉が杜切れた隙を見て口を挾んだ。

『へえ、としちやんまでが女の癖に……。』と、おますは俊助の給仕をしながら眼を圓くして、

『おゝ怖いこと、怖いこと……。』と、冷かすやうに云つた。

『女だつて子供だつて皆な行つてゐましたわ。薪に火をつけて投げ込まうとしてゐるところも見ましたわ。大勢の人が追はれて退くかと思ふと、またわーつと聲をあげて押寄せてゆくのよ。』と、とし子は調子づいて來るのであつた。

『本郷も矢張そんな風だつたね。何しろ軍隊が出動して劍付鐵砲で守つてるのだからね。僕が見てゐた時は發砲したよ。無論、空砲だがポンポンポン……と打ち出すと、群集は波が崩れるやうに退

くが、また押寄せる、石を投げる、硝子が壊れる、そりや大變なことだつたな。』と、俊一郎は手眞似なぞしながら興奮して語るのであつた。

いつの間にか俊助は飯を濟まして蚊遣を初めたので、恐ろしく燻る煙に噎せながら、煙管をつき出しては火をつけ、それを深く咽喉へひくやうな吸ひ方をしてゐた。それが如何にもうまさうに見えた。

燒打騷動の話がやつと濟むと、お婆さんや、子供なぞは門へ涼みに行き、下男は湯をつかつて夜遊びに出かけた。おますは下女に吩咐けて明日の朝の味噌汁のことや、晩餐の後片付を何くれとなく指圖してゐた。

俊一郎も書齋から敷島のくちやくちやになつた袋をもつて來て、二三本しか殘つてゐないのを吸ひながら、ふと思ひ出したやうに、

『お父さん、僕の友達がやつて來るかも知れませんが構はないでせうね。』と、云ひ出した。

『矢張、同じ學校の人かい。』と、俊助はさう父親らしく慈愛の籠つた調子で訊いた。

『え、さうです。僕のとこへ寄つて一緒に上京しようと云ふんです。まだ返事は出さないですけど。』

『來て貰へば好えやないか。お前も連れが出來て好えやろ。』俊助は無雜作に云つた。



『兄さん、何と云ふ方？』と、自分も門の涼みに加はらうとしてゐたとし子は、また新しい話題に移りさうなので、浮かせてゐた腰を落ちつけて云つた。

『うん、木村なんだよ。としちやん知らなかつたかね。』

『木村さん？　名前だけは確か、きいた覺えがあるわ。』

俊助は暫く默つてゐたが、『木村と云ふのはどこの人やね。同じ學科をやつてるのかい。』と、別に聞きたいとも思はぬが、退屈まぎらしにと云つた風に欠伸をしながら云つた。

『廣島縣の男ですよ。おやぢさんが藩士だつたらしいですね。才子風の男です。頭腦もさう惡い方ぢやないですが。高等學校では法科でしたが、大學では文科に變つたんです。』

『ふうん。さうかい……。』と、俊助は云ひながら、ごろりと手枕をして寢轉んで了つた。

『併し、天才氣取りなんだから滑稽だよ。』と、俊一郎は思ひ出し笑ひをして、獨語するやうに云つた。

『あら、さう。文學をおやりなの？』

かう云つたとし子の眼は異樣に輝いてゐた。

『さうだ。としちやんとは話が合ふかも知れんよ。』と、俊一郎は揶揄ふやうな眼付をして笑つた。

『でも、同じ文學と云つても程度が違ふんでせう。私なんかと話が合ふなんてことはありつこない

わ。』と、とし子は少してれ氣味で、極り惡さうに云つた。

『直ぐやつて來いつて返事を出さうかな。』

『あら、いやだ……。』と、とし子は突如起ちあがつて逃げるやうにして、凉みの連中のゐるところへ出て行つた。後に俊助があはゝゝゝと笑ふ聲を聞きながら。

『……お月さん幾つ、十三七つ、まだ年は若いな。』

弟妹達が歌ふのにつれて、お婆さんまでが、皺嗄れた聲で調子を合はせてゐた。その樣子を見ると、とし子はをかしくなつて思はず噴き出した。そして門の眞中へ持ち出した凉臺の端へ自分も腰をかけた。

『姉ちやん、見て御覽よ。お月さんを……。』と、弟の賢太郎が、頓狂な聲を出して叫んだ。

さう云はれて、東の空を見たとし子は、

『あら、本當に好いお月さまだわね。』と、思はず呟いだ。

墨汁をたつぷり含ませた太い筆で隈取つたやうな山が聳えてゐる上へ、大きな月の輪が頂邊を離れて、宙に懸つてゐるのであつた。空は水で洗つた一點の曇りもとめてゐない厚い青硝子のやうな深い色に澄みきつてゐた。丁度その面へ箝め込んだやうな月の光は實に神々しい位に美くしかつた。ちつと眺めてゐると、下界のことなぞはすつかり忘れて、氣が遠くなるやうな氣持になるのであつ





た。暫く恍然としてゐたとし子が傍を振り返ると、お婆さんも弟妹達もさながら感にうたれたやうに月の光に面を向けながら沈默してゐるのであつた。天地の間に水のやうに流れてゐる空氣は單衣一枚の肌をひやりとさせる位であつた。

間もなく弟妹達はまた騷ぎ初めた。そして、お婆さん一人に纏はりつくやうにして手古摺らせてゐるのであつた。とし子はさうした相手になるには餘りに心が靜かに沈んでゐた。で、いつ迄も自分ひとりのとりとめのない思ひに耽つてゐたかつた。先刻、俊一郎の友人の木村と云ふ文學好きの青年が來るかも知れぬと聞いて、思はず心を動かされたはしたない振舞を恥ぢるやうな思ひもまだ微かに波立つさうに心の中に殘つてゐたが、『何でもないことだ。何でもないことだ』と、わざと心の中で呟いて見ながら、凉み臺を離れて、ひとり門の方へ歩いて行つた。儼然と聳えた門はまだ耳門の方が開いてゐたので舊式の鎖で錘なぞのついた、その方の門をガラガラと開けて外に出た。

そこには堀割のやうな可なり大きな溝があつて、夜目にも淸冽な水が激しい流れの音を響かせてゐた。その先はずうと稻田になつてゐた。そこらはひつそりと靜まり返つてゐたが、スイスイと何の蟲だか分らぬが凉しい聲で鳴き頻る音が、心の落着きをかき亂さぬ程度で夏の夜を語つてゐるやうに感じた。とし子はぶらり〳〵と可なり廣い道を歩いて行つた。夏草の茂りから發する生々(なまゝ)しい匂ひのやうなものが勁く鼻を襲つた。そんなものを感ずる程、彼女の感覺は鋭敏になつてゐた。

凡そ二丁ばかりも行くと、直ぐ眼の前に數戸の家があつて、灯の光が洩れ、話し合ふ聲が聞えてゐた。とし子はふとこゝらで人に見られぬうちに引返さうと思つて踵を廻らさうとした。

その瞬間であつた。遠く遠く遙に光る一點の光が恰も星の光のやうにきらりと彼女の眼に映つた。それは廣い田圃續きの野良を隔て鐵道線路を越え、そのまだ先にゆるやかにのびた山の麓の稍小高いところにある灯の光であつた。瞳を定めて見ると、その灯はキラキラと瞬いてゐるやうに見えた。山の麓の一軒家——それは叔父の岡本勇三郎のかくれ家であることは改めて考へて見るまでもないことであつた。その叔父のことを考へると、勢ひとし子は眞吉のことを考へないわけには行かなかつた。併しそれは徒らに惱ましさを與へるに過ぎないことだつた。なるべく思ひ出したくないことだつた。さう思へば思ふ程、いろんなことがまざ〳〵と眼の前に頭の中にごつちやになつて浮んで來るのであつた。

眞吉が訪ねて來ると云ふ手紙はつい二三日前にうけ取つたばかりのとし子がさう思ふのは當然であつた。

晝休みの皆な懶さうにして、自分で自分の身體をもて扱ひかねてゐる時であつた。昨日から井戸で冷してゐた西瓜をあげて食べようと俊助が云ひ出したので、皆なの者も蘇生したやうな歡びを感じたのであつた。

家内中の者が寄り集つてさもおいしさうに自分の畑でとれた西瓜を賞味してゐる時、俊一郎が『若し木村が來たら、うんと西瓜の御馳走をしてやらう。』と云つたのが原因で、誰云ふとなく眞吉の噂が出たのであつた。

『あの子もどうするつもりやろな。』と、おますが氣遣はしげに云つた。

すると、俊助は急に眉を顰めて、厭はしさうな顏をした。が、間もなく口を開いて

『勝手にするが好えのや。わし等の云ふことをきかんで、あんな氣儘なことする人間にはもう望みがないと云うても好えやろ。矢張、親の子や、よう似とる。』と、吐き出すやうに云つた。

『あの子が確りしてくれんと、岡本の家も斷絶やがな。』と、おますはまたしても同情にたへないやうに云ふのであつた。

『何に、もう今日でも斷絶しとるのと同じことや。第一、何か云ふと眞吉はわし等の云ふことに楯つくやうなことを云つたりしたりする。』と、少しく怒氣を含ませた俊助は、

『お前も見たやらうが、あんな「關西時報」なんてものを發行してえらがつてゐたつて仕樣がありやせんやないか。』と、俊一郎に向つて同感を强ひるやうに云つた。

『え、さうですな……。』と、俊一郎は格別何とも感じないらしく云つたが、『眞吉君も學校がいやなら、何とか方針をかへて會社員にでもなると好いかも知れませんね。』と、仕樣事なしに云つた。

『さうなんぢや。』と、俊助は我が意を得たりとばかり聲を勵まして云つた。『あれもまだ世の中のことが分らんからいかんのや。生活と云ふことは生中なことで行くものぢやない。眞吉かていつ迄も青年では居れん。一年一年若くなくなるのやから、そのうちには一家も構へにやならん。それに、今のやうなとりとめもない考へに氣をとられてゐちや將來の見込と云ふものがないわけになる。あれの方から云へば、わしが十分金でも出してくれたらよかりさうなものとでも考へてゐるかも知れんが、金と云ふものは、さう〳〵容易なことで出せるものぢやない。それにあれなぞに出すのはまるで死金と同じことやからな。』と、眞劍になつて說き立てるのであつた。

俊一郎はまた父の講義が初まつたとでも思つたのか、ニヤニヤと苦笑してゐたが、『眞吉君も好人物だが、矢張、叔父さんに似て空想家なんでせう。今に考へもきまつて來るかも知れんから、もう少し面倒を見てやつたら好いでせう。』と辯護して勸めるやうに云つた。

俊助は一層不機嫌な顏付になつた。そして『いや、もう面倒を見ることは御免や。學校は退學される。その上どこの馬の骨か分らん人と一緒になつて下らん新聞のやうなものを發行する……わしには一々氣に喰はん。今度會つたら、よく話をしてもう斷然宣告を下すつもりぢや。』と、きつぱりと云ひきつて了つた。

『何とかならんものかな。』と、おますはハラハラするやうに、不安さうに一座の顏を見廻した。すると、ふととし子の眼と合つた。とし子は何事かを訴へるやうな表情をして、ぢつと母の顏を見た。併しおますは一旦云ひ出したら一歩も後へ退かない夫の氣性を知つてゐるので、何を云つても仕樣がないと諦めるやうな氣持になつて行つた。

『會つたら僕もよく話して見ますよ。』と、俊一郎は激してゐる父を宥めるやうに云つた。

とし子はぢつと俯垂れて聞いてゐるのみで、何一言云はなかつた。いや、とても眞吉の事に關しては自分で云ふだけの勇氣はなかつた。唯氣の毒で溜らない氣持になるばかりだつた。それは自分の愛を再び甦らせようと云ふ心からでなく、一個の人間としての彼の運命に涙を注ぎたいやうな氣持になつたのであつた。

眞吉に對する同情と憐愍の情はとし子の胸にも溢れるばかりにあつた。彼の將來を危ぶむ念も、決して他人には負けない程もつてゐた。また、幼い時からの數々の思ひ出をくりひろげて見ても彼によつて特に惡意を抱かせられるやうなことは何一つとしてなかつた。寧ろ、好意をもちたい事の方が多い位なのである。ところが、いつの頃からともなく――いや、去年上京してから後のとし子の心から明かに眞吉の影が薄らいで行つた。それが遂に、警へ家の人達の意志は以前と變らなくても

自分だけはもう眞吉と將來を共にするなど云ふことは避けようと決心するやうになつたのである。

それと云ふのも、家の人達の心持が反映したことも爭はれなかつた。併し、希望の多い自分の一生を托し、また理想を實現させるには到底、眞吉のやうな青年では不可能だと云ふことを悟つたのであつた。彼女は東京の生活に入つてからは、さま〴〵な人を知つた。これ迄見なかつた世界のことも知つた。多くの有爲な青年の姿も眼をひかずには措かなかつた。かうなると、今迄の自分の愛の對照が餘りに貧弱であり賴りないことを知つた。またこれから發展されるであらう愛慾の世界に對して不安なやうな、血の燃え立つやうな空想は、自分の現在が餘りに灰色であり、希望の少いことを感じさせたのであつた。で、眞吉を氣の毒がり、憐れむ心持は一層募つて行つたが、併し、その爲めに自分の心を抑げようとする氣持は幾ら努力しても出來さうには思はれなくなつた。で、彼の幸運を祈ると共に、自分の運命も幸多かれと願つた。彼には彼の定められた行くべき道があらうし、自分は自分で求めてゐるものは與へられねばならないと思ふやうになつたのである。

今度、歸省して見ると、父の決心は既に定つてゐることを感知した時は、流石にびつくりした。何となく眞吉に對してすまないやうに思つた。併し、その後の彼の行狀を聞いて見ると、父の考への無理でないことも分つた。同時に自分の決心も一層鞏固になつて行くやうに思はれた。

――併し、先刻父と兄との間に語られた話を聞いてゐる時は、とし子も座にゐるにもたへないやうな氣持になつた。そして、皆なが好意のない、輕蔑するやうな氣持でゐるところへそんなことは少しも知らずにやつて來る眞吉の慘めな姿を想像すると、身を切られるやうな氣がした。自分が此方へ呼び寄せる結果になつたことを考へると、何となく罪が深いやうにも思ふのであつた。が、今更、手紙を出して思ひとまらせようとするのは、一層慘めにすることだと思ふと、もう策の施しやうがなかつた。寧ろどんな結果になるとしても、それを默つて迎へようと決心した。

『もう、なるやうになれ！』と、云つた捨鉢な氣持になつて、とし子は居間に退いて、机に凭れて見たが、何をする氣にもなれなかつた。心は憂鬱に閉されるばかりで、早くかうした心持から遁れて、晴れ〴〵とした華やかな世界に自由に呼吸の出來るやうな氣持になることを欲した。こんな風では、生みの親の膝下にゐても少しも樂しくはないやうな氣がした。理窟つぽい、實利主義な父、無知で張合のない母、學問にばかり凝つてゐる趣味のない兄――さうして肉身の間に挾まれてゐることが、何となく息苦しく感じるやうな心持になるのを否むわけにはゆかなかつた。

『木村さんが來る。』何者かゞ彼女の耳許でかう囁くやうな氣がした。

田舍住居に飽き〳〵したとし子にとつてはそれは何となく期待を唆る訪れでなければならなかつた。同時に眞吉のやつて來るのと、かち合はないかと云ふ不安はとし子の心を尠からず動搖させた。

中田家は門構への、まるで城郭のやうな觀を爽へる邸宅であつた。裏には丘陵續きの山を背負つて、廣い庭園の小池には船を浮べることも出來た。大きな母家の甍は聳え、幾棟かの白壁の土藏は日に輝いて、その富を語つてゐた。主人の俊助はもう五十近い年輩で、若い時には隣國の池田侯の經營してゐた學校に入つて、新しい學問も修めたが、餘り好まぬ道だつたので、それきり上の學校には入らなかつた。先代の歿後は家長として、あり餘る程の富を守り、その上にも貨殖の道を講ずることを怠らなかつた。その爲に多少非難を受けたこともないではなかつたが、何しろ、昔からこの地方の豪家として聞えた名門なので、誰一人後指をさすやうなことはなかつた。

土地の人は、この中田家を俗に『東』と呼んでゐた。それに對して、岡本家は『西』と云ふことになつてゐた。この兩家は最早十幾代と續いてゐる舊家なので、ずつと昔のことは分らないが、元からの姻戚ではなかつたらしい。が、いつの頃からか婚姻を取結ぶやうになつて、次第に濃かな血緣關係になつて來たのである。最も近い處では、俊助の母親は勇三郎の父の妹であり、眞吉の母親は俊助の妹であつた。こんな風で、兩家はきつてもきれぬ間柄であつた。系圖を辿つて見ても昔のことは茫漠として探ることは出來なかつたが、一の谷の落ちた時か、屋島に敗衂した時かに遁れて來た平氏の一門であると云ふ傳說がある位で、長い間、この地方に誇つてゐた一族であることが分る。

今でも俗に平家樣々々々と呼んでゐる幾基かの古墳があつて、兩家で祭つてゐるのを見ても、全然平氏と緣のない家であるとは思はれない。兎に角、さうして長く榮えて來たのである。

岡本家の勇三郎と俊助とは同じ位の年輩で從兄弟になるから、固より幼い時からの友達であつたことは云ふ迄もない。が、長ずるに從つて、その二人は何かにつけて世間から比較されるやうになつた。劇しい競爭的立場に置かれたことさへある。が、俊助の方は學問を好まず、堅實で物質的な人間であつたのに反して、勇三郎の方は進取の氣象に富んだ、濶達で、華やかな事を好む性格であつた。で、俊助が學事を放擲して家に歸るやうになつてから後も、勇三郎は東京に遊學した。そして、初めは高等商業の前身である學校に入つたが、後になつて法律學校に轉じて政治を學んだ。この地方の人達が俊助を閑却して、勇三郎の方に囑望したのは當然であつた。前途有望の青年として今にこの邊きつての人材となることは誰でもが認めてゐた。

併し岡本勇三郎の名がいろんな人の口に喧傳されることは、俊助の窃に面白からぬ感情を抱くことになつた。表面が圓滿であり、また勇三郎に對して一目を置いてゐるだけ、內心の嫉視は人の眼にもつく位であつた。勇三郎の成長と進步は實際目覺ましいものがあつた。まだ二十一二である頃から、政治に興味をもつて、ルソーの民約論なぞを讀み、自由民權の思想が興るにつれて、實際運動にも加はつた。また、實業界にも眼をつけて一面財力を持たなければ大事を成すことが出來ぬと

云ふことを考へてゐた。彼は學業を中途に廢して、鄉里に歸つて、開墾事業に着手したり、青年を集めて、私塾のやうなものを開いたりしてるかと思ふと、東京に走つて名士の門を敲いて政治論を闘はしなぞした。また、神戸に於て、海外輸出の商會のやうなものを設立したりした。そんな事でいつしか私財を減らしたことも少くはなかつた。が、十分にその手腕と見識を認めてゐる先代もまた周圍の人達にも何一つの反對するやうなことはなかつた。唯々信頼しきつてゐたのである。併し、その奔放不羈で、大膽なやり口を危ぶみ、非難したのは矢張、俊助であつた。實際、その華々しい活動振りは見てゐるだけでもたまらない氣がしたのであつた。

その頃はもうずつと後にとり殘された形で　誰も勇三郎と比較して、俊助を彼此云ふものはなかつたが、俊助にして見れば到底平かな氣持でゐることは出來なかつた。そして、先代が勇三郎の云ふなりになつて財産を減らすことを顧慮しないのを見ると、『今に後悔するのだ。』と云ふ意識なしには眺めることが出來なかつた。

併し、それ位のことでは、岡本家もまだびくともしなかつた。依然『西』として立てられ榮えてゐた。俊助の妹のはま子が嫁した時なぞは、その盛大な結婚式は恐らくこの地方にあつては空前絶後だらうと喧傳された程だつた。結婚してから後も勇三郎は東奔西走して席温まるの暇はなかつた。憲法發布の前後なぞは東京にゐて多くの政客に交つて演說なぞをして歩いてゐた。第一回の衆議院議員選擧の時は歸省して大いに畫策し、同志であり先輩である原田龍藏を助けて立候補せしめて自ら運動した。これとても將來自分が起つ時の準備だつたのである。彼の雄辯は肝腎の候補者たる原田よりもうまいと云つてうける程だつた、それはまだ彼が僅に二十七八の生若い年齡の時であつた。選擧運動は大に猛烈を極めたが、當時俊助は周圍の者が熱狂するのにも係はらず、何となく冷然としてゐて、傍の者から不思議がられた程であつた。

遂に原田が當選した。勇三郎の名聲は原田を壓して轟き渡つた。彼が漸く慢心を生じて、天下の事我一度唾して立たば何事か成らざらんと云つたやうな考へは、その時から兆し初めたらしい。それから後も一箇の青年政客として衆望を集め、いろんな事業にも手を出したが、次第に運の傾いた彼は盡く失敗の歷史をつくつたのに過ぎない結果になつた。が、夢は容易に覺めなかつた。一事が敗れると放浪し、また畫策しては躓きして、殆ど二十年間はそれの連續を繰返したのである。

原田龍藏はその後二度まで續いて落選し、今では衰殘の老軀を鄉里に横へ、勇三郎は刑餘の身を酒と果樹の栽培なぞで漸く鬱を慰めてゐる。三四年前迄は兩親も生きてゐたが、相次いで歿すると共に、負債の抵當として流れる筈であつた邸宅は、俊助が買ひとつて、漸く他人の手に渡るのを免れたのであつた。その以前から、表面隱遁の形式で山の小屋のやうな家へ移つてゐた勇三郎は俊助が自由に住んでも好いからと云つて、くれるのを斷つてずつと隱遁を續けてゐるのである。勇三郎

にして見れば、それは當然のことで、おめ〳〵と俊助の好意に從ふことは出來よう筈はなかつた。未だに昔の夢を追ひ、何かやれさうな空想を抱いてゐても、とても一旦枯れた芽は出さうに思はれないのである。

それにひきかへて、『東』の中田家は益々隆々として榮えて行くばかりである。俊助は縣會議員にもなつた。その他の名譽職はたえず續けて務め、今では村長を止めてこの地方の銀行の重役と郡會議員とだけをやつてゐる。子供も秀才である俊一郎を初め、妹のとし子以下三人の兒女があつて、和氣堂に滿ちてゐる有樣である。さうして何一つ不足のない境遇は、『西』の岡本家の無殘な荒廢と沒落に比べると、餘りに甚だしい相違であつた。

が、爰に一つ面白いことは、失意と落魄に身を落した勇三郎が一人の男の子である眞吉によつて、自分の成さうとして成し得なかつた理想を實現しようとする夢想を長い間抱いてゐたのに反して、俊助の方は自分には曾て夢にも思はなかつた、却つて勇三郎が描いてゐたのに似通つたことを俊一郎によつて實現させようとしてゐることである。それは、學校も法科を志願させて、行く〳〵は實業家ともなり、政治界にも足を踏み入れさせようとしてゐることを見ても分る。而も眞吉はどうやら父に背くやうな傾向があるが、俊一郎の方は別に父の命令に從ふと云ふのではなくて、天賦の資質が自らさう云ふ方面に向つてゐるのであつた。



殆ど三十年近くも昔に勇三郎が嘱望せれらて、俊助が顧みられなかつたやうに、今は何彼につけて俊一郎の噂は人々の口に上つたが、眞吉はまるで閑却せられてゐるのである。と云ふよりも、寧ろ憐まれ氣の毒がられてゐるのであつた。

眞吉ととし子の婚約は表立つてとりきめられてゐるのではなかつたが、誰しも兩家の昔からの關係を知るものは、さうなるものと信じて疑はなかつた。殊に一家は零落しても、眞吉の祖父母が存命中には確認されてゐた事實であつた。眞吉に向つて俊助が譬へ少額でも學資を支給すると云ふことも、その證據だと思はれてゐた程であつた。生來吝嗇である俊助が、その外の理由で一文でも金を出すものぢやないとは、ちよい〳〵周圍の人が噂する位であつた。ところが、最近になつて、俊助の口から眞吉に對する非難の言葉が時々洩らされること次第に高くなつた。同時に同じ口から血族結婚の非が主張されるやうになつた。その理由はないではない。現在眞吉の妹のいと子が白痴であるのも、その祖父の弟が狂死したのも、また母親のはま子が自殺したのも皆血族結婚の爲に血が狂つてゐるのだと俊助は思つてゐるのであつた。それに、勇三郎と俊助とは殆ど往來することはなくなつた。勇三郎の方が避けてゐるせゐばかりでなく、寧ろ俊助の方で敬遠してゐると云つた方が適切であるかも知れぬ。それに、勇三郎が刑法上の罪を被せられてから、さうした態度が一層烈しく、露骨になつたやうに思はれた。尤も、裁判中に俊助が奔走し盡力したことは容易ならぬものが

あつたが、それは勇三郎に對する好意と云ふよりも、自分の名譽を守る方が、より重大であつたことは誰しも認めてゐた。

かうなると、近來眞吉が中田家に對して疎々しくなつたのも、さうしたところに種々原因が潜んでゐることと想像して、婚約破棄と、延いては兩家が次第に絶緣狀態になることは最早爭はれないことだと、傍でも噂する位になつた。

丁度眞晝の暑さの盛りで、庭の樹立からは囂しい蟬の聲が聞えてゐた。とし子はまたしても、机に凭れて同じく地方に歸省してゐる友達や、東京の田邊あや子なぞへの手紙を認めてゐた。文學好きの友達へ宛てるので、いつも苦心して、文句を考へなければならなかつた。

別に用事があるわけではないので、書き綴られる手紙はすべて、雜誌の上なぞで流行してゐる美文口調の文章で、心の惱みを訴へるとか、夢のやうな憧れを叙べるとか云つたものに過ぎなかつた。

よべの月はうらめしくも雲に蔽はれて候ひき

さすがは秋立ちてより既に幾日夏の夜とは申せ、秋の氣は野にありて、吹く風もさびしさを覺え候、わが彈ずるヰオロンの音は上りて月の宮までもとゞくらむと思はるまで高う高う鳴り候ひき。今宵も明日の夜も必ず月下に立ちて奏でんに、わが心を汲み給はば、ひとり外に出でさせたまへ。地を隔つること二百里に餘れど、月はあまねくわが世を照らせば物思はしき君が俤も、愼み多きとしが眉も、同じ光を浴びて……

こんなことを綴つてゐると、ふと、とし子の耳にはりん〳〵と云ふ車の轍の音が、炎天に響くのが耳に入つた。この邊では車に乘る人は少い。それに、とし子は直覺的に誰かゞ自分の家へやつて來るのではないかと閃くやうに感じたのであつた。直ぐ隣室の兄に何か云はうとして、顏を振向けた。が、俊一郎は讀みかけの雜誌で面を蔽うたまゝ轉寢をしてゐるのであつた。それで氣付いたのであるが、廣い家の中は眞晝とは思はれぬ程、しいんとして、皆なが晝寢をしてゐることを感じさせた。こんな時に來客に襲はれてはと云ふ不安も起つて、とし子は直ぐ緣側へ出て邸宅を繞らす土塀越しにずつと先の街道の方へ視線を送つて見た。が、車の音は思つたよりも此方に近づいてゐて、もう塀や、樹木の蔭になる程やつて來てゐるらしかつた。

とし子は直ぐ慌だしく引返して、『兄さん、兄さん！』と、身體に手をかけて搖り起した。

俊一郎はとぼけたやうなことを口の中で呟きながら起きあがつて來た。まだ、眠りの覺めきらぬ眼は眞赤に充血してゐた。

『あのね。車の音がするのよ。』

『うちへ來たのかい？』
『まだ分らないんですけど、若しかしたらさうぢやないかと思つて……。』
『何あんだ。そんなことで僕を起したんか。ひどい奴だね。』
『でも……。』と、とし子は多少は自分の輕率を恥ぢるやうな氣持で、何か云ひ譯をしようと思つたが、矢張、車の音は門前にとまつた氣配らしいので、『さうら御覽なさい。家に違ひないわ。』と、誇らしげに云つた。
『誰だらう？、ひよつとすると木村が來たのかも知れないよ。』
『私もさう思つてよ。何だかそんな氣がするわ。』とし子はもう胸がわく〳〵するのを覺えるのであつた。
俊一郎は勝手の方へ行つて、顏を洗つて玄關へ出た時は、もう、來客はそこに荷物を擔いだ車夫と一緒に突立つてゐるのであつた。
『やあ……。』
『やあ……。』
主客は殆ど同時に聲をかけ合つた。矢張りやつて來たのは木村だつたのである。手にした麥稈帽子には大學の徽章がついてゐた。粗い紺絣を着て、小倉の袴を穿き、銀緣の眼鏡をかけてゐたが、



身體付の華奢な案外色の白い青年であつた。俊一郎は隔てのない調子で、『さあ、あがれよ。隨分暑かつたらう。』と云ひながら、自分で荷物を運んでやつた。木村も後からのそり〳〵と續いて座敷に通つた。
『君の家は好いね。これぢや、靜かで涼しくて好いだらう。』と、木村はハンケチを出して額の汗を拭ひながら、四邊を見廻した。
『何にさうでもないよ。暑い時はどこにゐたつて同じことさ。君、袴をとれよ。裸になつた方がよくはないか。』と俊一郎は自分から先に兩肌を脫ぎかゝつた。
木村が袴をとりにかゝつた時分に、ひどくどきまぎした心持でとし子が挨拶に出た。木村も慌てて口の中で何か一言二言云ひながら頭をペコペコとさげた。
『妹だよ。』と、傍から俊一郎が紹介して『何か冷たいもの、麥湯の冷したのでも持つて來ないか。』と、とし子に命じた。
『田舍だもんでございますから、何にもありませんので……兄さんラムネならありますけれど……』と、とし子は兄の顏を伺ふやうに見た。
『ラムネ？　いや、麥湯の方が好いだらう。この邊で賣つてるやつはいけないよ。またこの間のやうにをりがたまつてゐるやうなやつだと閉口するからね。』と、俊一郎は顏を顰めながら云つた。

とし子は勝手の方へ退いて、まだ晝寢をしてゐた父や母を起して廻つて、木村の來たことを知らせ女中を近所の店へ梨を買はせにやつたり、自分が麥湯に砂糖を入れて座敷に運んだりした。單調に倦んでゐた一家の空氣が、珍客によつて幾分か破られたやうで、とし子は何となくいそ〳〵として立ち働くことが出來るやうに思はれた。

『何か讀んだかい？』と、俊一郎は訊いてゐる。

『うむ。勉强はしなかつたが、外のものは多少讀んだよ。君は隨分やつたらっ？』と、木村が聞き返した。

『外交史を少しばかりやつただけさ。矢張、夏は思ふやうに出來ないよ。』

『それでも君は少しでもするから好いよ。僕と來た日にや、自分の好きなものばかり讀んでるんだからね。』

『それも好いさ。いよ〳〵文學にこりかたまるわけだね。』

『いやに皮肉だね。英譯の小說を三四冊もつて歸つてたからね。矢張、西洋のものは面白いよ。』

『どんな者が面白いのだい？。』

『僕はハウプトマンや、ゴルキーのものを見たが……』

『自然主義のかね、はゝゝゝゝ。』と、俊一郎は皮肉な微笑を浮べた。

『何がをかしいのだい？　自然主義自然主義なんて冷笑するやうに云ふが、そんな不眞面目なものぢやないよ。そりや、モーパッサンのものなぞを讀んで見ても、所謂肉慾描寫が澤山あるさ。併し、それは決してふざけたものぢやないからね。』と、木村はむきになつて辯解するやうに云つた。

二人は早くも一高時代の氣分に返つて、無遠慮に大きな聲で話し初めるのであつた。そこへ、梨なぞを運んで來るとし子に氣がつかなかつた位であつた。で、とし子が傍でニヤニヤして居るのを見ると、木村は急に居住ひを直したりして、極り惡さうにするのであつた。とし子はその樣子を見ると、思はず袖を口にあてゝ忍び笑ひをした。

『君！　妹の奴は君黨なんだよ。まだ自然主義ぢやなからうが、文學熱に浮かされてゐる組なんだよ。』と、俊一郎はふいと思ひついたやうに云つた。

『あら、兄さん……うそですわ。』

『それぢや、何かね。まだロマンチック時代と云ふわけだね。』と、木村が梨を嚙りながら口を出した。

『何、まだ美文のやうなものを讀んで涙を流してる組だよ。幼稚なものさ。』俊一郎はつけ〳〵と、とし子の顏をちよい〳〵見て笑ひながら云ふのであつた。

『何とでもお云ひなさいよ。どうせ幼稚ですからね。』と、とし子はちよつとすねたやうな眼をして俊一郎を睨んで置いて、クスクス笑ひながら、そこを退いた。

夕方になつて木村が湯からあがると糊で硬ばつてごわ〳〵するやうな浴衣を出して着せた。俊一郎が代つて湯に入つてゐる後は、木村は縁側へ出てひとりぼんやりしてゐた。そこへ、とし子はランプを運んで灯を點けた。

『女子大學へ行つてゐらつしやるさうですね。』と、その時木村が訊いた。

『は、……どうせ、大學部も家政科ですからつまりませんわ。』と、とし子は打明け話をするやうに慣々しく云つた。

『さうですか。ぢや、寮にゐらつしやるのですか。』

『いえ、初めのうちは居りましたのですけれど、大變好い家がありましたので、お友達の紹介で只今はそこに居りますの。』

『さうですか。』と、木村はとし子の方は見ずに話しつゞける。『文學がお好きなのは本當なのですか』

『は、本當に好きでございますわ。ですけど、まだ何にも分りませんの。ですから、あんな風に兄から始終冷かされて居りますの。』

『中田君はあれでなか〳〵口が悪いですからね。』

『ほほほ……それに文學なんか嫌ひですし……。』と、とし子は調子を合はせるやうに云つた。

木村一人をうつちやつて置くのは、何だか來客に對する禮儀でない樣な氣がするので、とし子は何となく落付かない氣持でもぞ〳〵しながら離れることが出來なかつた。木村は率直な調子で、俊一郎とは一緒の寮にゐた關係から、親密になつたこと、鄕里が同じ中國であり、また、どこか性格にも反對なやうで、相通ずるところがあるなぞと云ふことをも話すのであつた。併し、とし子の見るところでは、兩者の性格に通ずるところがあるなぞとは、どうしても思はれなかつた。かうして木村に接してゐると、色の白い顏に神經質なところが見え、どうかすると、其の眼に潛んでゐる情熱が動くやうな感じを與へられるやうに感じるのであつた。

『この裏の山はずつと深くなつてゐるんですか。』

暫く話が杜切れてゐたが、木村がふいに口を開いた。

『は、可なり深く奥迄あるんですよ。少しこの下へ行きますと、谷川もありますの。つまらない山ですけど、もう秋草なんかゞ咲いてるだらうと思ひますわ。』

『外にはどこか散歩にでも行くところはないですかね。』と、木村が訊ねる。

そこへ、俊一郎が猿股一つで、着物と帶を丸めて抱へながらやつて來た。そして、木村の話を耳にしたのか、横取して、

『どこだつて行くところはありやしないよ。併し二里ばかり行くと、俗に羅漢樣と云つて、巖窟の中に五百羅漢が祭つてあつて、ちよつと景色の好いところはあるがね。』と、快活な聲で云つた。
『兄さん、二里なんてありませんわ。精々一里半だわ。』と、とし子が云つた。
『近道をすればさうだよ。木村案内してやらうか。握り飯でもこしらへて行くのも好いね。』
『案内してくれ給へ。仙境らしいぢやないか。』
『古いものであることは記錄にも殘つてゐるから間違ひがないさうだがね。何と云ふ人の彫つたものだつたかな。』俊一郎は暫く考へてゐたが、思ひ出せなかつた。
とし子も頭を傾げて見たが、矢張、思ひ出せない。が、自分もお仲間に入れて貰つて散歩に行くのだつたら面白いと心窃かに思ふのであつた。
木村と俊一郎とは二人だけの話を初めたので、とし子は仕樣事なしにたちあがつた。
晩餐の時には、とし子は木村に出す膳拵へをしなければならなかつた。卵などの入つた吸物、燒肴、胡瓜揉みなぞ――田舍で出來るだけのことはした。父の俊助も初對面の人だから、今晩だけは座敷で一緒につき合ひたいと云ひ出した。それを聞くと、俊一郎は餘り歡ばない顏を見せた。とし子も心の中では同樣だつた。若い人達の間へ老人が交るのは徒らに窮屈な思ひをさせるのに過ぎないと云ふ心持があつた。それだけならまだしも、酒氣を帶びて、畑違ひの話を何の察しもなく持ち



かけなぞしたら木村はどんなに困惑するだらうと云つた取越苦勞も感じられるのであつた。併し、それを止めさせるわけには行かなかつた。
『……木村さんのお國はお酒が好えと云ふことですが、本當でせうな。』
とし子が膳や銚子なぞを運び初めた頃は、もう父が湯あがりの胸を披けて團扇で風を入れながら話しかけてゐるのであつた。
『は、酒はなか〳〵好いと云ふ評判です。まあ灘以西では第一なんでせうから。』と、木村はハキハキした調子で答へた。
『あんたは飲けるでせう。お生れがお生れで……』と、俊助は笑ひを含んだ調子で云つた。
『いや、餘りいけません。少しばかりです。それでも中田君よりは強いかも知れませんが……』
すると、俊一郎が傍から引取つて、『さうかな。併し、僕は直ぐ顏が赤くなるが、君は蒼くなる方だから、強いやうに見えるのだよ。』と、抗議するやうに云つた。
『蒼くなる？』と、俊助は感心するやうに云つて、『ふうむ。それぢや、強くなられるたちですな。併し、まあ、餘り學生時代は飲まん方がよろしいやろ。腦が惡くなるから、ははははッ……。』と、俊助はひとりで機嫌の好さゝうに笑つた。
一通り膳や肴を載せた臺なぞが運ばれると、とし子が銚子をとつてお酌をした。木村は不器用な

手付で盃を持つてゐた。俊一郎はグイグイと飲んだ。さうした樣子を見ながら、俊助はさも愉快さうに滿足さうに眼で笑ひながら、チビリチビリと盃を舐めるやうにして飲むのであつた。

『俊一郎は酒を飲むとよく物を食ふな。』と、俊助は倅の方を見ながら云つた。

見ると俊一郎はグイグイと酒を呷つては、ムシヤムシヤと矢鱈に食つてゐるのであつた。それで、皆なは噴き出して了つた。

『僕は何か食はなけりや飲めんからな。』と、もう眞赤な、まるでうで蛸のやうな顏をあげて、誰にともなく俊一郎は云つた。

『兄樣、お代りをあげませうか。』と、とし子が早速愛嬌のつもりで云つた。

『うむ、吸物があつたらくれ。』と、俊一郎は直ぐに椀をとつて突き出した。

それで、また皆なは一緒になつて笑つた、俊一郎も苦しさうに呼吸をしながら、後からとつてくつつけたやうに笑つた。

『寒い夜によく本鄕通りのおでん屋に寄つてあついやつを飲んだね。』と、木村は俊一郎が酌をしてくれるのを受けながら云つた。

『うむ。あいつはうまいね。一高屋と云ふのが一番おでんがうまかつたよ。』と、俊一郎も冬の夜のことを思ひ出してゐた。

『おでん屋と云ふと……、うむ、あの大阪邊では關東煮と云ふのやないかな。路傍の屋臺でグツグツとよく煮ながら賣つてゐる……。』と、俊助が訊いた。

『は、多分それでせうね。東京には大變多いですよ。そして、紳士でも女でも誰でも立ち食ひをして平氣なんですよ。』と、木村が說明してきかせた。

『あら、女がおでん屋なんかへ入りまして？』と、とし子は自分が侮辱されでもしたやうに、不平らしく云つた。

『こりや失敬しましたね。女と云つても誰でもと云ふわけぢやないですが、偶に入つてる人もありますよ。』と直ぐ木村は神經質らしく言ひ譯をするやうに云つた。

『女がおでん屋に入るのはちよつとも珍らしく無いさ。鮓屋だつてどこだつて、東京の人は男でも女でも平氣で立食ひをしてゐるよ。』と俊一郎はとし子をきめつけるやうに云つて、『とし子さんでもお友達と大福の立食ひなんかやつてゐるのぢやないかい？』と、揶揄つた。

『いやよ。幾ら無作法でもまだ道傍で立食ひなんかしたことはないわ。』と、とし子は眞劍になつて刎返すやうに云つた。

俊助は眼尻に皺を寄せながら、ひとりで酌をしながら、飲んでゐたが、『つまり西洋の立食と云ふやつやな。はははッ。』と、大變好い洒落でも云つたやうなつもりで得意さうに身體を搖すつて笑

つた。が、直ぐ調子を變へて、『學生がそんなとこへ入るのはやかましく云はれんのかな。』と不審さうに云つた。

『構ふもんですか。夜遲くなるとよくおでん屋で酒を飲んで寮歌なんか五六人で歌ひながら歸つてゆくのですよ。おでん屋でも、西洋料理でも隨分學生が這入つて飲んでゐますからね。』と、俊一郎は自慢するやうに云つた。

『ほう。さうかな。矢張、東京は學生の本場だけあつて盛んやな。』と俊助は思はず眼を睜つた。

『そりや、地方の中學校なんかのやかましく云ふのとはまるで違ひますからね。芝居だつて、活動だつて自由ですし……。』と、木村はさも學生生活の愉快さを讃美するやうに云つた。

『女はつまらないわ。』と、とし子が戯談のやうに云つた。

『そりや、當然さ。』と、俊一郎が一言の下に斷定した。俊助は面白さうに笑つた。

こんな風で、晩餐は樂しい談笑のうちに終つた。とし子は女中に手傳はせて、後片付をしてから、自分の晩飯をすました。何となくうきうきした氣持になつて、母親なぞに向つても木村の噂をしてきかせたりした。

食後は俊助が用事があると云つて隣家へ行つて了つた。木村と俊一郎は少し酒に酔つてゐるので、つい、場所を忘れて、時々通つた西洋料理屋のウェートレスの噂なぞを、面白さうに話してゐるのであつた。



『僕はあのおきみと云ふ方が好いね。君はどうして、あんな小生意氣なおよしなんか好いんだらう？』と、俊一郎が不審がる。

『僕だつて、さう大して好きと云ふ程ぢやないさ。併し、およしは文學が話せるからね。』と木村は眞面目になつて答へる。

『ウフフ……また文學かい。氣障な話は止せよ。』と俊一郎はわざと眉を寄せた。

『氣障でも面白いよ。君にはその興味は分らんさ。』木村は空嘯くやうに云ふ。

とし子はちよい〳〵座敷へ茶を運んだり、菓子を持つて行つたりするので、二人がそんなに他愛もない話をしてゐるのが耳に入つた。何か一言冷かすやうなことを云つてやりたいとも思つたが、木村に對しては、何故か輕い調子で云へないやうな氣がした。

そんな話をしてゐるかと思ふと、二人は大眞面目になつて、經濟學の『財の因果關係』と云ふやうなことを論じ合ふのだつた。俊一郎が熱した調子でアダム・スミスがどうのかうのと云ひ出した頃は、木村の方は受太刀で聽手になつてゐた。とし子は座敷の片隅へ蒲團や蚊帳を運びながらも、『あんな話はもう止めにすれば好いのに。』と、思ふ位であつた。

とし子の胸には機會をつくつて木村と文學談をしたいと云ふ心持が、頻りに頭を擡げかけてゐる

のであつた。



## 第四章

下關行の終列車が△△驛に着くと、ズックの鞄をさげて、白地の單衣に小倉の袴を穿いた一人の青年がひよいとプラットフォームへ身輕に飛び降りた。下車客と云つては外に背のひよろ高い、薄い髯をたてた四十恰好の男だけであつた。

青年はその男と前後して、寢呆け顏をした驛夫に切符を渡して、驛の前へ出た。そして、伸がありはしないかと、あたりを見廻したが、もう人つ子一人見えなかつた。蒸し暑い夜のことなので、戸を少し開けて、灯の洩れる家もあつたが、しいんとして深々と睡つてゐるらしかつた。青年は當惑さうな顏をして、鞄をさげたまゝぶら〳〵と歩き出したが、ふと件の男が此方を振向いた機會を捉へて、

『あの、もうこゝには俥はないでせうか。』と、訊いて見た。

『さあ、もう遲うがすからありませんでせう。』と、その男は云つた。

その時、青年の方から近づいて、ひよつと顏を見合せると、

『岡本さんですか。』

『田村さんですか。』

と、同時に聲を懸合つたのである。

二人はやがて改めて挨拶を交はしてから、肩を並べて歩き出した。

青年は云ふまでもなく岡本眞吉であつた。一方の男は田村と云ふが、近村の人で、以前役場に出て長く助役をしてゐたこともあつた。で、自然父とも知り合だつたことを眞吉は思ひ出した。併し、そんなことを知られてゐるだけ、餘り深入りした話はしたくなかつた。殊更に夜を選んで歸省したことが人目を避ける爲であるのを感付かれやしないかと云ふ懸念もあり、また父や自分のことが話題にのぼることは、たまらないと思ふからだつた。で、何でもない話を交はしながら、石塊の多い田舍道を歩いて行くのであつた。

曇つた夜で、月もかくれ、あたりは薄暗かつた。路傍の草叢からは蟲の聲が聞えてゐた。

『中田さんの御兄妹も歸省して居られますな。』と、田村が云つた。

『さうでせうね。お逢ひになりましたか。』と、眞吉は氣乘りのしない調子で訊いた。

『ちよつとお見かけはしましたが……。』と、田村はちよつと語をきつて、『お二人とも大變學校の御成績がよろしいさうで……。』と、感心するやうに云つた。

『さうですつてね。妹の方は兎も角、俊一郎君の方は秀才で、勉强家ですからね。』

『さうですね。お父さんがお歡びなさるのも無理はありませんわい。』と、田村は何故かウフンと云



つて笑つた。

眞吉も思はず聲には出さずに顏に苦笑を浮べた。中田の伯父は屹度子供の自慢をして歩いてゐるのに相違ないと思ふと、多少忌々しく感じずにはゐられなかつた。それに反して、自分達父子がどんなに惡評を立てられてゐるか知れはしないと思ふと、自然と氣が滅入つて來るのであつた。

十丁餘りも一緒に行くと、岐れ路になつて眞吉はそこで別れて反對の方向へ行かねばならなかつた。で、お互に『左樣なら』を交はして一人になつて了つた。眞吉は田村の姿が白つぽく浮びながらひよつこり〳〵と行くのを見送つたが、直ぐ急ぎ足になつた。一里もある父の住居に行くのは、可なり辛かつたが、併し、早く會ひたいと云ふ思ひも痛切だつた。かうした場合、矢張、何と云つても自分の味方は肉身の父より外にはないと云ふ考へは無意識のうちにもあつた。殊に氣が弱くなつてゐる今の彼には、父のことを思つたゞけでも、涙含ましくなる程であつた。

さびしい田舍路を眞吉は默々として急いだ。時々、家のかたまつてゐる部落を過ぎたり、夜遊びに出たのらしい若者に擦れ違つたりしたが、顏を背けて、逃げるやうにして通り過ぎるのであつた。

彼方に巍然として聳えた中田の家も夜目ではあるが、遙に見ることが出來た。そこを訪ねなければならぬ時を考へると、ある苦痛を感じずにはゐられなかつた。そんなことから、いろんな空想に耽りながら、知らぬ間に父の家近く來てゐるのに氣付いてはつとした。併しまだ、十丁位はあつた

が、山の麓にある一軒家なので、ポツリとついた灯の色に見紛ふ恐れはなかつた。併し、その灯の色を見たゞけでも胸に食ひ入るやうな寂しさを覺えるのであつた。が、彼は灯を見てひき寄せられる夏の蟲のやうに、一心にその見當を瞶めながら、タラタラと汗の流れるのをふかうともせずに急ぐのであつた。

父の勇三郎の住居と云ふのは、自分が企てゝ開墾した果樹畑の手前にあつた。殆ど假小屋と云つても好い外觀であつたが、家の廻りには樹木を植ゑ、ちよつと風流めいた門も設けられてあつた。門から家の入口までの兩側には、野萩が蓬々とのびて、通路を蔽ふ位になつてゐた。

眞吉がその門のところへ漸く辿りついた時家の中から、高い濁み聲で語り合ふのが洩れて來た。思はず足を止めた。今頃、一體父は誰と語り合つてゐるのだらうと不審に思はずにはゐられなかつた。まさか、新助なぞと云ひ爭つてゐるのではあるまいが、何れにしても腑に落ちない氣がする。若し、誰かが來てゐるのであつたらいやだと思つた。自分がかくれるやうにして、而も傷つき破れた心を抱いて、他人のゐないところで、父に對面したいと思つてゐたのが、何だか、それもぶち壞されさうな氣がするので、急に張り詰めた氣も挫けて了ふやうに感じた。

せめて老僕の新助でも居れば、窃つと樣子を訊いて見たかつたが、どうせ父の傍にゐて、何かと世話をやいてゐるのだらうと思ふと、矢張、このまゝづか〳〵と這入つて行くより外に方法はなかつた。眞吉は重さうに鞄をぶらさげて、胸がドキドキ顫へるのを覺えながら一歩を踏み入れた。が、何だか直ぐ表の入口から入る氣になれないので、足音を忍ばせながら家の中を伺つた。

兩方とも酒に醉つてゐることは呂律の廻らない調子で直に分つた。併し、幾ら考へても、父の相手が何人であるかは少しも見當がつかなかつた。唯、相變らずやつてゐるなと、內心眉を顰めたいやうな氣持で、裏口の方へ廻らうとした。すると、突然、

『おい……新助……新助はまだ歸らんか。』と、父の呼ぶ聲がした。

眞吉は思はずびつくりして軒先から飛び退いた。が、直ぐ新助はゐないのだ。どこかへ使にでも行つてゐるのだと思つた。そして、顏や手足にブンブンと群つて來る蚊を追ひ拂ひながら、裏の窓下に進むと、そこからは夥しい煙が出てゐるのであつた。蚊を防ぐ爲めに何かを燻してゐるのだとは直ぐ分つた。その煙が眼鼻を襲つて噎せさうになるのを我慢しながら、家の中を覗いて見ると、父の赭黑い肥つた顏が見えた。痩せぎすな小柄な男の橫顏も見えた。

『是非賴むぞ。何とかして發展せんといけんからな。』と父が云つた。

すると、その男は深く頷いて、『承知した。僕も一つ懸命になつて見よう。』と云つた。

眞吉は尙もそこを立ち去ることが出來なかつた。

眞吉が思ひ返して、表の入口へ廻つた時であつた。何やら云ひ爭ふやうな聲が後の方にしたので

振返つて見た。すると、自分のやつて來た路に二つの人影が見えるのである。薄明りで漸くそれと感知される位だから、無論何者だか分らう筈はない。唯、次第に近づいて來る話聲によつて、判斷しようとして眞吉は耳をすました。何を話してゐるのか少しも分らないが、やがて、男と女であることが、その聲によつて想像された。

『旦那が心配しておいでだによつてどげにしてもつれて歸らにや……旦那の云ふことをおきゝでないと、どげなひどい目に合はされるか知れましねえだでな……。』

かう相手に云ふとも、獨語するとも分らぬ調子で云つてゐる聲は、正しく新助のである。それに對してとりとめのないことを云つてゐるのは、妹のいと子であることも最早疑ひないことが分つた。その瞬間、眞吉は妹はどうしてこんな夜更に外出をしてゐたらう。いや、白痴であるから別に何と云ふことなくうそ〳〵と彷徨ひ出たのかも知れない。それを心配して新助が探しあてゝやつと連れて歸るところかも知れぬ――どんなに父や、新助が妹の爲に手古摺つてゐるか知れないと思ふと、眞吉は胸が痛くなるのを覺えた。

二人が近づいて來たので、眞吉は自分の方から進み出て聲を懸けようと思つた。それと殆ど同時に、家の中から『新助！　新助！』と呼ぶ父の聲が聞えた。何だか、それにつつかれるやうな氣がして、眞吉は樹蔭にゐたのが躍り出るやうにして、二人の前に現はれた。

『誰だか、びつくりするだねえか。』

流石に新助は老人なので、慌てるやうなことはなかつたが、いと子の袖を掴んだまゝ、そこに立止まつた。がいと子の方は何か一聲短い叫びをあげて踵を返さうとした。

『僕だよ。僕だよ。』と、眞吉はわざと眞近に寄つて行つて、『新助、今頃いとがどうかしたのかね。』と、訊いた。

『いえ、何に……。』と、新助は眞吉であることを確めると、急に腰を屈めてどぎまぎしながら、『今お歸りだかね。えらう遲うなりましたなあ。』と 腑に落ちぬげに云つた。

『うん。俥がないから歩いて來たんだよ。そして、こゝ迄戻つて來たんだが、家にお客があるらしいので、お前にでもきいてから這入らうと思つてね。』と、眞吉は優しく云つて、二人の姿を懷かしさうにぢつと眺めた。

いと子の白い顏は暗がりでも、きよとんとして、兄を見ても無感動であるらしかつた。眞吉は一種情ないやうな氣持になつて、

『おい！　兄さんが歸つて來たんだよ。土産をもつて來てやつたよ。何とか云はないかね。』と、その顏を差覗くばかりに顏を見せた。

『おいとさん、兄さんがお歸りだすぞ。ちとしつかりなさらにやいけませんぞ。』と、新助も傍から

勵ますやうに力を籠めて云つた。

『兄さん？　さう、どこへ行つてた？　あゝさう〳〵、大阪から歸つたの？』と、いと子は流石に嬉しさうに笑ひ聲で云つた。

『さあ、家へ入りなして……こげなとこだと話も出來ませんでな。』と、新助は無理に眞吉の鞄を奪ふやうにして自分の手にした。

『一體、誰だね。今來てゐる人は……。』

『旦那のお知合の人だす。作州の人たら云ひましたが……。』

『さうか。相變らず酒が盛んだね。』眞吉は何となく新助に會つて安心したやうな氣持になつた。で一緒になつて、入口へ進んだ。家の中からはまたしても、

『新助！　新助！　まだ歸らんか。』と父の叫ぶ聲が怒鳴るやうに響いた。

『へい！　へい！』と、新助は慌てゝかすれたやうな聲で答へながら上り框に足をかけた。

眞吉の顏を見た父の勇三郎は暫く呆氣にとられたやうであつたが、

『おゝ歸つて來たか。どうしてまたこんなに遲うなつたのか。』と、醉眼を見据ゑながら云つた。

眞吉は父にも客にも輕く頭をさげてから、

『終列車で歸つたからですよ、俥さへあればもう少しは早かつたでせうが……。』と、快活に云つた。

『そこで若旦那に逢ひましてな。わしもぴつくりしましたぞ……、おいとさんの方に氣をとられて氣がつかなんだので……』と、傍でもぞ〳〵してゐた新助が待ちかねてゐたやうに口を出した。

勇三郎はそれには答へずに、隅の方でおど〳〵してゐるいと子の方へ怒りに輝くやうな視線を注いで暫く睨めつけてゐたが、『馬鹿！いとは一體何の用があつてうそ〳〵と出歩くんだ。馬鹿なら馬鹿のやうにして溫和しくしてゐるものだ。もしかのことがあつたらどうするんだ。』と、嚴しく叱りつけた。

『一體どうしたんです？。』と、眞吉は不安な色を浮べて訊いた。

『何に、近頃ちよい〳〵ふら〳〵と出懸けて仕樣がないんだ。それで、いつも新助が探すのに骨が折れるんだから氣の毒だよ。馬鹿につける藥がないとは、實際よく云つたもんだ。なあ、塚本君、あはゝゝゝッ。』と、勇三郎は客の方へ向いて笑つた。

塚本と云はれた客はちよつと眞吉の方を見ながら苦笑したが、『そりや、仕方がないぜ。』と云つて急に改まつた調子になり、『あなたには初めてお目にかゝりますな。お父さんに心易くして頂いとる塚本と云ふもんです。どうかよろしく願ひます。昨日からお邪魔してるのです。』

と、眞吉に向つて云つた。

『さうですか。どうかよろしく……こんなひどいところで失禮ですが……。』と、眞吉も挨拶した。

その間に、新助は父から怒られて別に口答へをするでもないが、膨れつ面をして默り込んでゐたいと子を宥めるやうに云ひながら、隣室へ連れて退いた。

『どうです、一つ……』と、塚本はふと氣付いたやうに盃を眞吉に献しながら、『君もこんな立派な御子息があるのやで安心だな。羨ましい。』と、感嘆する。

『僕は若い時に子供をこしらへたからぢやよ。君のはまだ小さいとか云つたな。』

『一番上がまだ十二やでな。その下がまだ三人もある。』塚本は云ひながら、さも困惑したと云ふやうな顏を顰めて見せた。

眞吉はひどく疲れてゐたが、その癖興奮してゐるので、いつそ、酒でも飲んでから寢ようと思つた。で、献される酒は敢て辭さうとしないでどし〳〵受けた。酒量の進んでゐるのには、勇三郎も驚く程であつた。眞吉は鞄を開いて、土産物の鯛味噌や、蒲鉾を出した。

『こりや珍らしい！』と、塚本が愛想を云ふと『肴を見ると酒がもう少し欲しくなつた。』と、勇三郎が云つて、臺所から新助に命じて、銚子を新たに運ばせたりした。

酒にばかり浸つてゐるらしい父の赭黑い顏や、胸や、どろんと濁つた眼の色を見ると、眞吉は氣遣はしいと云ふよりも、寧ろ、最早かうなるより外に生きる道のない父なのかと云ふ氣がして痛ましくなるのであつた。ぢか〳〵した黑い太い頭髮も、胡麻鹽がひどくなつてゐた。そしてすべてのことを酒によつて忘れようとしたのが習慣となつて、今はその神經も次第に痲痺して了つて、一種の樂天家になつてゐることがその風丰や、云ふことによつても察せられるやうな氣がした。

父がこんな風になるのは無理はないと眞吉は思つた。人並の考へでゐたなら、とても一日として生きてゐられないかも知れない。併し、またこんな生活をして、生きて行くことも、考へて見ればたまらないことだ。そこには何の希望もなく唯荒寥たる日夜の連續があるのみだ。眞吉がこんなことを考へなぞしてゐるとは、少しも知らないで、相變らず酒の力を借りてさも愉快さうに談笑してゐる主客の樣子を見てゐると、何だか別世界の人間の生活を見せられるやうな氣がしないでもなかつた。

やがていつ迄續くのかと氣遣はれた酒宴も撤せられて、いよ〳〵皆なで寢ることになつた。が、何しろ狹い家なので、杯盤を片付けて、そこに寢床を敷かなければならなかつた。二人はすつかり醉つて、ふら〳〵してゐて、何の役にも立たないので、重に眞吉と新助とが働いた。いと子はと蚊帳越しに見ると、いつの間にか隣室で暢氣さうな顏をして口をあんぐりあけたまゝ眠つて居た。眞吉は思はず涙がこみあげて來るのを覺えた。併し、白痴であるが故に、無感覺同樣に平和な眠りも貪られるのだと思つて、却つてそれがいぢらしいやうな氣がした。

その夜は、親子らしい話も碌に出來ないで濟んで了つた。それが眞吉には何よりの不滿であり、

殊に初對面の塚本には何と云ふ理由もなく好感がもてなかつた。それに疲勞も手傳つて憂鬱になつた。併し、如何に陋屋でも親の住居であると云ふ意識は、心置きなく本當の安眠をさせてくれるやうな氣がした。で、狹苦しいのも忘れて、出來るだけ手足を延ばした。

初めのうちは、あちらからも、こちらからも、喧しい寢息が起るのと、家内に殘つた惡酒の匂ひとが氣になつたが、雨戸に隙間をつくつて置いたので、そこから早秋らしい冷氣が通ひ、蟲の音も聞えてゐた。眞吉は間もなく深い底にひき込まれるやうな氣持で眠つて了つた。

眠が覺めると一番に起きたのは眞吉であつた。早速雨戸を繰つて涼しい朝風を面に受けながら、外面に眼を放つた。前面はゆるやかな勾配によつて、次第に高まつて行く山の裾になつてゐた。その一部分を切り拓いて、父の果樹畑はつくられてゐるのであつた。果樹と云つても、見たところ、貧弱なものらしく、水蜜桃や天津桃や、アムスデンジュンなどの漸く苗木が少しのびたばかりのものであつた。それでも、ところ〴〵に大切さうに實が殘つてゐるのを、紙に包んだのが、白い蝶々でもとまつてゐるやうに青い枝葉の間に見られた。果樹そのものは貧弱でも、さうした青々とした眺めは、まだ頭腦の隅に殘つてゐる惡酒の名殘と懶い眠氣とを一掃してくれるやうな清鮮な爽かさを感じさせた。

果樹畑の先からは稍急な勾配になつて、眼をあげると眉を壓して聳える山であつた。併し、それはところ〴〵に剃殘つた一簇の毛髮のやうな樹木があるきりで、他はすつかり坊主にされてゐた。これも、父が破產する前後に伐採した名殘かと思ふと感慨が深かつた。

眞吉が外に出て、露そぼつ草叢を着物の裾が濡れるのも構はず歩いてゐると、轟々と響く音が聞えるので振返つて見ると、そこから斜坂(スロープ)になつてつゞく田畑の中に高く築いた鐵道線路が走つてゐて、そこを今汽車が通るのであつた。そんなものを見ても、何となく珍らしく新鮮な感じがうけられた。遠く彼方に散在する家々からは朝餉の煙が靄の棚曳いた中をゆるやかにのぼつてゐた。位置によつては土藏の白壁が朝日をうけて輝いてゐるところもあつた。

眞吉はかうして見てゐると、生れた故鄕に對するしみ〴〵とした愛着が湧き起つて來るやうな氣がした。で、あらゆる反感も焦慮も忘れて、果樹の間を歩いたりしてゐると、ふとギイギイと朝の空に冴えた音を響かせて、桔槔で井戸から水を汲んでゐる新助の姿が眼に入つた。白髮の多い頭で痩せしなびたコチコチした小さな老人の姿は、まるで畫中の人物のやうに思はれた。何となく懷かしくなつたので、その方へ急いで歩いて行つた。

『えらう早起きだすな。』

新助は眼脂のついた眼をきよとりとさせて、今初めて氣付いたかのやうに云ふのであつた。

『早く起きると氣持が好いね。』と、眞吉はにこ〳〵しながら云つて、『この水で顏を洗うたら好い氣持だらうな。』と、無雜作に作られた井桁に手をかけて中を覗き込んだ。ゆら〳〵と搖れる水の面には一片の白雲と自分の顏とが折重なつて映つてゐた。朝靄の消えてゆくのにつれて、だん〳〵今日の晴を思はせる空の色も一層澄んで見えた。井戸を覗いたゞけでも、ひやりとするやうなので『實際、氣持が好いな。本當に好いな。』と、眞吉は幾度となく繰返した。

『町方と違うて田舍はごみもたちまへんでな、そりやや、氣持が好えだすわい。』と、新助は自慢さうに云つて、またギイギイと桔槔の竿を水の中へ下ろしては、たぐりあげるのであつた。

『一體、この桃は見込があるのかね。肥料でもやらなけりやいけないのぢやないかね。』と、眞吉は冷かすやうな調子で訊いた。

『そげなこと云ふと旦那さんに叱られますぞ。まだ、あんた二年目だすでな。本當によくなるのは五六年目だと云ひますでな。今年もちと早いが實をならせて金にしようとなさつたが、かいがら蟲がつきましてな。どうもなりまへんだした。』と、新助は變な表情を一語一語につくりながら力を籠めて云ふのであつた。

『さうか、見込がありやまあ好いけれど……併し、賣つたところで幾らにもならんだらう。』と、眞吉は相變らず冷淡な調子で云つた。

『いえ、これで去年あたりは好えので百目が十錢からしましたぜ。安いのでも六錢から四錢……今にこの樹が大きくなつて、一本の樹にも何貫目と云ふてなりますぜ。わははは。』と、元氣よく新助は笑つた。そして『別に肥料もいりまへんでな。それに土地もこげなとこが一番好えのだす。好え土地で出來たのは酸い味がしていかんと云ひますぜ。』と、新助は乘氣になつて說明し出すのであつた。

『さうかな。』と、眞吉は感心するやうにきいてゐたが、『後で僕にも一つ食べさせてくれないか。』と、愛想のつもりで云つて置いて、すた〳〵とまた野路の方へ歩いて行つた。

――それぢや、まあ、かうしてゐれば、父もいと子も何とかして日が過ぎて行くだらう。最後にはこの山を賣つたつて、幾らかにはなる。矢張、今のうちに自分のことを何とかして置かなくちやならない。だが、若し、こんなところで父が病氣で殘れでもしたらどうするのだらう。父と妹と、どつちが後に殘つてもどうにも方法がつかないのは分りきつてゐる。昔から代々自分の家に仕へて、今ではひとりぼつちになつて苦樂を共にしてゐる新助とても、どんなに壯健でも、年が年だから餘り長くはあるまい。かう考へて來ると眞吉の心持も急に暗くなつて來る。何一つ賴るところのない親子の果敢い運命を考へると、胸が痛くなつて來る。併し、へこたれちやならない。今挫折して了つち

や何にもならないと、眞吉はまた緊張した氣持になるのであつた。

もう父や塚本も起きてゐるだらうから、家へ引き返さうと思つて眞吉が踵を返した時であつた。

そこへ妹のいと子が洗ひ晒しの浴衣に赤い帶をしめていそ〳〵とやつて來たのであつた。眞吉は久し振りで、明るみで妹の顏を見ることが出來たのである。

いと子はにこ〳〵しながら追付いて來て、『兄さん、何をしてゐるのや。桃をとつて食べてたのやないの？』と、突如、締りのない表情をして訊くのであつた。

『さうぢやないよ。兄さんは散歩をしてゐたのだよ。』と、眞吉は云ひながらぢろ〳〵とその顏を眺めた。

『散歩つて何すること？』

『散歩を知らないのか。』

『知らない。息を吐くこと？』

『馬鹿だね。かうしてブラブラ歩くことだよ。』と、眞吉はちよつと二三歩歩いて見せて、覺えず苦笑した。

併し、いと子は眞面目な顏をして、その樣子を見成つてゐるのであつた。そして漸くのみ込めたかのやうに頷いて見せたが、

『兄さんもうずうつと此方にゐるの？』と、何を思つたのか、改めて訊ねた。

『少しの間ゐるのだよ。』と、煩さうに云つてから、『一體、お前は毎日何をしてゐるのだね、うか〳〵と遊んでゐないで、少しは新助の用事でも手傳つてやらなけりやいけないぢやないか。』と、窘めるやうに云つた。

すると、いと子はさう云はれるのが、如何にも意外だと云ふやうな顏をして、『私忙しうて忙しうてならんの。これから袷の着物を縫うたり、いろんなものを洗濯したり、それにお母さんの法事もあるよつてな……。』と、とても白痴とは思はれぬやうな調子で云ふのであつた。

眞吉は思はず聲を揚げて笑はずにはゐられなかつた。『滑稽だね。お前にそんなことが出來りや、何にも心配する必要はないよ。』と、吐き出すやうに云つた。

その言葉はいと子の耳には入らないらしかつた。自分ひとりで、何かを考へてゐるらしく、ちよつと針を使ふ眞似をして見せなぞしてにや〳〵と笑ひ出すのであつた。その樣子を見てゐると、眞吉は何となく哀しい思ひがこみあげて來た。肝腎のものを神から與へられなかつた爲めに、生きながら死も同然の一生を送るのかと思ふと、哀れないと子の運命に對して涙なきを得なかつた。とし子と同じ年頃になつたのだから、普通なら今が一番美しく樂しい娘盛りであるのに、うつろのやうな魂を抱いて、その日その日を無意味に暮して行かねばならないのだ。そんなことを考へながらかうし

てぢつと見ると、いと子の顏はだん〳〵亡き母の面影に似て來るやうだ。縹緻も次第によくなつて行くやうだ。汚い身裝をして、無雜作に黑髮を束ねてゐても、どこかに氣品もあれば、處女らしい清純なところもある。それに、この前に會つた時とは違つて、見違へるやうに身體が發育して、肉付の好いことは驚くばかりである。こんなになつて傍にゐて面倒を見たり、注意をしてくれたりする母親がないのだと思ふと、可哀想でたまらない氣持になるのであつた。母は何故かう云ふ娘や、哀れな夫を殘して死んで行つたのだらうと、怨めしく思はずにはゐられなかつた。

『おい、もうこんなところに遊んでなんかゐないで、早く家へ行つて御飯の支度のお手傳ひでもしたら好いぢやないか。』と、眞吉は多少苛々した調子で云つた。

それでもいと子は素知らぬ顏をして、木の葉をちぎつて、それを掌に押すやうなことをしながら、まるで六つか七つの子供のやうにうれしがつてゐるのである。

『おい、早くお歸りよ。兄さんも行くのだから……。』と、眞吉は聲を怒らせて、つけ〳〵と叱りつけるやうに云つた。

いと子は矢張り動かうとしない。眞吉は眞面目になつて相手にしたところで仕樣がないのだと知りながらも、その美しい顏や、發育しきつた肉體を見ると、愛と憎みとが一緒に絢はれたやうな思ひに咬られずには居られないのであつた。



……可哀想だが、仕樣のない厄介者だなあ。いと子自身にしても生きてゐたつて何の意義もないのだ。いつそ死んで了つた方がどんなに幸福だか知れはしない。花は咲いても、蟲が入つてゐるのだから、早く散らしてやつた方が好いかも知れない。」と、心に呟くと、自分の妄想の恐ろしさに思はず悚然とさせられるのであつた。

『おい、いと！　早く歸らう。皆な待つてゐるだらうから。』と、今度は優しく劬はるやうな調子で云つた。

『え、歸りませう、兄さん何か面白い本を見せておくれな。』と、いと子は美くしい瞳を睜つた。

『何を云つてゐるのかね。生憎お前に分るやうな本はもつてゐないよ。碌に字も讀めない癖に！』と、嘲笑するやうに云つた。

『私かて字位知つてるわ。いろはにほへと……一二三四五六……ねよく分るだですやろ。』と、いと子は歩きながら大眞面目になつて得意さうに云ふのである。

『ははは〻〻。まるで尋常一年生だね。』と、眞吉は泣き笑ひをしたいやうな氣持になつた。

――いと子が低能であることはもう三つ四つの時からよく分つてゐた。それでも學校にだけは出さずにはゐられないと云つて、度々父が學校へつれて行つたりしたが、それも長く續かなかつた。二三日行つたかと思ふと、いと子はもういや氣がさすらしく止めて了つた。教師の方からも、内々と

うしても敎へることが出來ないと申込んで來た程であつた。眞吉は同じ學校のことなので、子供ながらにどんなに妹の爲に恥ぢたり、情なく思つたりしたか知れなかつた。ある時なぞは無理にもいと子を連れて行けと父から嚴命されて、終には悲しくなつて泣き出したこともあつた。また父が外出がちなので、母ひとりが、どんなにいと子の爲めに心を痛めたか知れなかつた。時々思ひ迫つては人知れず眼に涙を浮べて物思ひに沈んでゐる母の姿を見たことも屢々のことであつた。その後、凡そ一年餘りも學校へ行つたり行かなかつたりして過したが、たうとう斷念して止めさせて了つたのである。

眞吉は今、さうした十餘年前のことを追想しながら、それでもいろは位はまだ覺えてゐるのかと何となく不思議に思ふと同時に、滑稽な悲哀を覺えるのであつた。

『……いろはにほへと……それからよたれそつね。いや、ちりぬるやな。』なぞと、いと子は相變らずひとり語を續けてゐるのであつた。

眞吉は默つて歩きながら、朝靄が次第に晴れて行つて、彼方の山の頂邊に輝かしい日光が照つてゐるのを見なぞしながら、家に近づいて行つた。もう家では父も塚本も起きて、掃除なぞしてゐる姿が見えた。すると、どうも塚本と云ふ男は最近の知合らしいが、どうして近づきになつたのだらう。それに、何か二人で畫策してゐるらしい樣子が見えるが、また、父は失敗を招くのではあるまいか、とついまたそんな取越苦勞まで感じられるのであつた。

『早く起きたもんだな。どうだ。わしの丹精した桃畑を見てくれたか。』と、眞吉の姿を認めると勇三郎は直ぐ椽端へ出て來て聲をかけたのであつた。

『え、見ましたよ。割合に盛んなんですね。併し、これで有望なのですかね。』と。眞吉は笑ひながら云つた。

眞吉は父の樂天的な口吻によつて自分の氣持も餘程和げられるやうに思はれた。で、それから直ぐ家へ這入つたが、塚本も起きて煙草盆をカン〳〵敲きながら『お早う。』と、挨拶をするのであつた。『昨晩は失禮しました。』と、眞吉も丁寧に云つた。

それから、新助が何くれと世話をしてくれたので、朝飯をもすまし暫く茶なぞ飲みながら世間話をしてゐたが、塚本が祕密話らしく云ふので、彼は座を外して新助のゐるところへ行つた。新助は食事の後片付やら、茄子をきつて漬物の用意をするやら、まめ〳〵しく立ち働いてゐた。大阪に於ける男世帶が丁度それなので、眞吉は今頃連中はどうしてゐるだらうと思ひながら、つい、微笑を浮べずには居られなかつた。

『新助、お前はまるで女と男と兼帶なんだね。』と眞吉は笑ひながら話しかけた。

『へい。なか〳〵うまいだすやろ。』と、新助は小器用に庖丁を使ひながら云つた。

『いとが當り前だとお前が助かるのだがね。』と、眞吉は同情せずには居られなかつた。
『なに、仕方がありません。わしも老人やで外のことは何うせ出來まへんでな。』と、新助はひどく遜つた調子で云つた。
そんなことを話してゐるうちに勇三郎が勝手の方へ顔を出して、お客が歸るからと云つた。で、眞吉は慌てるやうにして挨拶に出た。
塚本はもう紹の羽織を着て、風呂敷包みの結び目を弄びながら、
『大變どうもお邪魔しましたな。あなたも一度お父さんと來て下さらんか。つまらない田舍だすが……。』と、お愛想を云つた。
『は、有難う。いづれまたお伺ひしませう。』と、眞吉はほんのお座なりを云つた。
傍で默つて見てゐた勇三郎は、『それぢや、君、しつかり賴むぜ、あの方の返事はなるだけ早くするからね。』と、塚本に向つて云つた。
すると塚本は顏を見合せて意味深げに頷いて、『どうかね、お賴みしまずせ。』と確める樣に云つた。
塚本が出て行くのを勇三郎は送つて出た。眞吉は玄關迄出たが、矢張、二人がひそ〳〵と話しながら歩いて行く後姿を暫く見送つてゐた。そして內心一體何の話があるのだらう。何を畫策してゐるのだらうと不安の伴なつた疑ひに驅られざるを得なかつた。父が歸つて來たら、それとなく訊ねてやらうと思つた。
間もなく、勇三郎は歸つて來た。眞吉の顏を見ると、突然、
『すまなかつたな。塚本が不意にやつて來たもんやで……。』と、辯疏するやうに云つた。
『いゝえ、そんなことは……』と、眞吉は謙遜に云つたが、『塚本つて云ふ人はどうして知つたのですか。』と、何氣なげに訊いた。
『何にあれは妙なところで知つたのだよ。ははは……。』と、勇三郎はひとりで笑つてゐたが、『あすこへ一緒に這入つてゐた仲間なんだが、なか〳〵才子で面白い男なんでね。私印私書僞造と云ふ罪名だが、よくきいて見ると、あの男ひとりがまんざら惡いと云ふのでもないのだよ。』と、暗に辯護するやうに云つた。
『へえ、そんなところで知り合つたんですか。それで一緒に何かしようつて云ふのぢやないんですか。用心しないといけませんよ。お父さんはいつも人の爲めに失敗してゐるぢやありませんか。』と、眞吉は不知不識眞劍になつて忠告めいたことが口をついて出た。
勇三郎はちよつとてれかくしに笑つたが『大丈夫、心配せんでも好えよ。』と、無雜作に云つた。
塚本の素性が分つて見ると、眞吉は呑氣さうな父の言葉ばかりを信用してゐるわけにも行かなかつた。どこか眼に惡狡い光が宿つてゐたのを思ひ出すと、ある警戒をする必要があるとさへ感ぜず

にはゐられなかつた。
『一體二人で組んで何をしようつて云ふんですか。』と、眞吉は開き直つて訊いて見た。
『うむ。まあいろんなことを初めようと思つてゐるのやが……塚本がマッチの材料をこしらへる小さな會社を計畫してゐるので、その方へも力を添へてやらうと思ふとるし、果樹の栽培もなか〳〵盛にやつてるのやからな……。』と、云つたが勇三郎にはつきりしたことを云ふのを避けてゐる風が見えた。
『人のことも、人のことだが、そんことをしてゐて、此方はどうかなつて行くんですか。何だかそれが心配だな。』と、眞吉は屈托さうに云つた。
『そんな心配は不要ぢや。わしにもこれでいろ〳〵計畫がある。まあ、この桃畑の方もだん〳〵よくなつて行くし、それに、もう一つ奮發して、棕梠の栽培をしようと思ふとる。これがまた誰も氣がつかんことで有望な事業になるからな。』
『棕梠の栽培？』と、眞吉は眼を睜つて訝しみながら云つた。
『うむ。さうぢや、棕梠と云ふやつは苗を買つて來て植ゑれば少しも世話はいらんのぢや。直きに大きくなるし、その皮の需用はだん〳〵多くなるにきまつてゐるし。その葉を何とかしてものにする方法を考へようと思ふのぢや。』と、勇三郎は如何にも自信あり氣に云ふのであつた。



『棕梠の葉ですか。拂塵にでもして賣り出すのですか。』と、眞吉は皮肉に云つて見た。
『そんなことやない。あの葉を何とかして漂白する方法を考へるとなか〳〵有望になる。下駄の表にもなるやらうし、夏帽子を編むことも出來る。その外まだ〳〵使途はどつさりある。それが成功すると馬鹿にはならんからな。まだある。その棕梠や桃畑の空地を利用して養鷄を初めるのぢや。さうすると鷄が蟲をとつて食べてくれる。その糞が自然肥料になる。つまり一擧兩得と云ふうまいことになるぢやないか。』と、勇三郎はさも得意氣に說明してきかせるのであつた。
きいて見ると、眞吉もなる程有望だとは思はないでもなかつた。併し、よく考へると、矢張單なる夢想に過ぎないやうに思はれてならなかつた。父のこれ迄がさうであつたやうに、今もかうして景氣の好ささうな空想にばかり耽つてゐるのかと思ふと、要するに父と云ふ人は一生夢を食つて果てるべき運命なのかと、痛ましく感じずにはゐられなかつた。
『何をしても好いですが、一體それに必要な資金はどうして調達するのですか。第一夫が心配ぢやありませんか。』と、眞吉は心から氣遣しげに云つた。
すると、勇三郎は濁つたやうな眼にも輝かしい空想的の光を浮べて、『それはどうにかなる當がある。大した金はいらんのやから。早い話がわしがちよつと古い政友を訪ねて廻つても、少し位の金は寄附してくれるでな。』と、頭から信じきつてゐるやうな調子で云ふのであつた。

流石の眞吉も苦笑せずにはゐられなかつた。

『そんな信用がまだお父さんにあるのですかね。』と、冷かし半分に云つて見た。

『あるとも……大いにあるよ。』と、勇三郎は力を籠めて云つた。

『もう裁判沙汰なんかいやですよ。依托金費消だの、詐欺未遂だなんて本當にいやですからね。』と眞吉は戯談のつもりで輕く云つた。

勇三郎はギクリとしたらしく鋭い眼で我が子の方を見たが、『馬鹿なことを云つてくれては困る。』と、吐き出すやうに云つた。

『いや、攻撃するわけではないですが、再び失敗を繰返さないようにして下さいと云ふのですよ。』と、眞吉は内心少し云ひ過ぎたと悔いながら云つた。

『そりや、ようく分つとるが、わしが罪名を被せられて入牢しなければならぬことになつたのも、そりや餘儀ないことぢやつたからな。わしはどこ迄も、今でも寃罪だと思ふとるよ。それぢやから わしの心は俯仰天地に恥ぢんつもりで居る。あのことのみならず、これまでわしがして來たことは何でも誤解をうけるやうな結果になつたが、それはわしの不運やつたからで、何も人を怨みはせんが、よく考へて察して貰はにやならん。』と、勇三郎は熱を帶びた調子で語り續けるのである。『依托金費消にしたところで、山田孤兒院の寄附金をわしが横領したことになつとるが、あれはずつと昔のことで、それも孤兒院を發展させる爲めに計つたことが失敗したからで、若し成功してゐたら、反對にわしは神様のやうに云はれたかも知れん。一體山田もクリスト教主義の孤兒院なぞを經營しながら、人を罪に落してそれで腹癒せするなんて言語道斷のことぢやないか。寄附金を利用して發展策を講ずることは渠の方からも頼んで來たのぢやないか。それをわしがだまして承諾させたことになつとる。それで詐欺未遂と云ふのやからお話にならん。わしも多少法律も心得て居れば、道德の何物たるか位は知つとる。それに、わしの志が公明正大なところにあることさへ知つてゐてくれたら、あんなことになりはしなかつたのぢやが、山田の人格がいけんから、わしもひどい目に會ふことになつた。』と、深く嘆息するのであつた。

眞吉は一語一語深く胸に徹するやうな氣持で聞いてゐたが暗然としてうなだれて了つた。父にも惡いところがあつたに違ひないが、山田も惡いのだと今更のやうに眞吉は考へるのであつた。山田の亡くなつた兄が創始した孤兒院に就いては、それが人格者であつただけ、父も全盛を極めてゐた時には隨分盡したのであつた。その後、創設者を喪つて、弟が後を繼ぐやうになつてからは、すべてが實利的、功利的である爲め多少非難を受けたこともあつた。ふとした機會で父が會見した時内情を打ちあけて相談をうけた。それで、俠氣に富んだ父は策を授けてこの地方の人々から寄附金を募つて意外の成功を博した。丁度、その頃、賣物になつてゐた鑛山の權利を獲得して置けば基本財産

ともなり、また、それを他に賣つたところで利益があるからと思つて獨斷で談判を進めたのである。その場合の父には一點の私心を挾んだところもなかつた。が、不幸にして、それが失敗に終り、山師のぺてんにかゝつたことも分り、徒らに運動費を使ひ、結局は虻蜂とらずになつて了つた。そこで、山田と父との間に行き違ひが生じて、裁判問題になり、遂に父の敗訴に終つたのである。その間の事情をよく知つてゐる眞吉は、父の云ふことも無理でないと思ひ、その無念であらう胸中も十分察せられるのであつた。

『……山田もひどいですね。今更云つたところで仕方がないけど……どうも少し人間が陋劣なやうだな。亡くなつた山田さんとどうしてさうも違ふのかな。』と、眞吉は思はず慨嘆するやうな調子になつた。

『兄の方は全く人間が違ふとつた。わしの親戚ぢやつたが、若い時からの秀才で醫科大學にゐたのがクリスト教に入つた爲めに斷然學を擲ち傳道に從事するやうになつた。それだけでは不滿なので、終ひに田舍に歸り、家財を擲げ賣つて孤兒院を創めたのぢやからな。何しろ、クリスト教のことぢやから、この地方の非難攻擊は隨分ひどかつた。併し、山田は、びくともせずにやつたからな。』と、勇三郎は口を極めて讃美するのであつた。

父の口から語られる山田信之助なる一個の殉教者の生涯は眞吉の心にも深い感銘を與へずには置かなかつた。彼が漸く地方の人達の誤解も釋け、事業の方も岡山の孤兒院と連絡をとつて稍基礎が出來、傳道の方も着々として効を奏しつゝあつた時、まだ漸く三十になるかならずで肺患の爲めに殪れたのであつた。幸ひに弟の良太郎があつたので事業は中絶するやうなことはなく大阪に出て續けられたが、併し、人物に於ては同じく血をわけた兄弟でもずつと違つたところがあつた。良太郎は事業の經營と云ふ方面のことに就ては可なりの手腕もあつたが、併し、要するに精神的の事業家ではなかつたのだ。その點に於て、田舍の陋屋に於て兄の信之助が創めた時の魂はもうなくなつてゐると云つてもよかつた。まるで形骸だけが太り育つて行くやうなものだ。他の孤兒を食ひ物にしてゐる怪しい孤兒院と五十步百步の差しかないのかも知れぬ。——眞吉は良太郎に對する憤激からこんな風に非難するやうなことばかりに考へが傾き初めるのであつた。

『何と云ふても信之助君はえらかつた。彼は十八の時に既に村會議員にあげられた程ぢやからな。その後志を立てゝその頃出來た神戸の醫學校へ這入つたのも郡から金を出した。大學へ進んだのも醫學校から拔擢されたのぢや。酒は二升でも三升でも飲める方ぢやつたが、一度クリスト教に這入るとぴたりと酒を止めて了うた。萬事がそんな風で、意志も强ければ、頭腦も明晰で、心は皎潔ぢやつた。こんな地方の百姓の倅にあんな男が生れたのは、まあ奇蹟と云ても好えな。』と、勇三郎は遠い昔に思ひを馳せるやうな感慨深い表情をしてゐるのであつた。

『僕にも少しばかり山田さんの記憶があるやうな氣がしますね。五つか六つ位の時分でせう。山田さんが小倉の袴を穿いて馬に乘つてうちのお祖父さんを尋ねて來られたのをちよつと見たやうな氣がしますから……。』と、眞吉も夢のやうな記憶を探り初めるのであつた。

『うむ、さうかも知れんな。その頃わしは多く東京にゐたで知らんが、多分それは晩年に近い時分のことぢやらう。風采も立派な男ぢやつた。』

『髯を生やした脊の高い人ぢやなかつたですか。』

『うむ。さうぢや。お前は知らんかなよく繪に書いてある大久保利通卿の肖像を……かう賢明らしい顏をして、兩方に房々とした腮髯を蓄はへた……丁度、あの通りの顏をしてゐたよ。』と、勇三郎は髯を扱ぐやうな手付をして見せるのであつた。

そんな話を續けてゐると、眞吉は精神的に淨められたやうな氣持になるのを覺えた。そして、人格者に對する尊崇の念は、自らを鞭つことになるのであつた。さまざまな忌むべく、卑しむべきことに煩はされて、無意味な歳月を送つてゐる自分がたまらなく呪はしくなつて來た。とし子などの愛着に惹かされてめそ〳〵してゐることも唾棄したくなる程であつた。眞吉は何となく自分の心に旺勃とした向上の念と、奮發心が湧き起つて來るのを力强く感ずるやうな氣持にまでひき上げられるのであつた。

『お父さん！』と、眞吉は一生の思ひ出に耽つてゐるらしい父を驚かせるやうに叫んだ。

『何かね。』と、勇三郎はさながら夢からさめたやうな顏をして云つた。

『實はね。僕は東京へ行く決心をしたんですよ。その相談もあつて歸つて來たんですがね。いよいよ上京すれば無論苦學をする覺悟なんです。實際、もう愚圖々々して居れん年ですからね。』と、眞吉は强い信念をもつて云ふことが出來るのであつた。

眞吉の堅い決心が顏に現はれたのを見てとつた勇三郎は、餘り突然であつた爲に驚きもしたが、併し、何となく嬉しくもあつた、見る見るうちにその顏は微笑にほぐれて、空想的の輝きが眼に宿るやうに見えた。

『さうか、そりや好え、そりや好え。』と、二度ばかり云つて頷いたが、『併しやな、苦學と云うても無茶苦茶に出かけて行つても困るぢやらう。ずつと前ならわしの知合も澤山あつたのぢやがな。今ぢや、皆んなどうなつとるか分らんし、わしの近狀を知らせるのも恥になるだけぢや。……ところでと、さうなると金に困るな。』と、流石に勇三郎は親として、かゝる場合に何一つ助けることの出來ない零落を恥づる心持から、珍らしくも酒のために荒み脹んだやうな顏にも羞恥を浮べるのであつた。

『え、そりや困りますよ。東京には知己だつてあるわけぢやなし、また金にしたところで當はあり

ませんからね、お父さんに今金を出して下さいと云つたつて駄目でせうから……。』と、眞吉は氣の毒さうに苦笑するより外はなかつた。

勇三郎はさも困つたやうに頭を傾げて考へ込んだ。我子の爲に今何とかしてやらうと思つても、實際どうにもならないのだ。それから考へると、自分の青年時代に志を立てゝ上京したのとは何と云ふ相違だらう。この地方に富と家柄を誇る岡本家の嫡子として、まだ神戸までしか汽車の通じてゐない時分に、東京に通學すると云ふのだから、恰も大變な出來事のやうに取沙汰せられたものだつた。お祝ひに來た人も多かつたし、送別會のやうなものも開かれた。出發の時は村人が隊を組んで見送りに出た程であつた。無論金に不自由するやうなことがあらう筈はなかつた。併し、彼にとつて東京は華やかな希望を燃えたゝせ、また活動の舞臺であつたと共に、無殘な失敗と蹉跌の墓場でもあつたことを考へると、今昔の感慨に堪へないものがあつた。それに今、倅の眞吉が上京しようとしてゐるのに何一つ盡してやることが出來ないのである。眞吉自身も恐らく華やかな希望ばかり描いてゐるのでもなからう。生死も知れぬ人生の渦卷に身を投ずる位の覺悟なのであらうと思ふと、氣の強い、呑氣な勇三郎も、思はず涙が瞼に滲んで來るのを覺えずにはゐられなかつた。

『まあ、少しの間考へさせてくれ。わしかて一生懸命になれば少し位のことは何んとか出來ぬこともあるまい。後々のことは、桃や棕梠の方が少しうまく行けば學資の一部位は送れるだらうから。』



と、しみ〴〵とした調子で云ふのであつた。

その空想的な父の言葉を聞くと、眞吉は失笑せずにはゐられなかつた。『お父さん、僕はそんなことをあてになんかしちやゐませんよ。桃や棕梠がそれ程有望ならお父さん達の生活費にして下さい。僕は金を送るなんてことは當分出來ない代りに、こちらから鐚一文だつて貰はうとは思つちやゐませんからね。』と、笑ひながら云つた。

『うむ、まあそれはわしに任せといてくれ。お前にはすまんと思ふから、いろんなことも考へるのやから……それぢや、上京の旅費としてはわしも奔走して見るから、お前も中田へ行つて、少しでもとつて來い。それが一番好え方法ぢや。』

『中田へ行つて？』と、眞吉は顏を顰めた。

『行つて無心したて構ふもんか。俊助の奴どつさり金をもつて困つてゐながら吝嗇坊やから、あんな奴から金をとることは決して恥づることはない。』と、勇三郎は聲を勵まして云ふのである。

『お父さんは矢張り呑氣だなあ。』と眞吉は憫れざるを得ないのであつた。

『何に、そんなことを云うてゐたら駄目ぢやぞ。お前の思ふとるやうにさう何事も淸廉潔白には行くものぢやない。それに外の人間でない、現在の伯父に賴むのに何を遠慮することがある。もつてゐるものをとるのは當然ぢやないか。それにくれと云ふのぢやない。ある時期だけを借りて置くの

ぢやからな。唯、無期限、無利息がちと辛いかも知れんが……。』と、勇三郎は濶達らしく笑ふのであつた。

『そりやまあ賴んで見ても好いのですけど、僕も學校を失敗して、怒らせてゐるし、それに今後は一切無心をしないことに決心してゐたので、自分に對して節を枉げるやうで甚だ面白くないんですけど……まあ、それも餘儀ない場合は屈しなけりやならんでせうからね。』

『屈するとか、枉げるとか思へば腹も立つし、恥かしくもある。けど、兎に角前途のある青年が學問をするために上京をしようと云ふ時に際して、一臂の力を乞ふのは、少しも恥辱にはならん。寧ろ、先で助けてくれるのが當然ぢやないか。何も俊一郎や、とし子だけに學問させれば好えと云ふわけのものぢやない。一人でも餘計學問をさせて、えらいものにしあげるのが金をもつてゐるものゝ義務ぢや。尤もわしはまだ考へも若かつたから、さうするつもりでゐて失敗したが、それでも多少助けてやつた爲めに今日土百姓をしないですんどるものも五人や十人はあるからね。けど、そいつ等も土百姓をしてゐた方がよかつたと思ふ輕薄なのが多いが……さう云つたわけぢやから、お前は少しも氣にせんでも好え。わしは一體初めから大阪なんかで學問を初めるのは不贊成ぢやつた。それを俊助の奴、自分の子供達とは差別をつけて、金も澤山出すのが嫌なもんやで勸めたのに違ひない。あいつはどだい不人情な奴ぢやぞ。』と、非難するやうに云つて勇三郎は冷笑するのであつた。





眞吉は父の云ふことも無論一々尤もだと思つて聞いてゐるのだが、中田の伯父が話題にのぼつたのが機緣となつて、とし子のことが頭に渦卷くのを感ずるのであつた。とし子對自分の關係に就ては一體父はどんな風に考へてゐるのだらうと云ふのが、一番氣にかゝることでもあり、また、ある意味で興味のもてる問題でもあつた。併し、それをこちらからきり出すことは氣恥かしいことでもあり、それだけの勇氣もこの際ちよつと出ないのであつた、

そんなことは少しも氣付く筈のない勇三郎は、『……あゝ、わしもせめて三十代ぢやつたらもう一度東京へ行つて旗上をしたいな。男子成功するも失敗するも東京ぢやからな。わしもこれで大臣の椅子を夢みた事もあつたのぢやからな。』と、長大息して云つたが、ふつと氣をかへて『ところで、お前は何をする氣やな矢張り、法律の方をやるか。おゝ、さう〳〵今お前は新聞のやうなものを出しとるやうぢやか、さう云ふ方面のことでもやるか。新聞記者も主筆位になればまあ好え。つい六七年前の『太陽』には德富蘇峰、陸羯南、原敬の三人が新聞記者中の三傑とか書いた口繪に出とつたが、あゝなればまあ成功やな。尾崎行雄も犬養毅も新聞記者ぢやつた。島田三郎はまだやつとる。布衣の宰相と云はれるのも惡くはないぜ。わしも流浪して『大阪めざまし新聞』にゐたこともあるし、東京にゐた時には、西園寺さんや中江兆民先生の『自由新聞』にちよつと關係したこともある。その方面でも一生懸命にやつとれば、今頃何とかなつてゐたかも知れんが、いろんなことに手を出

したのが悪かつたのぢやな。人間何事でも目的を一にきめなけりやいかん。二兎を追ふものは矢張り一兎をも獲んと云ふ結果になるのは眞理ぢやな。』と、勇三郎は自分ひとりで饒舌り續けるのであつた。

勇三郎の言葉が杜切れるのを待つて、眞吉は漸く口を開いた。

『實はね、お父さん。僕はだん〳〵法律とか政治とかに興味を失つて來たんですよ。尤もまだ興味を失ふとか、失はぬとか云ふところまで研究した譯ではないですけど、簡單に云へば性に合はんやうな氣がするんです。それよりもまだはつきりしたことは云はれないですけど、新聞記者に近いやうな仕事がやりたいんです。それも、文學とか思想、それから宗教なんて方面を研究するのが適當ぢやないかと思ふんです。こんな内氣で、その癖癇癪持ちですから、辯護士だとか、代議士とか云ふ連中に近づくことはとてもやれんやうな氣がしますからね。』と、穏かに云つたが、ふと思ひ付いたので、『さう〳〵まだ知らせなかつたかも知れませんが、京都の山西を訪ねましてね。いろ〳〵相談したんです。すると山西も大いに賛成してくれましてね。』と云つた。

『うん、さうか。山西に會ふたか、あれは好え男やから、親身になつて相談相手になつてくれたやらう。健在かしら……。まあ、山西のことは後廻しにして、お前の今云つた目的のことはよう分つた。わしは何も干渉せんから自由にしたら好え。お前の云ふことをきいて見ればなる程、法律や政治は



性質に合はんかも知れん。わしはお前に政治家にでもなつて貰ふて一つわしの死ぬ時に自分が成功したやうに思ふて滿足したかつたが、もう今ぢやそんな無理なことは思ふとらん。人間はそれ〴〵天賦の才能があつて、それを育てゝ行くことが肝腎ぢやからな。併し、お前の考へてゐることは金にはならんぞ。一生貧乏して、つまり清貧に安んずる覺悟がなけりやいかんぞ。わしも本當に正直なところを云ふとどうも金には縁がない男らしいから、あんな實業方面に足を踏み入れなかつた方がよかつたのかも知れんがな。金持になる奴はわし等のやうな人間とは根から違ふとる。食ふものを惜む位にやり、體裁よく世渡りさへすれば人を苦しめようと、剽盗のやうなことをやらうと構はんのぢやからな。それでも成功さへすれば好いのぢや。そやから、今の成功しとる金持には碌な奴は居らん。皆鬼や泥棒と同じことぢやぞ。』と、またしても憤慨の語氣を續けてゐたが、『兎に角わしはもう一切干渉せんから、思ふやうにやつてくれ。唯、さつきも云ふたやうに二兎を追ふことだけはせんやうにしてくれ。』と、眞實肺腑から迸り出るやうな調子で云ふのであつた。

眞吉は父の言葉によつて、以前と違つて大變寛大になつて來たことを知つた。それと云ふのも困憊と、疲勞と、衰弱のためであるかと思ふと、隔世の感があるのであつた。何故かと云ふと、以前には父は自分の弱點や、責任はそつちのけにして、徒らに自分の希望や慾望を、自分の子供によつて實現せしめようがためには强制をもし兼まじき勢があつたからである。矢張、父も年をとつたのだ

な。と、つく〳〵嘆息せずにはゐられなかつた。
『それぢや、兎に角、どんな風になるか、またどんな事をするか、自分ながら見當がつかないのですが、思ふまゝにやらせて下さい。僕も一つ出來るだけのことはやつて見ますから……』と、心から感謝するやうに云つた。
勇三郎は、大變滿足したらしかつた。一々大きく頷きながら、にや〳〵と嬉しさうな表情を見せるのであつた。そして、『中田の兄弟もなか〳〵ハイカラになつたさうぢやね。わしのところへはちよつとも顔を見せよらんから分らんが……とし子なんかは大分に評判になつとると云ふことぢやが……わしのところへ來る若い衆も時々噂をしとるぜ。はッはは。』と、快活さうに笑つた。
『それぢや、近頃お父さんは中田の家の人達とは少しも會はないんですね。』と、眞吉は前から想像してゐたことではあるが、わざと不思議さうに訊ねたのであつた。
『うむ、久しく會はんな。別に用事もないしな。どつちかと云ふとわしは敬遠されてゐる方やから會はん方がよからうと思ふとる。』と云つて勇三郎はから〳〵と嘲るやうに笑つた。
『それぢや、無論とし子から僕に殆ど絶交狀と云つても好い手紙を寄越したことなぞは知らないでせうね。』と、眞吉は思ひ煩ふてゐたことも、好い機會を捉へたので平氣で云ふことが出來た。
『絶交狀？、何の絶交狀なんぢや。そりや、をかしいぢやないか。』と、勇三郎はさも訝かしさうに



云ふのであつた。
併し、眞吉がその經緯を說明することは出來なかつた。二人の間の戀愛を語ることは流石に躊躇せずにはゐられない。が、父にしたところでそれ位のことは察してくれる筈だのにと思ふと、齒がゆくなつて來るのであつた。
『つまり、何ですよ。その中には結婚問題なぞも含まれてゐるらしいのです。』
『うん、お前達二人の結婚のことか。そりやわしも薄々耳にしとる。俊助がとし子とお前とを一緒にすることが不贊成なのはずつと以前から云ふとつたことで、また、あいつとしては無理はないやらうな。併し、わしは別に氣にかけて居らなかつた。多分お前も同感やらうと思ふてゐた程ぢや。』
『夫ぢや、何ですか。お父さんも僕達の結婚には不贊成なんですか。』
『別に不贊成と云ふ程のことはないが、うまく行かんかて一向悲觀するにも當らんと思ふとるよ。今日かうして、兩方の間に隔てが出來、また貧富の懸隔も出來て了へば、向ふで嫌がるのは當然ぢやないか。殊に俊助のやうな事大主義の人間は尙更のことぢや。そんな者に頭をさげて娘をくれと賴むには當らんぢやないか。また、とし子にしてもハイカラな女になつて了ふたさうぢやから、どうせ女と云ふものは淺薄ぢや。お前のやうな貧乏書生を好くわけはないからな。ははは。』と、勇三郎は身體を搖つて笑ふのであつた。

眞吉も苦笑せずにはゐられなかつた。併し、それに何と答へて好いか、自分の考へは別にあるとしても、今の場合、父の意見を承認したやうな顏をせずにはゐられなかつた。

『さうやから、お前ももうとし子のことなぞはうちきりにすると好え。天下には女は多い。嫁を貰ふ時が來りや、何んぼでもあるからな。ははッ。』と、勇三郎はまたしても笑ひあげるのであつた。

『そりや、さうですがね。併し、絕交狀のやうなものを寄越すのは何と云つても生意氣ですよ。餘り人を馬鹿にした遣り方ですからね。僕は一度會つて詰問してやるつもりですよ。』と、眞吉は思はず興奮して來るのであつた。

勇三郎は別にそれを宥めようとするでもなく、寧ろ、一々尤もだと頷くやうな表情を見せながら聞いてゐたが、『まあ、それもよからう。ハイカラの鼻柱をうち碎いてやるが好え。』と、戯談にして了ふのであつた。

眞吉は父ののんきさうな言葉にある慰めをも得ることが出來たが、併し一面張合が、ないやうに感ぜずにはゐられなかつた。自分の心持は父のやうにさう簡單に解決はつけられないのである。憎みは愛と絡み、潔く別れようとする心の裏には斷ち難い執着が根を張つてゐるのである。併し、もう父に話したところで仕方がないと思つて口を噤んだが、何となく淡い寂しさが心の底に沁み廣がるのを覺えぬわけには行かなかつた。見ると勇三郎はすべてに超越したやうなゆつたりした顏付をして、前山を眺め渡してゐるのであつた。

夕方になつて、勇三郎や新助が屋後につくつた畑の野菜物に水を遣ると云ふので眞吉も猿股一つになつて飛び出して行つた。いと子も尻端折をしてお手傳ひに加はつた。日でり續きに胡瓜や、茄子や、隱元なぞの植はつた畑も葉は凋れ土には龜裂が出來て、乾ききつてゐるのであつた。そこへ桔桿で水を汲んだのを、バケツや、桶で運んでは流れるやうにざぶ〳〵とかけるのであつた。新助一人は肥桶を擔いでヨチヨチとよろけながら運んで行くのであつた。

賑やかに話し合ひながら、そんなことを夢中でやつてゐると、眞吉も心中何等の苦悶もなく、晴やかな、打ち寛いだ愉快な氣持になるのであつた。そして、田園生活の素樸な味ひと云つたやうなものをしみ〴〵と感じさせられるのであつた。こゝに人間の眞の幸福があるのかも知れないとも考へるのであつた。

その仕事が一段落つくと、今度は晩餐の用意の爲に、胡瓜や茄子のちぎつたのを笊に入れて家へ歸るのであつた。勇三郎はそれから自分で臺所へ出て胡瓜揉みをこしらへたり、茄子を燒いたりして コツ〳〵とさも樂しさうに酒の肴を手づからつくり初めるのであつた。新助は七八丁も離れた

酒屋へいろいろな買物に出懸け、また、いと子は他愛もないことを勇三郎に話しかけなぞしながらその傍で火を燃しつけたり、茶碗や皿などを洗つたりしてゐるのである。眞吉はひとり先へ、裏の樹蔭に盥を出して行水を使ふのであつた。野天の下で、草叢や木立で、蜩や、蟲が鳴くのを耳にしながら、盥の湯の中に坐つてゐると、まるですべてを忘れて別世界の人となつたやうに感じるのである。

『もう少し湯をやらうか。よう く沸いとるぜ。』と、家から勇三郎が叫んだ。

『いや、もう結構です。これから井戸傍へ行つて冷いやつで身體を拭いて來ますから……。』と、眞吉は外から返事をした。

それから、眞吉は赤裸々で手拭をぶらさげて、井戸傍へと歩いて行くのである。人から見られる恐れもなければ、自分でも裸になつてゐるのを氣にする必要もない。冷や冷やする黄昏の大氣の中を湯上りの肌に薄寒く感じながら行つて身體を拭いてゐると頭の上を數羽の鳥が啞々と鳴きつれて慌たゞしく飛んで行くのであつた。びつくりして空を仰ぐと、もう星が煌めき初めてゐるのであつた。そして何となくもう秋近いと云ふことが感じられるのであつた。

眞吉の身體からはまだそれと分らぬ程に湯氣が立つやうに見えた。それも直ぐ澄みきつた清らかな空氣に吸ひとられて了ふのである。眞吉は骨の髓からでも清められて行くやうな氣持になつて家の方へ戻つて來るのであつた。

やがて、代り番こに行水を濟まし、晩餐の用意が整ふと、緣近く粗末な餉臺を持ち出して、いろいろな手製の御馳走を並べられ、盃や銚子なぞも運ばれるのであつた。勇三郎は赭く酒に燒けた胸を露はにして、どつかりと胡坐をかくと、眞吉もさつぱりした浴衣一枚になつて食卓に就くのであつた。

『まあ、一杯飲んでくれ。かうして功名富貴といふやうなことを超越してゐると、そこに個中の樂みと云ふやつがあるね。そして、一杯の酒がどの位慰めてくれるか分らんな。ははは ッ。』と、勇三郎は先づ盃を手にして云ふのであつた。

『そりや、さうかも知れませんな』と、眞吉も父の酌を快くうけ盃を手にした。

『支那にかう云ふ詩がある。天高高不レ窮。地厚厚無レ私。動物在二其中一。憑二茲二造化力一。爭レ頭覓二飽暖一。作レ計相瞰食。因果都未レ鮮。育兒問二乳色一。』と、云ふんやが、實際ぢやな。かうしてゐるわしも矢張、本當は人事自然から超越して居るわけでないからなあ。』と、勇三郎は嘆息するやうに云ふのである。

『何だかちよつとも意味が分りませんね。ははは……。』と云つたが、眞吉も分らぬながら好い氣持になつた。

『今の若い者は漢學をやらんから分らんぢやらう。わし等の少年時代は漢學を主とした中學程度の學校にゐたから……。』と、勇三郎は盃を舐めては鼻をクンクン鳴らせながら云ふのであつた。

『さうですね。僕も分らぬながら漢詩なぞは好きなのですが……お父さんの號は柳塘とか云ひましたね。』

『柳窪だよ。家の前に柳があつたやらう。それでつけたのや。子供の時分には先生から梅硯とつけられたこともあつたが。』

『まだ、外に何か面白い詩がありませんかね。』

『うむ。漢詩か。一爲二書劍客一。二遇二聖明君一。東守文不レ賞。西征武不レ勳。學レ文兼學レ武。學レ武兼レ文。今日既老矣。餘生不レ足レ云。はどうかね。』

『それはよく意味が分りましたね。』

『……今日既に老たり、餘生云ふに足らずと云ふのぢや。わしのやうな人間のことぢや。ははッ』

と、勇三郎は身體を搖すつて笑つた。

眞吉は父の風采、態度、口吻なぞを見ると新派の芝居なぞでよく見かける失意の老政客の閑居の場と云つたやうなものが心に浮んで來て、妙な感にうたれるのであつた。何となく現代離れがしてゐると云ふ風にも思はれるのであつた。



洋燈の黄ばんだ光の下に泰然として坐つてゐる父の巨軀を見るとそれに對してゐる自分までが、まるで劇中の人物であるやうな氣がして、ある興味と同時に寂寞の感をも覺えないわけには行かなかつた。

勇三郎が最早幾本かの銚子を空にして、陶然とした氣持になつた時であつた。ふと家の裏の方にあたつて騷がしい聲が聞えたのであつた。勇三郎も聞き耳を欹てたが眞吉は何事が起つたのかと勝手の方を見ると、そこにはいと子も新助の姿も見えないのであつた。

新助の怒鳴る聲が起るのを耳にすると、若しや、泥棒でもやつて來たのぢやないか知らとも思つたが、こんな貧乏なまるで假小屋のやうな家へまさかそんな者が這入るなぞとは流石に突嗟の場合でも眞吉には信じられないことであつた。

『何ですか。桃でも盜みに來たんですか。』と、眞吉は訝かしさうに父に向つて訊いた。

『何でもないよ。また若い者が惡戯に來たんだらう。それを新助が叱かつてゐるのぢやらう。』と、勇三郎は努めて何氣なげに裝うとしてゐたが、その面にはかくしきれない不快の色が動いてゐるのが認められた。

『惡戯つて何です？』と、眞吉は顏色を變へて訊いた。

『何に、何でもないよ。いと子がうそ〳〵と出たがるので、若い者が惡戯をしようとして困るのぢ

や。困つたものぢやが……。』

『いと子に悪戯を？』眞吉は思はず驚きと怒りを含んだ聲で云た。

その瞬間、眞吉の心にはまざまざと光に照らし出されるやうに、その眞相を閃くやうに感じた。そして、昨夜、歸つた時に新助がいと子を引張つて歸るところにぶつかつたこともそれとなく思ひ合はされるのであつた。美しく娘になつたいと子を、白痴であるが故に、また、家が零落して了つたが故に嬲りものにしようと覗つてゐる獣のやうな若者が、夜闇に乘じて忍んでやつて來るのかと思ふと、抑へがたい憤怒と淺猿しさの思ひに驅られて、眞吉は座を蹶立てるやうにして起ちあがつたのであつた。

『好え、好え、ほつて置け……』と、勇三郎は後から聲をかけた。

が、眞吉は勝手の方から外へ出て行つた。すると、そこには新助がいと子を抱きすくめるやうにしながら、尙、罵りの言葉を止めないでゐるのであつた。

『……顏を見たぞ！　今度會ふたらどやしつけたるから覺えとれ！』と。新助は暗闇に向つて叫んだ。

眞吉はどこに相手がゐるのかと見廻したが、そこには人影らしいものは何一つ見當らなかつた。

『どいつだ！　新助どこに行つたのだ！』と、眞吉は興奮した調子で訊いた。



『あそこに逃げて行きましたぜ。源七の伜に違ひないだす。今度やつて來たらもう承知せん。薪でも、棍棒でゝもどやしつけたる。』

『仕樣のない奴だなあ。』と、せい〳〵息を切らしながら、闇を透かして見ると、星明りの下を、人影らしいものが鞠が轉がるやうに逃げて行くのが微かに見えた。

眞吉は殘念に思ひながら固く握りしめた拳も自然と緩んだが、いと子の方を見ると平氣で突立つてゐるのであつた。俄にむら〳〵と癇癪玉が破裂するのをどうすることも出來なかつた。

『馬鹿！　貴樣がうそ〳〵外に出るからだ。馬鹿の癖に男の相手になるなんて、何と云ふことだ。』と、罵りながら、眞吉は怒りに燃える眼でほのかに白い妹の顏を見据えながら、突然、ぽか〳〵と頭や肩を打擲したのであつた。

いと子は悲鳴をあげながら、新助の手を振りきつて逃げ出さうとした。それを新助が追つかけて帶を摑んだ。いと子の悲鳴は尙もあたりの靜寂を破つて響いた。『眞吉……もう好え加減にしてくれ。馬鹿を苛めても仕樣がない。家へ這入つてもう少し酒の附合をしてくれや。』と、勇三郎もたまりかねて、座を起つて出て云つたが、その調子は明かに涙が籠つてゐるやうに響いた。

『えゝ、馬鹿だとは分つてるんですけど、餘り殘念だからつい癇癪が破裂したんですよ。』と、眞吉は張詰めた氣持も挫けたやうに悄然と佇んでゐるのであつた。

勇三郎は默つて彼方へ行つて了つた。が、眞吉は直ぐ家に入る氣持になれなかつた。彼の眼からは何の故とも知れぬ涙がぽろ〳〵と瞼に溢れてこぼれ落るのであつた。それを拭ひながら、こんな泣き顏は父に見られたくなかつた。それは徒らに父の心を哀しませるに過ぎないと思ふからであつた。

新助は一生懸命で、やつといと子を連れて戻つたが、眞吉がそこにゐるのを見ると、またしてもいと子は身體を藻掻いて逃げ出さうとするのであつた。

『若旦那、家へ這入つてつかさい。そんでないと、いと子さんが云ふことをきゝなはらんよつて……。』と、新助が哀願するやうに云ふのであつた。

『うむ。僕は這入るよ。それぢや賴むよ。』と、眞吉は寂しげな調子で云つて、元氣なげに家に入つて行くのであつた。

勇三郎は沈んで顏をして盃を手にしてゐたが、眞吉の顏を見ると、

『まあ、氣にかけんが好え、久し振やからもつと飲んでくれ。新助がついとるで大丈夫やから……。』と慰めるやうに云つた。

『お父さん？　困つたものですね。』と、眞吉は如何にも情なささうに云つて、そこにどつかりと腰を下ろした。がまだ、胸の騷ぎは高い動悸となつて止まないのであつた。



# 第五章

八月の末のよく晴れた日であつた。まだ朝のことなので、山を見ても、田畑や、杜を見ても露に濕つた鮮かな色を見せてゐた。それがまた實に爽かな感じを與へられるのであつた。時々、早や山から芝を一ぱい入れた籠を背負つて歸つて來る男女や、牛を川原の方から追つて來る子供などにすれ違つたりしながら、石塊や凸凹の多い田舍道を北にとつて歩いて行く四人連れがあつた。

同じ徽章のついた麥稈帽を冠つた二人は俊一郎と木村とであつた。その二人は殆んど肩を並べるやうにして、何やら聲高に話し合つてゐたが、其後から續く一人の青年だけは何となく打ち沈んだ樣子をして、俯垂れ勝ちに小石を蹴りなぞしながら行くのであつた。それは眞吉なのであつた。今一人の女性は云ふ迄もなくとし子である。田舍には珍らしいそのハイカラな女學生風俗と、美貌とは一際目立つてゐたが、燥いだ調子で誰彼の區別なく話しかけるかと思ふと、また默り込んで了ふ樣子は、自然と心の動搖を語つてゐるやうに思はれた。

この一行は前日から企てゝゐた一里餘り先にある石窟に五百羅漢を祭つたちよつと景色の好い山へ散策に行く爲に、おむすびなぞの用意をして家を出たのであつた。それと云ふのも、俊一郎ととし子とが木村を案内する爲に企てられたやうなものであつたが、そこへ偶然行き合はせた眞吉が頻

りと躊躇したにも拘らず、とうたう否應なしに誘はれて了つたのであつた。

眞吉が一行に加はるのを躊躇したことは極めて無理ならぬところがあつた。彼はいろんな用件をもち、複雜な感情に支配されながら、幾度か逡巡する心に鞭つて中田家を訪ねたのであつた。で、三人の者が燥ぎ樂んで出かけようとしてゐる氣持に同化するやうな心にはとてもなれないと思つたのである。殊に見知らぬ木村なる一青年が交つてゐることは一層彼を遠慮させる結果になつたのであつた。

『丁度好えとこや、眞ちやんもお行き。伯父さんは今朝早う銀行へ出懸けて留守やで、羅漢岩から戻つて來た時分には歸つて居られるやらうから……。』と、伯母のおまさは勸めてくれた。

『行かう、行かう。連れがあつて好いぢやないか。君も暫く行つたことがないだらう。一緒につきあひ給へよ。』と、俊一郎もいつもの素撲な飾り氣のない調子で誘つてくれた。

眞吉はまだ挨拶も碌々しないで突如さう云はれたので、少からずまごつきもしたし、それに、とし子の表情や、初對面の木村の態度のどこかに不贊成らしい點が見えやしまいかと、それだけにでも隨分神經を使はずにはゐられなかつた。

ところが、とし子と最初顏を見合はせた時はお互に妙な感情の蟠まりから、變にてれたやうな氣まづいやうな、探り合つてゐるやうな氣持で、直ぐには打ちとけることが出來なかつた。が、間もなくとし子の方から、

『眞さん、いらつしやいよ。ひとりで殘つてたつてお父さんはお留守ですし仕樣がないぢやありませんか。それに遊びに行つたつてお話も出來るぢやありませんか。』と、多少自分の心の動搖を蔽ふやうな氣持も見えたが、快活な調子で云つた。

木村も傍から『僕、案内して貰ふんですが、一緒に願ひたいですな。』と、無雜作に云つた。

それですつかり、眞吉の遍執になり萎縮してゐた心も解きほぐされて、『それぢや、一緒に行かうかな。』と、云ふやうな氣持になつたのであつた。その瞬間、却つてこんな機會で皆なと打ち解け合つて置いた方が、何を話すのにも好都合だと云ふことも感じられたのであつた。

が、さて一緒に歩き出して見ると、何となく自分一人が餘計な混り者のやうに僻む心持があるのをどうすることも出來ないのであつた。

路傍に農家や、店屋なぞが固つてゐるところを通る時は、家の中から珍らしさうに飛び出して來ては一行を眺めるのであつた。殊に、とし子一人がゐるために一層人目を惹いてゐるのは爭はれないことであつた。併し、大抵の人はあれが中田家の兄妹達だと知つてゐるので多少とも敬意を拂つた眼で見送り、中には恭しくお辭儀をする者すらあつた。が、それにも拘はらずとし子はひどく人に見られるのを嫌がり、極り惡がるのであつた。どうかすると眞黑になつた男女の子供が素裸體になつ

て路榜にずらりと行列して居るのに出合ふと皆なが云ひ合はせた様にお辭儀をしたりするので笑はせられたが、少し離れると、一齋に口を揃えて、

『ハイカラ！』

『眼鏡！』

『やーい。男と女とまあめいり！』なぞと、叫び立てるには閉口させられた。

『私いやだわ。何て田舍の子供はあんなにげすなのでせう。』と、とし子は聲を尖らせて怒り出すのであつた。

『だつて、お前だつて子供の時はあんなにしてゐたんぢやない？　眞黑になつて赤裸々になつて遊んでゐたんだよ。』と、俊一郎が振返つて揶揄つた。

『いやですよ。そんなことはなかつたわ。そりや、兄さんのことでせう。』と、とし子はしつぺい返しをした。

そんな他愛もないことを云ひ合つては、皆なで面白さうに笑ひあげるのであつた。そんなことにも散策の愉快さはあつた。眞吉もさうした心持にひき入れられはしたが、直ぐ覺めた心になつて、いろんなことを考へ初めるのであつた。とし子の一言一行には殊に神經過敏になつた。而も一年餘り會はないうちに別人のやうに變つたとし子の自由で快活で、華やかな表情や、姿態は見れば見る程、驚かれるばかりであつた。僅かの間の都會生活にかうも變るものかと思ふと、一體とし子と云ふ女性はこんな風に境遇や生活の變化に順應して、眞晝の日を受けては艶麗なる牡丹のやうに咲き、夕風に吹かれては月見草の如く清楚な姿を見せるやうな女なのではないかと不思議に思はれるのであつた。實際、單色なうちにも、ある複雜な影や、光を潜めてゐるやうな感にうたれることが屢々あるのであつた。そこに強い魅力もうけたが、どこか恣な點がある反感を唆るやうなこともあつた。

『眞さん。本當に今日はお氣の毒しましたわね。でも、一緒に來られてよかつたわ。』

とし子は兄と木村の後姿にちらと眼をやつてから、眞吉に囁くやうに話しかけるのであつた。

『え、でも何にも話が出來ないぢやない？　何だか、いろんなことを話して了はないと、遊ぶ氣持にもなれないからなあ。』と、眞吉は幾分か不機嫌さうに俯垂れたまゝで答へた。

『でも、それは仕方がないわ。後で話は幾らでも出來るぢやありませんか。』

『話をしたところで、どうせ、絶望だと云ふことは分つてゐるのだから……。』

『眞さんは怒つてゐるのね。まあ、好いわ。何んだつて詳しい話をすれば分るんだから……』

『としちやん。いつ東京に發つ？』と、眞吉は不意に調子をかへて訊いた。

『さうね。もう三四日のうちには……』

『あの木村と云ふ人も一緒に？』
『え、そのためわざ〳〵寄つて下すつたのですもの。さう〳〵眞さんも上京したいのですつてね。』
『え、併し、一緒に行くとは云ひませんから安心なさいよ。』
『あら、あんな皮肉を！』とし子は大きな眼を睜つて驚いたやうに云つた。
『……一緒に行く行かないなんてことは別として、僕が東京へ行つたら、會つてくれるでせうね。』
と眞吉は靜かな調子で氣をひいて見るやうに云つた。
『そりや、お目にかゝるわ。でも、そんなことを今改めて確めるやうに訊かなくつても好いぢやないの？』と、とし子は横合から彼の顏を竊み見るやうにして云つた。
『だつて、もう絶交同樣にならうつて云ふんだから、會つてくれるかくれないかを訊くのは當然ぢやないか。』と、眞吉は思はず聲に顫えを帶ばせて云つた。
その時、別に何の理由もなかつたのだらうが、木村が此方を振返つてキラリと眼鏡を光らせながら一瞥をくれた。すると、とし子は無意識ながら二三歩眞吉から離れた、眞吉はそんなことにも何か意味深いものがあるやうな氣がして、無關心になれなかつた。『ちよつ……何がをかしくて此方を見るのだ。』と心の中で叫ばずには居られなかつた。とし子の方を見ると、すました顏をして歩いてゐる。而もバラソルのコバルトに顏が染まつたかと思はれる程深くかくしてゐるのであつた。眼を轉



じて、木村の方を見ると、何か俊一郎に向つて囁いてゐるやうな氣がした。間もなく俊一郎もちらつと振返つて見てニヤリと笑つた。眞吉は屹度二人が自分達の噂をしてゐるに違ひないと思つてちよつと忌ま〳〵しく感じた。こんな風にして歩いてゐても要するに、自分はひとりぼつちなのだ。心から到底皆んなの仲間に入ることが出來ないのだと思つて寂しい氣持になつた。
『矢張、僕は來なかつた方がよかつた……』と、眞吉はさも〳〵つまらなさゝうに獨語した。
『眞ちやん、何を云つてゐるの？』と、とし子が聞えよがしの大きな聲で云つた。
『何を云つたか知らない？』と、眞吉はわざと空悦けて見せた。が、何とも云ひ知れぬ不快な感情がこみあげて來るやうな氣がした。
『ほほほ……眞さんは獨り語を云つてゐたの？　まるでおぢいさんのやうね。』とし子は尙も快活な聲で笑つた。
が、先になつて行く二人はこの時何かの話に夢中になつてゐるらしいので、とし子の嬌艶な聲も聞えないらしかつた。眞吉は何となく助かつたやうな思ひがした。この悄げ返つてゐる顏を見られるのは何としても辛いことに相違なかつたから。併し、とし子に對してはむら〳〵と腹立たしさが湧き起つて來るのを覺えないわけには行かなかつた。
『早く話をして何とかきめて了ひたいな。何とでもきまれば好い。』と、眞吉はまたしても獨語する

やうに云つた。
『眞さん、今日は何だか變だわね。何か面白い話をして聞かせて頂戴よ。大阪にも面白いことがどつさりあるでせう。』と、とし子は彼の險しくなつた心に氣付いたのか、それに觸らないとするかのやうに和いだ調子で話しかけた。
『そりやあるとも！　東京に居る人に負けはせんからな。單純な學生生活と違つて僕等は既に實世間へ出てゐるのだからね。』と、眞吉は昂然として負惜みを云つた。
『大變な氣焰なのね。でも、東京の學生々活はまた別よ。眞さんも上京なすつたら分るわ。』
『矢張、としちやんは强情つ張だな。どうしても優越感を持つてゐたいのだね。』
『あら！　どうして？』
『だつて、現在としちやん自分の口で云ふことが證明してゐるぢやないか。』
『さうですかね。』とし子はちよつと拗ねたやうに外方を向いて了つた。
すると眞吉は『……おれが酒を飲んだり、女を買つたりしてゐたのだとは夢にも知るまいね。驚いちやいけないよ。』とでも云つて見たいやうな、少し捨鉢な氣持になるのであつた。
眞吉は自分の感情を露骨に出したのを恥ぢた。それは却て自分の淺猿しさを表白するに過ぎないと思つたからである。



で、眞吉は言葉を和げて、『いや戯談ですよ。どんなに優越感をもたれたつて何でもないさ。そんなことを氣にしないで、東京の話でもしてきかせてくれないかな。手紙で約束したぢやありませんか。どうせ僕は東京へ行つたところで學生生活なんかは出來ないんだからきかせて貰はなくちやいつまでたつても分らないからな。ははは……』と、自ら嘲るやうに笑つた。
『眞さん、學校に入らないでどうするの？』と、とし子も氣持をとり直して氣遣はしさうに問ふた。
『どうするの、かうするのつて、金がなくちや學校に行かれないのは分り切たことぢやありませんか。』
『でも、何とかして……』
『その何とかが駄目なんだからなあ。矢張、貧乏はいやだなあ。』と、眞吉は戯談のやうに云つて嘆息した。
とし子は何と云つて好いか分らないので、默り込んで了つた。餘りに知り過ぎる程知つてゐる眞吉の境遇に觸れることになるので、それ以上深入りして行くことは避けたいと思つた。今のところ自分の父の助力を得難いことになると、實際眞吉の運命も思ひ遣られるのである。が、それを自分の手でどう出來ると云ふわけでもないので、とし子は何となく胸を締めつけられるやうな痛みを覺えないではゐられなかつた。

『……そんなこと云つてたつて仕方がない。僕は兎に角、やるところ迄はやるつもりだ。どんなことをやるか知れないんだから、御迷惑だつたらとしちやんのとこへなぞ寄り付きはしないから安心して下さい。』と、眞吉は皮肉な調子で云つた。

『あら、また皮肉を……眞さんも隨分變つたのね。ほんとにびつくりする位だわ。』とし子は大袈裟に惘れたやうな表情をして云つた。

『さあ、變つたと云へば、としちやんと僕とどつちの方がより多く變つたか知ら？　そこは問題だな。』と、眞吉は餘裕のある態度で、幾分ひやかし氣味に云つた。

とし子は横眼で睨めつけるやうに彼の方を見てから、何か云はうとしたが、ふつと口を噤んで了つた。と云ふのは、いつの間にか可なり人家の密集した部落にさしかかつたからであつた。見ると先の二人も立ち止つてニヤ〳〵しながら遲れた二人を待ち迎へてゐるらしい樣子なのであつた。

『あら、こつちを見て笑つてゐるわ。』と、とし子は極り惡げに顏を赤らめて云つたが、てれかくしに『暑くなつたわね。暑くなつたわね。』と、頻りにハンカチで顏を拭いてゐた。

可なり早くから家を出たと思つたが、もう八分通りは目的地に近づいたので、太陽は高く昇り、暑い日光が容赦なく照りつけてゐた。眞吉も眞赤な顏をしてゐた。先の二人に近づくと、矢張、暑い暑いと繰返しながら、ほこり塗れになつた朴齒の下駄を穿いた足をタオルで拂ひなぞしてゐるのであつた。

『君等は何を話してゐたんだね。一生懸命になつて……』と、俊一郎が眞先に冷かした。

『一生懸命になんかなりはしないわ。大阪の話をきいてゐたのですわ。』と、とし子は一歩前へ進み出るやうにして言ひ譯をした。

眞吉は唯、ニヤ〳〵笑つてゐて何とも答へなかつた。云へば自分も見苦しい辯疏になるやうな氣がするので口が出せなかつた。

その時、眞吉は木村の眼鏡の奥に光る俊敏らしい眼がとし子や自分に向つて注がれてゐるのを無意味には思はれないやうな氣がした。それは自分の僻みのせいだ、邪推からだと思ひながらも拘泥しないではゐられない氣持であつた。殊にとし子は自分に對してゐる時と、俊一郎や木村に對して居る時とはまるで別人のやうに態度から表情まですつかり變へる豹變の巧みなのには驚かずにはゐられなかつた。さつきまで話し合つた事なぞはさらりと忘れて了つたかのやうに、もう、俊一郎や木村の仲間になつて快活にいろんなことを話し初めるのであつた。さうなると眞吉は一層閑卽された形になつて、ある不愉快さを感じずにはゐられなかつた。で、自然と少し離れて後から默つてつ

いて行くやうになるのであつた。

『岡本君！』と、ふいに俊一郎が振返つて呼びかけた。

その瞬間眞吉はちよつとどぎまぎして彼の顏を見た。と云ふのは、これ迄は眞吉君とか、眞さんとかと必ず少時代から呼び慣れた名を呼ぶのに、今急に苗字だけを云はれたのが、何となくひどく改まつて聞えたからであつた。

『ね、山田信之助が孤兒院を最初に起したのは直ぐそこの家だつたね。』と、直ぐ續いて俊一郎は云つた。

それで、眞吉は他人行儀で苗字を呼ばれたと解したのは、矢張自分の僻みであつたと氣付いた。俊一郎は決して、そんな底意があつたのではなくて、最早お互に少年ではないと云ふ意識から、また他人である木村のゐる手前、大いにに敬意を表して岡本君と云つたと云ふことが分つたのであつた。さうなると、自分が恐ろしく神經過敏になつてゐるのが氣恥かしくなる位であつた。

『さうだ、直ぐそこの赤い壁の家だ。』と、眞吉は慌てて答へた。

さう云ふうちにも一行はその家の横へ出てゐた。赤い壁もところ〴〵崩れ、瓦屋根もひどく傷んでゐた。が、まだ廢屋にはなつてゐなかつた。

『木村君！　いつか話した山田信之助の家はこゝなんだよ。この家があつたために、この地方の人心に與へられた影響は大したものだらうよ。』と、俊一郎は直ぐに木村に向つて說明し初めた。

木村は『ほう。こゝかね。さう思ふと何となく敬虔の念にうたれるね。何とかして保存する工夫でもしたら好いかも知れんね。』と、感激した調子でじろ〴〵と家を見上げ見下ろしながら云ふのであつた。

眞吉はついこの間も父と語り合つたかくれたる偉大な殉教者の一生が心のうちに浮んで來た。同時に何となく興奮した氣持が胸頭に衝きあげて來た。

『今ではもう十字架や聖像の代りに佛壇が祭つてあるのかも知れないわ。』と、とし子が笑ひながら云つた。

眞吉は後にゐたのが既に歩き出した一行の方へ進み寄つて、『無論、佛壇ですよ。信之助氏それから今後繼者として事業をやつて居る弟の良太郎氏は無論クリスチヤンでせうが、今この家にゐるのは一番の兄さんださうですからね。兄さんだけは頑固でどうしても信者にならなかつたさうですよ。少し低能だと云ふ評判もありますがね。併し、兎に角この家が山田信之助と云ふ一個の尊い殉教者が一生を終つた家ですからね。』と、感慨に堪えないらしく木村に云つて聞かせた。

『私の家にも以前ぼろ〴〵になつた聖書なんかがあつたわね、あれは山田さんがもつて來てくれたのでせう。』と、とし子も思ひ出して皆に向つて吹聽するやうに云つた。

とし子の話をうけて眞吉も『僕のとこにもそんな基督教に關するものが澤山ありましたよ。子供の時分にそんなものを見ると、何だか片假名の名前が澤山入つてゐるので、不思議に思つたことがありましたね。』と、氣乘りのした調子で話しかけた。

『さうだつたらう。僕の父なんかも大分それとなく山田さんに說かれたらしいが遂に周圍の事情に負けて信者にはならなかつたらしい。尤も、そんな方面に向く人間でもないからな。』と、俊一郎は薄笑ひしながら云つた。

それから暫く山田信之助のこと、信仰のこと、ルーテルの宗教革命のことなぞが話題にのぼつたが、いつの間にか、そこの部落の盡端に出てゐたのであつた。その邊からはだんだん道も細くなり、兩方から山が迫つて來て、淙々と流れる溪川の音がどこからか聞えて來るやうになつた。眼をあげると重疊として空にそゝり立つ蓊鬱たる翠綠の山々になつてゐた。そして、その上からギラ〳〵と空が壓するやうに下界に臨んでゐるのであつた。

一行は云ひ合はしたやうに、そこらを眺め廻して眼覺めるやうな、また、心の渴きを醫されるやうな氣持になつた。

『もう直ぐだよ。確かにこの先から右に折れて丸木橋を渡つて行くのだつたね。』と、俊一郎は振返つて云つた。

『さうだ。橋を渡つたところに石標が建つてゐる筈だ。』と、眞吉が應じた。

木村ととし子はいつの間にか肩を並べて數歩の後から、四邊の風景を指しなぞして話しながらやつて來るのであつた。それが如何にも慣れ慣れしげで、且つ氣輕げであつた。若い男女がかうして家庭と云ふやうなものから離れて自然の間に身を置くと、何となく開放されたやうな自由な氣持になるものぢやないか知らん？……そんなことを眞吉は心の中で考へてゐるのであつた。而も、今のとし子は確に木村のもつてゐる何物かに心を惹かれてゐる、その聰慧らしい風貌か、齒ぎれの好い才氣の閃く話し振りか、それとも內に深く潛められた情熱かなぞと考へて見ると、そのいづれかは分らなかつたが、兎に角、矢張りさう思はれてならなかつた。

山路は次第に細く、凸凹が多く木立も深くなつて來た。そして間もなく岩石壘壘たる溪流の滸へ出た。それは幅の狹い川だつたが、ところ〳〵岩に激して白沫をあげるところは案外音も高く、流れも急であつた。名を知らぬ鳥がその上を礫のやうに掠めて通るのが見えた。

『溪流は好いなあ！』と、先頭に立つた俊一郎が嘆稱するやうに云つた。

やがて皆も橋の上に佇んで、數仞の底を曲りくねつて、流れ來たり、流れ去る水のさまをぼんやりと眺めてゐた。流れの傍へ降りて行つて汗を拭かうと眞吉が發議したが、それは危險だと云ふので中止することになつた。そして早く目的の場所に着いてゆつくり休んだり、汗を拭いたりしよう

と云ふことになつた。

そこから木陰が深くなるので、ずつと涼しかつた。とし子なぞはもうパラソルをたゝんで杖にしてゐた。男三人が交り番こに持つことになつたおむすびなぞの入つた風呂敷包が可なり長い間、自分の手にあつたことに氣付くと、眞吉は何だかお供をしてゐるやうで嫌な氣持になつた。そんなことにこだはる自分の心持を蔑みながらも、『さあ、もう最後だから誰かもつてくれませんかね。』と誰に云ふともなく云つて見た。

『僕がもちますよ。うつかりしてゐました。』と、木村が自分から進んで受取らうとした。

眞吉はちらととし子の顏を窃み見るやうにしてから木村に渡してやつた。何となく面當のやうな氣がしながら。

『あら、私がもちますわ。私はちよつともお手傳しないんですもの。でも、こゝまで來てから持つなんてずるいですわね。』と、とし子は笑ひながらつと木村の方へ寄り添ふて行つて風呂敷包を手にとらうとした。

『いや、僕が持ちますよ。僕も隨分ずるけてゐたのですから……本當に好いんですよ。』と、木村は奪らせまいとした。

そこで、二人はちよつと風呂敷包の奪ひ合ひのやうなことをやつたが、とし子の白い手は遂に木



村の赭黑い手に追ひ退けられて了つた。とし子は如何にもすまなさゝうな、而も媚びを含んだ眼で木村の顏を眺めた。

『本當にすみませんわね。』と、云つてとし子は退儀さうにパラソルを突きながら稍々坂になつた道を歩み初めた。木村も下駄の音を鳴らせながら行つた。

俊一郎は自分一人先に立つて、後を振返らうともしなかつた。眞吉は直ぐ數歩の後で二人が奪ひ合ひをしたりするのを忌ま忌ましげに一瞥をくれてから、さつさと行かうと思つたが、何だか氣懸りでずん〳〵離れて了ふ氣にはなれなかつた。二人が何を語り合つてゐるか、振返るのは拔しいので、それだけでも聞かうとしながら耳を欹てゝ注意をその方へ向けるやうに努力した。

『東京の近くではこんな山水は見られませんね。』と、木村が云つた。『さうでせうね。私なんかまだどこへも參つたことはありませんけど……。』と、とし子は晴々した聲で答へた。

『實際、關西と關東とはまるで違ひますね。僕なんか武藏野は好きですけど、山や川は規模は小さくても關西の方に親しみがありますね。』

『私もさうですわ。武藏野は好うございますわね。』

『獨歩の『武藏野』は御覽でしたか。』

『え、お友達に貸して頂きましたわ。あの中には面白い小説もありますわね。』

『矢張、獨歩は好いですね。これから大いに認められるでせう。ツルゲネーフの『あひびき』なんかの影響もあるんですが、併し、『武藏野』には獨歩自身のオリジナリチイがありますからね。』と、木村は調子のある言葉で云つた。

とし子はさも傾聽するやうに、時々はつきりとした返事をするのみであつた。それからも木村は文學のことを話しつゞけてゐるらしかつたが、眞吉にははつきりと聞えなかつた。先にゆく俊一郎が一高の寮歌を突然うたひ出したのでその爲にも打ち消されがちになるのであつた。文學が好きだと云ふ二人が共鳴するのは當然だ。また話が合つて親しくなるのも自然だ。さう認めながらも眞吉は心の底に嫉妬の思ひがむづ〳〵して、時とすると、ひつ掻き廻すやうに暴れ出すのを如何ともすることが出來なかつた。さうとは知らずに、後の方では依然として二人の語り交す聲は絶えないのである。その調子や聲だけを聞いてゐると、喃々喋々として、まるで戀人同志が睦じく樂しげに語り合つてゐるとしか思はれない程であつた。

『秋になつたら、一度郊外へ行つて見ようぢやありませんか。日曜日の散策位ならお差支ないでせう？』と、木村が云つた。

眞吉は思はず胸が轟くのを覺えた。彼の興奮した感情では、木村の云ふことは何でもないのかも知れないが、若い女を誘惑しようとしてゐるのだとしか思はれないのであつた。

『は、是非お供をさせて頂きますわ。』と、とし子は直ぐ嬉しさうに答へたが、『兄も御一緒に參るでせうから。』と、後から云ひ添えた。

兄も一緒に……なる程、流石にとし子も二人と云ふのでは氣がさすのだらう。併し、二人の接近は危險なことに違ひないと眞吉は思はずにはゐられなかつた。

……木村と云ふ男は既に三四日は滯在してゐるのだ。して見ると、その間にとし子と接觸する機會は可なり多かつたに違ひない。いろんな話もしたであらう。それに對して俊一郎がある警戒の必要を感じなければ、外の人達が特別にそんな氣持になる筈はないのだ。況んや、家の人は木村が最も信じてゐる伴の親友であると云ふことによつてどんな場合でも頭から疑惧の念を捨てゝかゝるに違ひないのだ。それに一體田舍の人達——殊に中田家の兩親のやうな人は、相當の財產や地位があるとか、或は最高の學府に在學してゐるとか云ふことを以て、その人物を判斷すべき條件としてゐる場合が、譬へ無意識ながらでも非常に多い。だから、とし子が木村とどんなことを話してゐようが、どんな態度を見せてゐようがそんなことはお關ひなしでゐられる。而も兩者の間には俊一郎と云ふものが介在してゐる。だから、その俊一郎に任せきるやうになる。で、進んで干涉したり、警戒したりする必要はないと云ふ意識が兩親達の心持にあるのだ。ところが、その俊一郎はあんな風で 聰明で、悧巧ではあるが、どこか超然として、物事に拘泥しないと云つたところがある。氣が

ついてゐるのかどうか知らんが、鋭敏に神經が働いてゐないやうな感じを受けることが多い。で、とし子と木村に對しても、固より關係も違つてゐるが、自分の十分の一も神經を使つてゐないやうなところがあると、眞吉は心のうちで考へるのであつた。その爲に自分の淺猿しい邪推だと思ひながら、いろんな疑惑を二人にかけずにはゐられなくなるまで昂つて來るのであつた。

いつの間にか、そゝり立つは巨岩が倒れかゝつて、自然と洞門のやうな入口を形造つてゐるところへ出た。その岩の上や、斜面になつた片側なぞにも曲りくねつた松なぞが、苔と一緒に生へて、濕潤した膚を見せてゐた。そこから樹立を透して一方を見下ろすと溪流があり、對岸はすぐ急峻な山になつてゐる。一方は路傍から直ぐに同じく山になつてゐた。その石門の前に立つて、內側が少し暗くなつたところなぞを見ると、流石に薄ら冷たい山氣が感じられるのであつた。

『おい、木村！　こゝだよ。この石の門を這入つたところなんだよ。』と、俊一郎が叫ぶやうに云つた。

少し遲れてゐた木村ととし子は慌てゝ駈け出して來た。眞吉もさま〳〵な妄想の囚になつてゐたのが、石門を仰ぎ見ると、何とも云へぬ爽かな氣持になつて皆なと一緒に自然の巧妙さを嘆賞するのであつた。

『何だか今にも崩れかゝつて來さうぢやありませんか。私怖いわ。』と、とし子は俊一郎や、木村が石門の中へ這入つて岸壁を突いたり叩いたりしてゐるので、眉を顰めながら自分ひとりは外にゐていつまでも躊躇してゐるのであつた。

『馬鹿だね。何十年前か、何百年前からこのまゝであるんぢやないか。僕達が突いたり押たりした位で崩れたりなんかするものか。』と、俊一郎は揶揄ふやうに云つた。

木村は唯笑ひながらとし子の方を振返つた。眞吉は何となく、とし子が燥いでわざと大仰な表情なぞして見せてゐるやうな氣がするのでちよつと嫌な氣がした。

『そんなに怖がつてると、却て小石位は落て來るかも知れんな。ははは……。』と、眞吉は無雜作に云つたがその聲は決して快活に響かなかつた。どこか神經的なところがあつた。

『いやよ。そんなにおどかしちや……皆んな早く先へいらつしやいよ。私は怖いから駈拔ける後からわ……。』と、とし子は尙も子供のやうなことを云つてひとりで燥いでゐた。

とし子は實際自分で云つた通り、一同が石門を通りぬけて行くのを待つてゐて、きやつ〳〵笑ひながら身を翻すやうにして駈け出たのであつた。その自由で、無邪氣な振舞はたとへ、ちよつとしたことにでもたまらない幸福が感じられると云ふ青春の少女にふさはしい輕快さがあつた。身體につけた着物や、帶や、手にしたパラソルなぞの青、赤、コバルト、白なぞの色彩がゆら〳〵と眩しいばかりに搖れ動いたのが、あたりの綠に反映して、不思議に鳥か何かの生き者が突然出現したのかと

思はれるやうな印象を眞吉に與へたのであつた。

皆なは愉快さうに、また打ち囃すやうに笑つた。眞吉もとし子一人がゐるために、何となく華やかな快い雰圍氣が、彼女の身體や氣分から醸し出されるやうな氣がして、その魅力にひき込まれて行くやうな氣がするのを覺えた。

あたりを見廻すと、蟲々と松や、杉や、縱なぞの大木が、その根本を見せない迄に生茂つた雜木と一緒に、そこらをだん〳〵薄暗くさせ、よく晴れた空もほんの一部分しか見えなくなつてゐるのであつた。キチ、キチ、キチ……と、人の話聲に驚いて叫びながら逃げて行く小鳥の聲が四邊の靜寂を劈くやうに起つたりした。

やがて、羅漢岩のあるところへ出た。それは頭を壓するやうに峙つた崖に入口の廣い洞窟が出來てゐて、そこには石で造つた羅漢が祭られ、それを腐朽した木柵を以て廻らしてゐるのであつた。羅漢岩と云つても直接に岩壁に彫られたものではなかつたが、隨分年數が經つてゐることは、その造り方が原始的で、殆ど磨滅しかゝつた奇怪な石像ばかりであるのを見ても分つた。素撲で蒼古な感じがするのが値打で、固より世に聞えた名所と云ふやうなところではなかつた。が、いつ誰が來たのか、木柵の中には燃えさしの線香と、もはや凋れて秋草が散らかつてゐるのも寂しい感じをもたせた。



『なる程、隨分古いものだね。』と、木村が覗き込んだ。

『古いことは間違ひないね。或は古へのかくれた名匠の手につくられた物かも知れないぜ。』と、俊一郎は誇るやうに云つた。

とし子はまるで氣味の悪いものでも見るやうに遠くの方から見てゐたが、『羅漢さんと云ふのは本當にこんなものでせうか。』と、顏を顰めながら、『ね、兄さん！　江の島へ行つたときに窟やへ這入りましたわね。あすこの奥にも何だか澤山祭つてあつたでせう。あの時も私氣味が惡くて嫌だつたわ。』と、云つた。

俊一郎はちよつと返事の代りに頷いて見せたが、木村に向つて、『木村、僕の地方だけで云つてゐることか知らんが、死んだ身内のものに會ひたいと思つたら、五百羅漢を祭つてあるところへお參りすると、その中に屹度似たのがあるつて云ふよ。どうだ、君は心當りがないかね。』と、戯談のやうに云つた。

『さう〳〵そんなことを僕も子供の時に聞いたね。』と、眞吉も傍から口を出した。

『さうかな。併し、かう見たところ、別に似通つた人の顏がありさうでもないね。』と、木村は笑つて了つた。

その一廓は多少の拓かれた境域を造つてゐた。そして、その周圍には、ところ〳〵腰をかける位

のことは出來る石や、木の伐り株や、草生なぞがあつた。一同は思ひ〳〵のところに陣取つて休息することになつた。汗を拭くやら、煙草を出して吸ふやらしたが、とし子だけは涼氣が感ぜられるにも拘らずひとり腰を下ろさずに蹲んで小さな扇子を出してバタ〳〵と忙しげに使つてゐた。

俊一郎と木村とは同じところに並んで腰を下ろしてゐた。その少し横に眞吉が足を投げ出し、前にはとし子が横顔を見せてゐた。で、とし子は少しづゝ顏を回轉することによつて、誰とでも面と向つて話が出來るやうな位置にあつた。三人はとりとめのない雜談をしてゐたが、どうかした拍子でふつと話が杜絶える瞬間があつた。そんな時は流石に山中のことなので、洞窟の中や、そこらの崖からぽとり〳〵と垂れる水の滴と、直ぐ後ろの谷合を流れる水の音が際立つて耳につくのであつた。この邊でも冬になると時々鹿が出ることや、兎狩の出來ることなぞも話に出た。少し奥へ行けば、松茸の出るところもあり、栗や蕨なぞも豐富だと云ふことも口に上つた。

『全く山の幸が多いね。』と、木村は煙草の煙をふきながら羨ましさうに云つた。

『うん、君のところは海に近いから却つて山の方が珍らしいだらう。』と、俊一郎が云つた。

『無論さ。それに、一體僕は海よりも山の方が好きなんだよ。海はどうも明る過ぎ、散漫過ぎていけないよ。それに比べると山の方がずつと精神的の靈氣と云つたやうな感じを受けるからね。』と、木村は少し感傷的な調子で云つた。



『それはさうだけれど、海だつて隨分ショックを與へる時があるせ。僕は小さい時から山の方により多く親しんだせいか、海も惡くはないね。』と、俊一郎は答へた。

とし子は默つて聞いてゐたが、『私も海の方が好いと思ふわ。山でも淺間山とか、富士山とかなら行つて見たいと思ひますけれど……』と、好奇に輝く眼をあげて皆なの顏を見た。

『ははは ッ、としちやんは憶病な癖に物好きだからな。先刻石の門を怖がつた癖に……』と、眞吉は幾らか安易な氣持になつてゐたので冷かした。

そこで、皆なが一緒になつて笑つた。とし子も別に抗辯もしないで、ついて笑つた。

『そりや、山だつて好いさ。併し、靈氣を感ずるなんて云ふのはもつともつと深山でなくちや駄目ぢやないかね。』と、暫らくしてから俊一郎が云つた。

すると、木村はちよつと俯垂れて考へるやうな樣子を見せたが、『いや、そうでもないよ。僕は樹木があり、岩石があり、溪流があるところなら、どこでも好いね。』と、主張するやうに力强く云つた。そして、直ぐ言葉をついで、『要するに自然は好いよ。山でも森でも林でもね。エマーソンが云つてゐるぢやないか。森林の入口に立つて驚く俗世間の人は……とね。君も「自然論」の一部を讀んだつけね。』と、訊いた

『ちよつと覗いたが、あゝ云ふ思索的で高尙な哲人の云ふことはよく分らんよ。』

『そりや怪しからんな。僕は好きだね。暗誦してゐるところもあつた位だからね。よく覺えてゐたんだがすつかり忘れちやつた。森林の入口で驚きに打たれた俗人は大小賢愚と云ふやうな市井の評價を捨てざるを得ざるに至ると云ふんだからね。そして、この境地に入る第一歩と共に習俗の背囊を肩から落下させると云ふんだ。全くさうだからね。』と、感心しきつたやうに云つた。

とし子も感心して耳を傾けてゐたが、眞吉はそのペタンティックな態度を何となく氣障だと思つた。俊一郎だけはにや〳〵しながら默つて聞いたがたうとう聲をたてゝ笑ひ出したのであつた。

『何がをかしいんだね。』と、木村が怪訝さうに訊いた。

『いや、何でもないよ。どうだ、その習俗の背囊だけは捨てないやうにしてくれ給へよ。腹が空いて歸れなくなると困るからね。』と、俊一郎は風呂敷包を指しながら云つた。

『これか、ははは……こいつは兵糧だから大切にするよ。』と、木村は大きな聲をあげて笑つた。

續いてとし子も眞吉も一緒に笑つた。殊に眞吉は俊一郎がまづい洒落のやうなことを云つたのが大變氣持がよかつたので、木村の氣障な點にちよつと反感をもつたのも一掃されたやうな氣持になつた。



それから一同は嬉々としてそこらを歩き廻つたり、溪流のところへ下りて行つて冷たい清らかな水を手に掬つて飲んだり、ハンケチを濡らしたりした。いざ飯を食ふ段になつてから水筒を忘れたのに氣付いたが、一つの重箱を空けてそれに水を汲んで來て、お茶の代りにして、とし子なぞはきやつきやつ笑ひながら飲んだりした。

飯がすむと暫くとりとめもないことを饒舌つたり、煙草をふかしたりしてゐたが、木村が植物採集に出懸るのだと云つて、ひとり樹立の中へ這つて行くと、『私も行きますわ。』と、とし子が叫ぶやうに云つて後を追はうとするのであつた。眞吉は胸をどきりとさせた、同時に腹立たしさを感じた。それだけに自分も跟いて行くことは出來なかつた。

二人の姿は早くも樹立の中へかくれて了つた。俊一郎はと見ると、太い松の木に背を靠せかけて平然としてゐるのであつた。その樣子を見ると、眞吉は自分の忌はしい疑惑と嫉妬に驅られてゐる心の醜さをひどく恥づる思ひが湧き起つて來た

『君、東京へ行くつて本當かね。』と、俊一郎が靜かに話しかけた。

『うん、行くことに決心はしてゐるのだけれど、金が出來て見なければ當にならんよ。』と、眞吉は元氣のなさゝうな調子で答へた。

『金つてのは旅費のことかね。』

『學資はどうせもう伯父さんにも頼み難くなつたから駄目だが……つまり、その旅費なんだ。旅費と云つても、少し位の生活費位は用意してきたいからな。』
『それ位のことはおやぢだつて出してくれるよ。何なら僕が話して見ても好い。』
『願つて見て好いか知ら？、何だか云ひ出し難いからね。』
『僕が云へば構はんだらう。』と、俊一郎は好意の籠つた調子で云つたが、『君もやり方が下手だよ。僕のおやぢなんか何も分らないんだから、好い加減なことを云つて安心させとけば好いんだよ。君は餘り正直過ぎるよ、それに僻んでゐるからいかんのだよ。』と、教訓するやうに云つた。
眞吉はそんなことを云はれても俊一郎の人柄に對しては少しも反感が起らなかつた。何となくしみ〴〵と聞かれるやうな氣がした。で、『そりやや、實際だよ。併し、僕としても性格と境遇から云つて仕方がないんだよ。そのことは別としても、僕は獨立して働きながら勉强することに決心したから、伯父さんにも誤解されないやうに傳へて置いてくれ給へ。』と、眞面目になつて話した。
『まあ、一つ奮發してやつて見給へ。東京へくりや、僕も出來るだけの事はするよ。』
『あゝ、有難うー』
『何なら一緒に行つたらどうだね？』
『さう手っ取早くはいかんよ。大阪の方の仕事も片付けて置かなくちやいかんからね。』



眞吉がさう云つた時、どこかでとし子の華やかな笑ひ聲が聞えたので、眞吉ははつとした。
眞吉は相手に氣付かれないやうに、そつと樹立の間を透かすやうにして見たが、姿はちらとだに見えなかつた。何をしてゐるのだらう。どんなことを話してゐるのだらう。狹苦しい樹立の間をくぐるやうにして歩いてゐるのだから、手と手が觸れたり、身體と身體とが接したりするのに違ひない。さう思ふとむら〴〵と嫉妬の炎が燃え立つて來るのであつた。續いてとし子に對する憎惡をすら覺えるのであつた。
『木村つて男はどんな人間だね。』と、眞吉は少し苛々した調子で云つた。
『あれで才人だよ。學校の方も出來ない方ぢやない。』と、俊一郎は相變らずの調子で云つた。
『何だか少し氣障なところがありやしないかね。』
『氣障つて云ふ程のこともないだらうが、文科だけあつてどこかハイカラなところはあるがね。』
『さうだらうね。』と、眞吉は氣乘りのしない調子で云つた。
反感が露はに出てゐるに違ひない自分の言葉に對して、俊一郎が何とも思つてゐないらしいのが有難くもあつたが、併し、物足らなくもあつた。木村やとし子に對する信頼があるとしても、若い男女が二人きりでいつまでも出て來ないことに就いても、無關心でゐられる俊一郎の鷹揚と云つて好いか、鈍感と云つて好いか知れないが、兎に角、さうした心境が羨ましくも思はれるのであつた。

眞吉はじつとしてゐられなくなつた。この上、俊一郎から何かと話しかけられても、平氣でゐられないやうな氣がするので、

『一つ水を飲んで來るかな。』と、云ひながらひとり起つて溪流のあるところへ下りて行つた。

眞晝の日が輝かしく空に照つてゐて、翠微滴るやうな滿山の樹木が燃えあがるやうに見えた。あたりを見廻してゐると後の崖の上の樹蔭に人影が見えた。はつとして視線を凝らすと、それは紛れもなく、木村ととし子なのであつた。木村が足を投げ出すやうにして坐つてゐる傍に、とし子が媚るやうな表情をして覗き込みながら話してゐるのが、手にとるやうに見えた。大分かけ離れてゐるので　何を話してゐるのか全然聞えなかつた。が、それはまるで戀を語る男女の姿としか思はれない光景であつた。眞吉は直ぐ駈けつて行つて、何とか一言辛辣な皮肉でも云つてやりたいやうな衝動を感じたが、ぐつとそれを抑へた。そしてそこに蹲踞んで自分の姿を見られないやうにした。時々顏だけあげてその方を見たが、二人は時々さも樂しげに笑顏を見交はしてはまた話し續けるのであつた。

『矢張り自分の觀察は過ちでなかつたな。』と、眞吉はひとり心に頷いた。まだ戀に迄進んではゐないまでも、双方で好意を持ち合つてゐることだけは間違ひのないことだと思ふのであつた。今にそのあるかなきかの戀の芽もずん〳〵生長して行くに違ひないとも思つた。そんなことを考へてゐると、早く機會を捉へて大にとし子を難詰しなければ承知が出來ないやうな氣持にまで進んで行くのであつた。突然『オーイ、オーイ……』と、呼ぶ聲が直ぐ頭の上で聞えた。

それは云ふ迄もなく俊一郎であつた。うつかりして時を過してゐたことに氣付くと、眞吉は慌てて駈け上るやうにして、俊一郎のゐるところへ歸つた。

『何してゐたんだね。あいつ等もどつかへ行つて了つたぢやないか。』と、俊一郎は退屈さうに欠伸をしながら云つた。

が、眞吉は自分が二人の居場所を見たとはどうしても云ひ得なかつた。

『呑氣な奴だなあ。』と、俊一郎は再び大儀さうに云つた。

『まさか、路を間違へたのでもないだらうが、少し變だね。』と、眞吉はつい皮肉な言葉が口を衝いて出た。

が、俊一郎は格別眞吉が感じてゐるやうな氣持を感じてゐるらしくも見えなかつた。直ぐ起ちあがつて、『オーイ、オーイ』と、叫んだ。それが、二人を呼ぶと云ふよりも寧ろ、大聲を發して、それが谺を返すのを壯快がるやうな風に見えた。眞吉はまたしても、さうした何等のこだはりのない天空開濶と云つたやうな心持を羨ましく感じずにはゐられなかつた。

やがて、樹立の彼方から『オーイ』と、應へる聲が聞えた。それは疑ひもなく木村のであつた。續

いてとし子の笑ひ聲が聞える時分には、もう二人の姿の動くのがちら〳〵と樹の間から見え出した。

『やあ、失敬々々！』

手に薄をもつた木村は此方を見ると直ぐ少し極りの悪さうな眼色をして二人の顔を見ながら云つた。

後から出て來たとし子は女郎花と刈萱を見せびらかすやうにして、『好いでせう。これでも隨分探したのよ。』と、平氣で云ってつか〳〵と俊一郎の前へやつて來た。

『何だ？　それが植物採集かね。』と、俊一郎は冷かした。

『君のやうな無趣味な男でも秋草を見れば三十一文字の一首も思ひ出すだらうがね。』と、木村はわざと戯談らしく云つて、多少狼狽してゐる自分の氣持を紛らかさうとした。

『いや、おれはそんなことは感じない。それは何科に屬する植物かと云ふことを先づ考へるさ。』と俊一郎の方でもわざと冷然として空嘯いて見せた。

『眞さん、好いでせう。』と　とし子は嗅いだ調子で眞吉の前へもやつて來て淡紅色で緣をとつたハンケチで縛つたその一束の草花を眼先へつきつけるやうにした。

眞吉は調子を合はせて、直ぐ快活に返事をすることが出來なかつたが、白けきつた表情をして心を探られるのは嫌なので、『そんな草は澤山あつたでせう。僕もさつき谷川へ下りて行つた時、採つて來ようと思つたのだけど……』と、好い加減なことを云つてごまかした。

『さう、それぢや採つて來て頂きたかつたわ。』と、とし子は媚びを帶びた眼で皆なの顏を見廻してから云つた。

『それぢやとつてくればよかつた。併し、としちゃんは草花なんかゞ欲しいのぢやなくて外の用事があるのだらうと思つて……。』と、眞吉は、他の二人が何か話してゐるのを幸ひ、ちくりと刺すやうなことを云つて、にやりと笑つた。

『あら、どうして外の用事があるなんて云ふんですか。變なことを云ふ人ね。』と、とし子は少しむつとして怒氣を含んだ調子で云つた。

眞吉も直ぐつまらないことを云つたと思つた。同じ云ふなら、もつと時と場合を考へて眞面目に注告位はするつもりで云へばよかつたと思つた。が、云ひ出したからには仕方がないので、『變でも何でも構ひませんよ。僕はさう思ふから云つたまでゝ、別にをかしくも何ともないぢやありませんか。若し、不審な氣でもするなら、ゆつくり話すことにしますよ。こんなとこで何も云ひ爭ふ必要はありませんからね。』と、多少苛立たしい語氣を示した。

『それぢや、何故云ひ出したんです。あなたが變なことを云ふからだわ。』と、とし子は拗ねたやうな素振りをして外方を向いて了つた。

その時、俊一郎が大きな聲で、『どうだ。もうぼつ〳〵歸らうぢやないか。』と、命令するやうに云つた。

眞吉は氣持を惡くしてゐる矢先で、このまゝこゝにゐて、同じ氣分が續くのはたまらないことだと思つた。で、無論言下に贊成した。木村は既に相談したものらしく、もう風呂敷包の始末なぞに手をつけてゐるのであつた。

『まだ暑かなくつて？』と、とし子だけは不服らしく云つた。

『暑くなんかありやしないよ。だん〳〵日がかげつて來るから涼しくなる一方だ。田舍は山が高いから、從つて日の入るのも早いわけだからね。』と、俊一郎が云つて、ちよつと帶の間から革紐のついた時計を出して見たが、『戯談ぢやないもう四時近いぜ。』と、慌てたやうに云つた。

『あら、四時過ぎですつて？』と、とし子も流石に驚いた。

『さあ、歸らう、歸らう！』と、俊一郎が追ひたてるやうに云つた。

山を下り初めたのは、それから間もなくであつた。皆なは多少とも疲勞を感じてゐたが、それでも、谷川の水を掬つて飲んだり、澄みきつた山氣に觸れたりしたので、爽かな、輕い氣持になつたやうに見えた。が、眞吉だけは眉のあたりに暗い色を湛え、氣重さうな顏をしてゐるのであつた。

眞吉は全身に輕い疲勞を覺えて足を引きずるやうにして歩きながらも、快活に話し續けてゐるとし子の姿態を見ると、何となくセンジュアルな魅惑を感じさせられるのであつた。で、どうかすると汗ばんだ矜頸のあたりや額際を見たり、少しメリンスの單衣の裾を褰げるやうにする毎に現はれる肉付の好い足頸のあたりに眼が吸ひ寄せられるのであつた。すると、自分ながら厭はしいやうな妄想がむら〳〵と湧きあがつて來て、若し、この成熟しきつた一人の女性の肉體や精神を木村なぞに奪はれて、思ふまゝにされるやうなことがあつたらとちよつと想像に浮かべて見るだに、たまらない苦惱を湧き立たせられるのであつた。で、眞吉ひとりはぼんやりとして話の仲間にも入らず默默として歩いてゐるのであつた。

――ふとした心の緩みから、紅燈の巷に足を踏み入れた思ひ出なぞを、一種苦惱の伴なつた感じで思ひ返して見たりしてゐると、妹のいと子のことに迄、不知不識思ひ及んで行くのであつた。そのいと子のやうな白痴の女にすら性の眼覺めは來るのだ。恐らく村の若者の誘惑からのみでなく、彼女自分からも進んで彼等に接觸したがつてゐるのに違ひないと思ふと、それが最も近い肉身であるだけにたまらない嫌惡と、戰慄するやうな思ひに驅られて行くのであつた。もうそんなことは一切考へまい、心の眼をさうしたものから背けようと焦りながらもどうすることも出來ないのであつ

た。

『行く時は歩き方も早かつたが、歸りは皆な遲いね。』と、先頭に立つた木村が後向きになつて云つた。そして。『とし子さんなんか案外意氣地がないぢやありませんか。』と、輕く揶揄つた。

『だつて女ですもの、くたびれるのは當然ぢやありませんか。』と、とし子は不平らしく訴へるやうに云つた。

『弱蟲だな。僅か二里や三里の道が何だ！』と、俊一郎も元氣よく云ひ出した。が、さう云つてふと眞吉の方を見ると、『君どうかしたのぢやないかね？』と、不審さうに訊いた。

『いや、何でもない。つい、いろんなことを考へてゐたんだよ。』と、眞吉は寂しい微笑を浮べた。

いつの間にか遙かに中田家の建物の一部が見えるやうなところへ來た。もう黄昏の蒼い靄がたなびき渡つて、ところ〴〵に散在してゐる家々からは夕餉の煙が靜かにたちのぼつてゐた。

一同が中田家へ歸ると、もう風呂を沸かしたり、晩餐の用意を初めたりして、母親のおますなぞはてんてこ舞をして働いてゐた。そして兄妹を初め木村や眞吉が仲好くして一日の行樂を共にして來たことを心から滿足に思つてゐるらしくにこ〳〵顏で迎へてくれた。それに對して各自思ひ〳〵に如何に愉快に遊びであつたかを語り合つた。

併し、眞吉だけは疲れたやうな顏をして默つてゐたが、おますが自分に向つて云ひかけようとするのに氣付くと直ぐにひき取つて、『伯母さん。伯父さんはもう歸られましたか。』と、訊いた。

『伯父さんはまだゝけどもさう間はないやろから、ゆつくり遊んでお行き。』と、おますは何氣なげに云つた。

『さうですか、それぢやまた明日でも來ませう、私は家の方にまだ用事がありますからね。』と、力無げな調子で云つた。

おますはさも意外だと云ふやうに、

『そんなことがあるものかな、折角來てくれて、皆なと一緒に遊んで來たのやから、まあ御飯でも食べてからお歸り。風呂もよう沸いとるし……。』と、熱心さを籠めて引きとめようとした。

木村やとし子はもう座敷の方へ行つてそこには姿は見えなかつた。が、その時ふいとこちらへ出て來た俊一郎が話を聞きつけて、

『君！　歸るなんていやだぜ。久し振だからゆつくりして行き給へよ。泊つて行つても好いぢやないか。』と、頭からきめてかゝるやうに云つた。

『うん、有難う。』と、眞吉は仕樣事なしに云つたが、俊一郎が彼方に去ると、おますに向つて頑强に家へ歸ると云ふことを云ひ張るのであつた。皆なのものが後で氣を惡くするとは承知してゐても眞吉の感情としてはどうしてもこのまま皆なと共に飯を食つたり、話をしたりすることには堪えら

れさうに思はれないのであつた。それに木村でもゐなければとし子と話をする機會をつくるとか、また伯父の歸るのを待つてゐても好いのだが、それは全然望みのないことは分りきつてゐた。だから、寧ろ、今日は歸つて氣持をかへて出直して來る方が如何なる意味から云つても得策であると思つたのであつた。

『私、實は伯父さんにゆつくりお目にかゝりたいと思つてゐるのですから、出直した方がよからうと思ひますよ。今晩お歸りになるとしたところで、疲れて居られるのにいろんなことをもちかけるのはすまないですからね。』と、眞吉は改つた調子で云つた。

おますは少し不機嫌さうな表情をしたが、

『えらいむつかしいのやな。そんなこと云はずに遊んで行けば好いのに。連れもあることやで。』と繰返し云つて見たが、腹の底ではもう斷念してゐるらしかつた。

眞吉は皆なが引きとめるのを振りきるやうにして辭したのは、それから直ぐであつた。果して、俊一郎や木村がある不快を感じたらしいことは、その顏色や、口吻で察知することが出來た。それは、眞吉自身にとつても嫌な氣持であつたが、もうどうすることも出來なかつた。唯、とし子がどんな態度を示すかは無關心でゐられないやうな氣がした。

眞吉が門の方へ向つて歩みかけた時であつた。いつの間に出て來たのかとし子が横合からつかつかと出て來て、

『眞さん、いつ來て下さるの？』と、はら〳〵しながらそつと囁くやうに訊いた。

『としちやんは僕に用事なんかないだらう。だから來たつて來なくつたつて好いぢやないか……』

と、眞吉は不愛想に云ひ捨てたまゝすた〳〵と門に向つた。